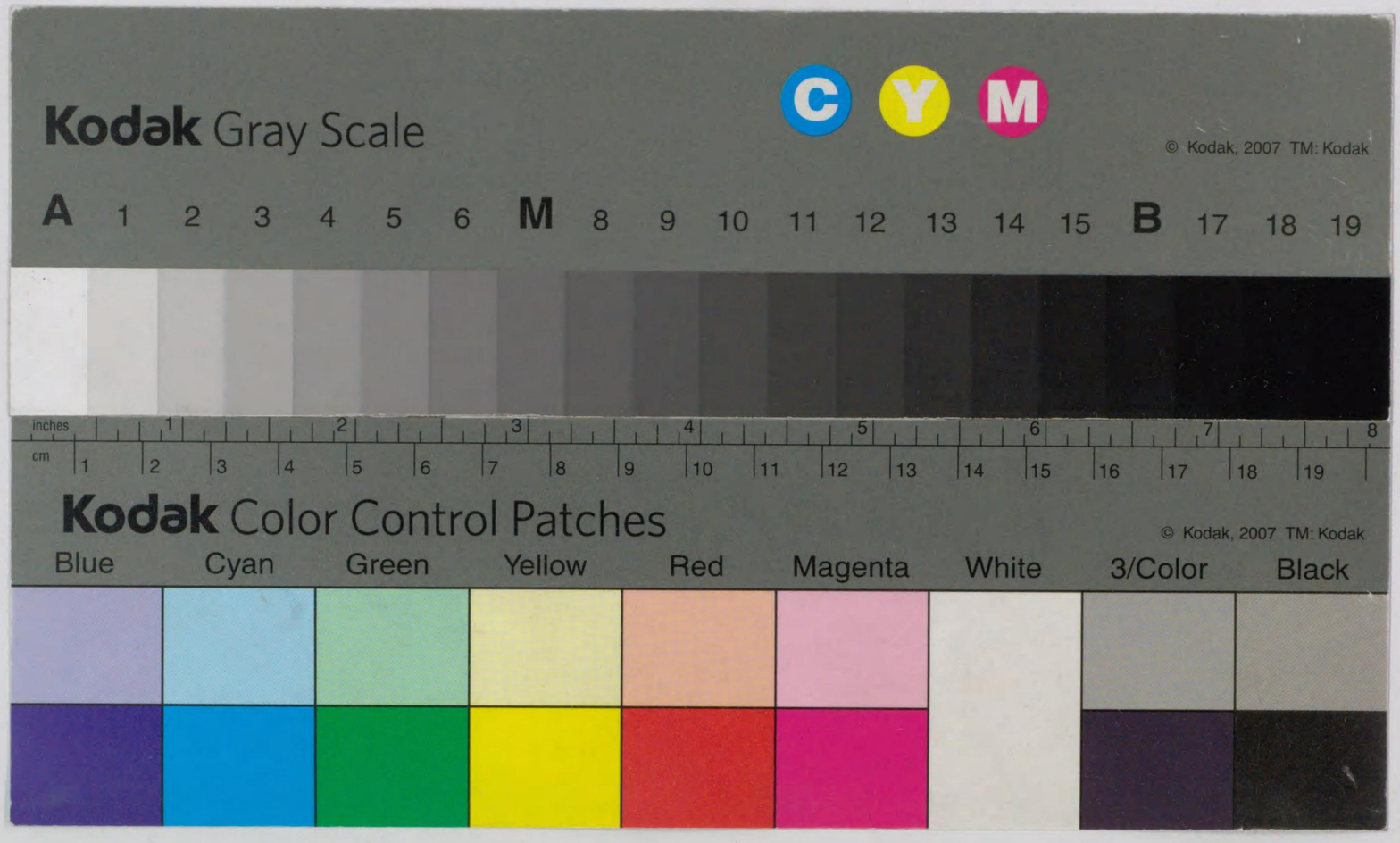

585
54
585-54
12005015236 93

QL .629

33

21420
ぬ

早稲田大學教授 永井一孝著

明治文學史

文献書院發行

昭和四・六・内・三

595-54

緒言

一、本書は私が多年企圖しつゝあつた國文學史の一部として公にするものである。

一、文學史は、それが既に史といふからは、文學の史的考察を目的とすることは論を俟たない。文學史は、それが既に史といふからは、文學の史的考察を目的とすることは論を俟たない。文學が時世の流に隨つて如何に展開したか、現代の文學は如何なる徑路を經て今日あるを致したかを考察記述すべきである。かの徒らに個々の作品の解題批判を羅列し、妄に作家の傳記逸事を叙述しただけでは、縱令それが年代順に配列されてあつたとしても、未だ完全なる文學史としては、須らくその間の關係を討尋し、その展開の理法を闡明しなければならぬ。作家は時代が生み、作品は作家の個性の發露である以上は作品の解説批判は勿論、作家の閲歴境遇、時代の精神推移をも審かにせねばならぬ。私はかくてかうした方針の下に、この國文學史の編述をば企圖したのである。然しながら、この事たる、なか〳〵容易な業ではない。上代の事は文獻の不備によつて事相の正確を期すること難く、現代の事は複雑にして且つ動搖常なきによつて的確なる判斷を下し難い。然し、史としてはどこまでも事實の正確を期さねばならぬ。いかなる解説批判も、正確なる事實の

上に立つて、そこに始めて價値は生ずるのである。史筆を弄するもの、世間往々事實を疎外して得々たるものは無きか。私は之を疑ふ。本書は事實の正確といふ點に深甚の注意を拂つた。

一、本書は、もと早稻田大學出版部發行の「文學講義」に掲載したもの〻一部に訂正增補を加へたものである。著者が最初かの「講義」に國文學史を掲載し始めたのは、「日本文學史」と題したもので今を距る三十五年前、明治二十八年一月であつた。爾來稿を改めること四回、今日も「國文學史」と題して尙連載してゐる。本書は、即ちその第三回目の講義「國文發達史」と題して掲載したもの〻一部に訂正增補を加へたのである。故に、本書はかの第三回目の「講義」とも異なり、又現在連載しつ〻あるものとも勿論異なる。講義錄には紙數に制限のあることを、私は常に遺憾に思つた。今、本書を公にするに當つては、いかなる大きさにするのも隨意であることを喜ぶ。然し普く世上に弘布せんとすれば、又妄りに彫大なるを許さぬ事情が存せぬでもない。私はそれやこれやを斟酌して本書を編述した。

一、故に、本書は上述した方針の下から眺めると、自分ながら遺憾に思はれる點が多少無いでもない。就中、作品の解題や作家の傳記などを殆ど全く略述するを餘儀なくされたことは、その一である。最初計畫してゐた主なる作家の寫眞及び作家の筆蹟などを掲載することの出來なかつたことは、更にその大なる一である。本書が他日改版の機會に接することあらば、それらの寫眞だけなりとも挿入して、作家の俤をしのぶよすがの一端ともならしめようと思ふ。

一、本書は事實の正確を極力企圖したとはいへ、私の微力と繁劇とから生ずる意外の思ひ違ひや誤謬があらうかと、衷心忸怩たるものがある。大方の諸君幸に叱正の勞を惜しまざらんことを希ふ。

昭和四年二月紀元節の日

著者識

明治文學史

目次

緒言 …… 一
總說 …… 一七
第一期　舊習破壞時代 …… 一七
第一章　新文明の宣傳 …… 一七
第二章　舊文學の殘影 …… 二六
第三章　新文學の曙光 …… 三七
第二期　國會開設前後 …… 四五
第一章　逍遙と四迷 …… 四五
第二章　東西思潮の交錯 …… 五四
第三章　硯友社派と露伴 …… 六三

第四章　寫實小說の反動……七六
第五章　劇界の動搖……八六
第六章　新體詩の新調……九七
第三期　日清戰役後……一〇五
第一章　日清戰役と文壇……一〇五
第二章　心理描寫の作風……一一二
第三章　俳句の革新……一二四
第四章　和歌の革新……一三四
第五章　新體詩の隆盛……一四三
第六章　浪漫的運動……一六五
第七章　小說と實世間……一七三
第八章　劇壇の消長……一八三
第四期　日露戰役後……一九四
第一章　評論壇の活躍……二〇八
第二章　自然主義派の小說……二一五
第三章　非自然主義の小說……二二三
第四章　自然主義の分化……二三三
第五章　詩壇の活動……二三五
一、新體詩……二三五
二、和歌……二三一
三、俳句……二三三
第六章　劇壇の新氣運……二四〇
人名索引

目次

明治文學史

早稲田大學教授 永井一孝著

總說

「攘夷、開國、また佐幕、勤王と相分れて紛擾を極めた時局は、急轉直下して大權の返上となり、廢藩置縣となつて、明治維新の大業を成した。」維新の變革は有史以來未曾有の變動であつた。ひとり七百年の久しい間政權を壟斷した武家政治の顚覆のみではない、天皇親政の下に、土地は公田、人は公民となつて、遠く大化革新の古に復したといふのみではない、ましてや郵便電信の設備がまだるい飛脚三度笠に代り、瓦斯燈電燈が薄暗い行燈に代つたのみではない、我が國のすべてに亙つての大變動であつた。「舊い文物制

昭和25年7月10日
P.3～16
落丁

度風俗習慣は全然破壊せられ、舊い道徳も信仰も文學美術もすべて一樣に排除せられた。破壊につゞく建設が狂瀾の如き勢を以て始まつた。近代文明の曙光と稱せらるるルネツサンスが齎し來つたあらゆる歐羅巴の文明や、血と罪とを以て作り成した佛蘭西大革命の後に生れ出でた電氣と鐵の十九世紀文明をば、悉く收拾して自家藥籠中のものにならしめようとする努力がこゝに起つた。夙に支那の文明を採り、印度の文物を迎へて、東洋の精華を萃めなした我が日本は、更に歐洲の文明をも融合し消化しようとする偉大な事業に、驀然として企圖し着手しようとした。もとよりいつの世にも免れない頑迷な舊態維持の聲は屢、放たれた。それと共に西洋の文明に眩惑せられて一向盲從する輩も少くなかつた。さきの開國論と鎖國論とは内容をこそ異にすれ、その聲を新にして頻りに繰り返される觀があつた。然しながら、乖戻衝突は大局より見れば畢竟さゞ波に過ぎない、幾度か寄せては返すものゝ、やがては膨湃たる巨濤を起して驀然融化の岸へと向ふのである。よしや内容の充實といふ點より見れば未だしい所はあらうとも、よしや過渡時代の稱は免れることが出來なくても、融化の外形だけは略、完成に近づいた。歐米の學者が史上の奇蹟を以て呼ぶのも理といはねばならぬ。われ等の祖先は嘗て支那の文明を撮合し印度の文化を攝取し、大化革新を成し遂げて、

第一期　舊習破壞時代

第一章　新文明の宣傳

明治六年十一月、東京守田座に於いて、一の新狂言が演ぜられた。それは當時の人々が口癖にする文明開化の意を童幼にも理解せしめ、また電信機・蒸氣船や新聞紙の功用を示さうとするものであつた。實に維新後十年の間は、この文明開化を實現するに忙しく、種々の手段が講ぜられた。その深い意味を知らぬながらも、たゞ文明開化に憧憬した。その憧憬の前には一度設立せられた皇學校も假學校も廢せられた、江戸時代に於ける漢學最高の府であつた昌平黌も大學東校と稱せられて、西洋醫學の研究所となつた。藩書取調所から洋書取調所となり、ついで開成所となつた西洋學の研究所のみはひとり榮えて、二年には大學南校となつた。十年にはそれを基礎として東京大學の設立を見るに至つた。されど、世の趨勢がかくの如く成り行くには、先覺者の起つて之を導くものがなくてはならぬ。三田翁福澤諭吉は實にその第一人であつた。慶應義塾の前身はすでに安政五年江戸の藩邸に開かれた家塾に於いて、之を見ることが出來

る。規模大を加へるに及んで、慶應三年芝の新錢座に移したが、この時には堂々として高く世に標榜する所があつた。曰く、「抑〻洋學の以て洋學たる所や、天然に胚胎したる物理を格致し、人道を訓誨し、身世を營求するの業にして、眞實無妄細大備具せざるはなく、人として學ばざる可らざるの要務なれば、之を天然の學と謂うて可ならんか」と。さらば、その洋學を研究するには何處の語を以てしたかといふに、我が國文明の指導者たる亞米利加の用語、卽ち英語であつた。德川時代に於てその勢を專らにした蘭語は、その母國が歐洲に於いて國勢の不振を來すと共に、日本の語學界にても地位を英語に奪はれたのである。蘭學の大家前野良澤を出した豊前中津濱に生れた諭吉その人も、最初は長崎に、次には大阪の緒方洪庵に蘭學を學んだのである。然しながら、炯眼は早くも英語の世界語たるを見、『英蘭對譯字書』を唯一の便として、鋭意英語の研究に力め、つひに堂に上ることを得た。この英語を以て亞米利加の學風を唱へる義塾は、もとより功利實用を主とするものであつた。しかし、その學を弘布するためには幾多の困難と戰はねばならぬ、生命すら危難に瀕したこともあつた。されど、不撓不屈の精神は、よくその業を全うした。明治元年五月上野戰爭の日、砲聲遙に芝の森を搖がす折にも、なほ英書ウエランドの經濟書を講じてやまなかつたといふが如きは、よくその熱誠を窺ふべき美談ではないか。かくて、維新の後も制すべき勁敵はその周圍にあつた。廟堂の地に戀眷する官僚萬能の主義。昔ながらに輕躁浮薄な民衆の奴隷根性。これを打破するために自ら平民の典型を以て任じ、獨立自尊の氣風を鼓吹した。その一生を擧げて一度も官途に就かず、育英と著述とに力めたのはこれが爲めであつた。

諭吉が著述は塾の經營と共に維新以前から公にされた。國中多數の人民を眞實の開國主義に引き入れようとする一事は、實にこの洋學者の本領であつた。西洋文明のために東道の主人となり、一面には漢學の固陋を排斥し、一面には洋學の實益を明かにしようといふ抱負を以て、幾多の書を公にしたのである。中にも文久元年第二回の洋行として幕使に隨伴し、英佛蘭獨露等の文明に接して歸るや、その見聞を錄した『西洋事情』は我が混沌たる時代に於ける一道の光明であつた。人は始めて歐洲の歴史地理を知り、政治的制度を知ることが出來た。維新當時の法令の如きも、之に負ふ所が少くなかつたといはれてゐる。その書を著はすには、いかにして幼稚な民衆を啓發すべきかと、種々の工夫を凝らした。『窮理圖解』は自ら悟り人に語るに物理の原則よりよきはなしと考へて、種々の物理書の中から拔萃したものであつた。『世界國盡』は寺小屋の手本なる「江戸方角」や「都路」に倣つて、世界の地理歴史を知ることが江戸の方角を知る如く

ならしめようとして著はしたものであつた。

新しい思想を盛るには、また新しい器を要する。粗放な漢文と古雅な和文とは、到底新しい思想を表出するに適しない。平民を以て任じた諭吉は、また明晰平易な一平民文體を創めた。その師洪庵は常に說いていつた「洋書の譯に難字難文を用ゐるは、徒に讀者を苦しむるに過ぎぬ、文字は知る限りを以てせよ、辭書の詮索は無用の業」と。この趣旨を奉じ、また蓮如上人御文章の風體を範とし、行文の都合次第に俗語をも漢語をも遠慮なく使用した。「今より次第に漢學を廢する用意專一なるべし、その用意とは文章を書くに難しき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり」とは、明治文體創始の卓見である。「應有の材料云々」と記して心平かならず「有合の品」と改めて始めて滿足した事もあつたといふ。『世界國盡』すべて七五の調を以て行り、平淡な地理や歷史の叙述中時に詩趣の掬すべき所があつて、よく吟誦するに足りる。これぞ後の新體詩の先蹤ともいへよう。これが諭吉の功の文學史上に特筆しなければならぬ所以である。

義塾の學風を實利とすれば、これに道德修養の色調を深くし、諭吉の主張を急進とすれば漸進の態度を以て漢學の特長をも沒却しなかつたものは、中村敬宇の同人社である。その社は明治六年に建設せられたが、それに先つて、敬宇には『西國立志編』の著があつた。敬宇はもと幕儒の出で、夙に英國に留學して、その國民の健全著實な點に嘱目する所があつたが、歸來人心の舊染を去るを焦眉の急として、まづこの著を公にした。これは敬宇の英國を去る時、友人フリーランドの贈つたスマイルスのセルフヘルプを飜譯したものである。その流暢雅健な譯筆は一方ならず世にもてはやされて、かの『西洋事情』または內田正雄の『輿地誌略』と共に、發售數萬部に及び、明治時代に於ける三大出版の一と稱せられた。ついで『自由の理』『西洋品行論』等を公にした。これ等の書を見、その人格の高潔を聞いて、慕ひ集るもの多きを加ふるに及んで、同人社の開校を見るに至つた。その導く所は一に實踐躬行であつた。かくて明治の新文明も功利實益から一歩を進めて、道德修養の精神界の改善に著手したことが認められる。

義塾同人社を二大私塾として、その他箕作秋坪・鳴門二郎吉福地源一郎尺振八等も各〻塾を開いて生徒を收容した。多きは三百、少きも數十を下らなかつた。政府でもまた教育の方針を確立し、二年には府縣に小學校を設け、三年には大中小學の規則を定めるに至つた。政府はまた資を供して種々の書を飜譯せしめて刊行し、民間の著述家と相俟つて、文明の福音を說き、世界的知識を啓發した。『經濟原論』『泰西通鑑』『西洋新書』『修身論』またさきの『輿地誌略』の如きは、それである。

かゝる間に、新島襄は京都に同志社を設立した、時は八年。襄は維新前に國禁を犯して米國に渡り、神學を研究して歸朝するや、眞の文明は宗教を基礎とせねばならぬことを思ひ、基督教を世に傳へようとした。その努力の結果は十年の後に始めて現はれたが、兎に角に明治文明も漸く心靈上の問題を考へることが出來得る程の餘裕を生じたのである。精神的活動もこゝに緒を開き、やがて來るべき新文學も、その氣運をこゝに醸成することを得た。これは一に先覺者の賜である。

明治の新文明の基礎は、また他の方面からも築きあげられた。新聞雜誌の刊行が一般民衆をして文明開化を解せしめた功は、意表に出づるものがあつた。德川時代には新聞といふものがなかつた、強ひて類似のものを求めるならば、市井の出來事を巷々に讀賣した瓦版が、その一つか。また、文久二年に洋書取調所に於いて、爪哇バタビヤにて發行した蘭字新聞を飜譯せる官板バタビア新聞といふのがあつた。これらが今日の新聞紙の體裁を成したものともいへる。次いで米國諸新聞の飜譯香港寧波の支那新聞に訓點を施して飜刻したものが、相踵いで出でた。これ等は時に應じて出でたものであつたが、その定期刊行の形を取つたのは、岸田吟香が橫濱に於いて出した「新聞紙」と題するものである。內容は西洋新聞の飜譯。當時は未だ活字がなかつたから、吟香等自ら版下を書いて木版に刻したが、半紙五六枚の小冊子の形であつた。慶應二年には英國人ペーリーの「萬國新聞紙」が出で、柳川春三の「西洋雜誌」が出た。後者は雜誌刊行の先驅。春三はまた明治元年に「中外新聞」をも出した。この年太政官から今の官報の基をなした「太政官日誌」が出版せられ、又「遠近新聞」「新聞事略」「もしほ草」「內外新聞」等が出た。その中にあつて最も振つたのは、福地櫻痴の「江湖新聞」であつた。櫻痴のこれを創刊したのは、かつて幕使に隨行して英國にあつた時新聞の勢力のよく國論を左右するを見て、之に倣はうと期したのである。幕府は仆れたけれど、薩長は第二の幕府を作らうとする、これ維新の目的に背く、これを矯めざるべからずといふ主義を以て時事を論じた。されど、未だ活字も活版もない世のかなしさには、木版に彫つて馬連摺とし、半紙二ツ切を十枚か十二枚に綴つたもので、內容も雜報があり、寄書があり、論文があり、草稿は皆櫻痴の手から出でて、淨書の如きは勿論、時には自ら版下をも書き、三日若しくは四日毎に發免するの有樣であつた。しかも發免部數の多いことを以て稱せられた。已に當時の政府のなす所を喜ばない所から、幕府の脫走兵の勝利を喜び、或は戰況の虛報、政治上の虛聞を作爲して記載したので、發行を禁止されるに至つた。なほ累は他にも及んで諸新聞の發行禁止となつたが、やがて時世の要求は間もなくその解禁となり、

また鉛活字の製造も出來て、愈〻健實な發達を遂ぐるに至つた。三年十二月「横濱毎日新聞」が洋紙活字版を以て日刊の發行を創め、始めて新聞紙の體裁を完うした。五年には「東京日々」「郵便報知」、六年に「朝野」、八年に「曙」が出でて、所謂五大新聞が相對峙することとなつた。記者にはまた論客政治家の選良がこれに當ることとなつた。福地櫻痴、岸田吟香、末松青萍、栗本鋤雲、矢野文雄、藤田茂吉、大内青巒、末廣鐵腸、成島柳北等がそれであつた。

櫻痴と柳北とは當時の雙璧、互に相下らなかつた。櫻痴が新聞發達に貢獻した功績の一は、社説欄を創めたことである。櫻痴が七年に「東京日々新聞」に入社して、公然署名して社説を載せた以前には、新聞紙上たゞ論説の欄があるばかり、多くは社外の論客の手になることとて、個々別々全然主義を異にしたものが幷び載せられてゐる狀態であつた。櫻痴が一度「吾曹子云々」と叫んで一世を驚かしたのは、新聞の價値を高めたものといはねばならぬ。柳北は朱學に通じ、將軍家定及び家茂の侍講となつたこともあつたが、また日新の學にも通じて居た。櫻痴は幕士の出で、安積艮齋の塾に學び、また英學をもよくした。二人は行跡の相似た上に、縱横の奇才をも同じくした。たゞ櫻痴の文は達意を主とし、柳北のは洗煉を旨とした。櫻痴は『平家物語』風の文辭をよくし、柳北は漢文の規矩の中に洒脱滑稽を寓するのであつた。柳北が「朝野新聞」を主宰するや、その雜報に得意の筆を揮つて奇警な諷刺を盡し、その末に漢詩を載せた。一度捨てられようとした漢詩は、かくしてこゝに新聞紙上重要なものゝ一となつた。

これ等時事問題に就いて論議する大新聞以外、所謂小新聞があつた。通俗を旨とし、漢字にはすべて振假名を附ける。早くから二三種あつたが、皆中途にして廢刊の厄に逢つた。然るに、七年に「讀賣新聞」、八年に「平假名繪入新聞」及び「かなよみ」等出でて、一般に歡迎せられた。中にも「繪入新聞」の喝采を博したのは、落合芳幾等の挿繪また前田香雪の興味ある雜報とによるのであつた。殊に、香雪が「金之助話」とて事實を基として脚色した小説からばしなくも新聞小説の一體が創まつた。同紙上に西南の役に於ける薩人澤本彦右衞門が勇敢な最後を記載したのを、十一年新富座に於いて劇に脚色して演じたことや、また岸田吟香が臺灣の役に戰況を視察して其の記事を「東京日々」に連載したことや、或は十年の戰役に其の詳細な戰況を各紙上に揭載したことなどは、皆新聞紙を盛にしたもので、或は販路を廣め、或は文藝の趣味を豐富にした。而も、その文藝の趣味は未だ德川文學を繼承した戲作者をして筆を取らしめるより外はなかつた。明治文學は新聞紙によつて創まり、戲作者は新聞紙によつて復活した。その詳細の狀は

章を改めて記述しよう。

西洋雜誌に始まつた雜誌は、未だ新聞紙と同一樣の事を載するに過ぎなかつた。七年「明六雜誌」の出づるに及んで、始めて其の內容を具備するに至つた。この雜誌は森有禮を主として、西村茂樹、加藤弘之、中村正直、福澤諭吉、箕作秋坪等當時の思想界の先覺者を網羅して社員とした明六社の機關雜誌で、學術の講演會と相俟つて、新文明の宣傳を任とした。史學語學の研究雜誌「洋々社談」も出で、同人社からは「文學雜誌」が出で、やがて柳北の「花月雜誌」森春濤の「新文詩」の如きものも出でた。「花月雜誌」は柳北が萬丈の氣を吐くの地、縱橫の筆致を示した。諸家の寄稿の詩文に悉く朱墨を加へ、或はその選擇を嚴にした。かくては販路に障りあるべしと人の說けるに答ふるやう、「こは明治文壇の指南車を以て擬するもの、大家の作を載するは其の旨趣を實現せんためなるが、もし愚劣なるものを載せずば賣れずといはゞ、一部も賣れずともよし」と。その抱負の程を見るべきである。「柳橋新誌」を讀むもの、蓋し之を繙いて相照し見るの要があらう。「新文詩」が載する所の詩文の作家は皆名流、流派の別なく之を載せ、作家又之に列せざるを恥とする程であつた。漢詩はかくて再び勢をなし得た。新思想の鼓吹に忙はしい雜誌界も、かういふ趣味を顧みる餘裕を生じ、また「團々珍聞」の如き滑稽諷刺に專らなる雜誌をも出すに至つた。かく新文明宣傳の功を奏うした新聞雜誌に萠芽を發した明治文學は、前述の漢詩文と續きもの丶人情小說とのみであつたらうか。なほ他に全然趣を異にする西洋文學の曙光をも認めることが出來た。

第二章　舊文學の殘影

新聞小說のつゞき物によつて再び手腕を揮ふことを得るまでは、前代から遺存してゐる戲作者は、手紙などの代筆によつて漸く其の日を送つてゐた。さなくば長篇の草雙紙の未完結のものを嗣出するを以て唯一の業とした。それも單に過去の好評の惰力によつて、正月と盆との二期に書肆を賑はすに過ぎなかつた。種員の『白縫譚』は明治十六年に至つて完結され、二世春水の『西國奇談』も八年に至つて完結された。仙果の『八犬傳犬』草紙』も六十篇にて完結したが明治以前に已に五十編を出してゐたものであつた。かくの如き補綴をのみ事としたのは、作家その人に馬琴や種彦の名手がないにもよるが、猶時勢の然らしめる所といはねばならぬ。かゝる輩にとつては新聞の小說は此の上もない壇場であつた。日々その紙面を異にする性質上、また讀者の興味を繫ぐ手段として、局面の變化を多からしめることを要した。草雙紙は實にこれを得意とするものである。彼等が進んで筆を鼓したのは、たゞ衣食の資を得ようとするのではなかつた。故に、一度「東京日々」の條野採菊「平假名繪入」の三世種彦卽ち高畠藍泉・二世春

水卽ち染崎延房或は「團々珍聞」の梅亭金鷲の作を見れば、いかに御家騷動の題材によつて、その脚色を複雜にし、その趣向を錯綜せしめたかを知ることが出來る。然しながら、さういふ草雙紙系のもの、外に、中本の趣を傳へた他の優れた作者もあつた。假名垣魯文がそれである。また新聞小說ではないが『復古夢物語』『近世櫻田新聞』『春雨文庫』等を著はした實錄體の一派もあつた。これらは維新前後の事件を脚色したもので、もと婦女童幼の娛樂を目的とする所から、また草雙紙の趣向を假りるのであつた。

魯文は實に戲作者の殿將で、その閱歷を顧ると、同時に當時の戲作者の典型をも明かにすることが出來る。文政十二年に江戸の貧しい魚屋に生れた魯文は、幼くして或諸藩御用達の家に丁稚の身となつた。そのいろはを習ひ覺えるや否や、拾ひ讀みに京山の『娘評判記』を讀んで、その筋を母に語り聞かせた彼は、奉公の後にも一九・三馬の書を手に放たず、僅かの小遣錢を得ると必ず合卷物を購つた。いつか戲作者を以て身を立てようと志し、私にその道の修養に力めた。凉窓露蘭や米羅坊守一に俳諧を學び、千種庵諸持に狂歌を學び、やがてこれ等の勸に從つて狂言作者で戲作者を兼ねた花笠魯介の門に入り、英魯文と號した。時は天保十年、その處女作を『政談靑砥碑』といふ。之より戲作者を氣取り、三馬・京傳の蹤をふまうとて遊里に出入し、常盤津清元の稽古所に潛り込

みはては主人の戒をも意にとめで出奔するに至つた。かくて諸所を流浪し、漸くに江戸に歸り、『亞米利加口說ヤンレ節』等の糊附本に糊口の資を得、また美音を自慢に讀賣して歩いた。それがはからずも世の喝采を博し、合卷物の注文をも受けるやうになつた。湯島の寓居に談笑諷諫滑稽道場御誂案文認所江戸作者鈍亭魯文の看板を掲げたといふのは、その頃のことである。かくて、彼は漸くその名を知られるにつれて、常に戲作者狂言作者と交り、その會合に出入して三題噺興畫合に浮身を窶すと共に、また家にあつて雜書に目を さらして學ぶ所があつた。慶應三年に福澤諭吉の『世界國盡』を滑稽化して、『苦界文盡』を著はしたが、明治に入つては『窮理圖解』によつて『胡瓜圖解』を作つた。また『安愚樂鍋』といふのは、半解の文明開化を口にする手合が、牛屋の店に鍋を圍みてのをかしさを諷したものである。然しながら、彼の傑作は『西洋膝栗毛』にとゞめをさすべきであらう。

『西洋膝栗毛』はかの『西洋事情』を基とし、當時佛蘭西博覽會見物から歸つた富田砂筵の談話を聞き、また岡丈紀の飜譯によつて地理人情の敍述を加へ、彌次北八の三世の孫等が英國渡航の滑稽を以て一篇の趣向をなした。しかしながら、かの一九の『膝栗毛』の如く、たゞ酒落のめし酒落散らすそれとはやゝ趣を異にして、中に微かながらも諷刺の動くものあるを見ることが出來る。西洋心醉の徒が朧げな知識を以て文明人と自任して舊弊を罵るをかしさ、歐洲文物の燦たる狀態に眩惑されて呆然自失し、やがて盲從阿附する狼狽の愚狀、渾然たる維新後の時世がさながらに浮動してゐる趣がある。恐らくは、魯文はこれを以て新時代の來れるをも知らで、なほ舊習に囚へられた徒を嘲つたものであらうが、その人はすでに全然舊趣味に生きてゐるもの、故に滑稽も卑陋にして一九輩の後を襲ふに足りるのみであつた。

六七年の頃「橫濱每日新聞」の雜報記者として筆を取つたが、八年「假名讀賣新聞」を創刊して、つねに輕妙な才筆を以て讀者を喜ばせた。更に紙上に「猫々奇聞」とて藝妓の噂を載せてから、大いにもてはやされた。十一年、「いろは新聞」を創め、十九年には「今日新聞」の主筆となつて、續き物を作つた。後「東京繪入新聞」に轉じたが間もなく老を養はんために、名納會を催して文壇を退いた。これは二十三年のことである。後四年で死んだが、遺骸を菩提寺に送つて見ると、すでに石碑の以前から建てられてあつたのを發見した。彼は飽くまでも戲作者氣質を發揮したものといふべきであらう。魯文の後にはまた中本の趣を傳へるものがない。南新二の作の如き、到底比するに足らぬ。魯文の弟子齋藤綠雨のみが、その長所を取つたものと思はれる。

魯文を以て小說界に於ける舊時代趣味の殿將なりとすれば、古河默阿彌は脚本界に於ける舊思想を繼承した作者の殿將といはれよう。默阿彌は五代鶴屋南北の門人、通稱を吉村新七といふ。天保六年河原崎座に作者見習となり、九年に勝諺藏の名を以て番附に載せられた。十二年柴晉輔と改名、十四年立作者となつて、二代目河竹新七と名乘つた。その優秀な技倆は早くから認められたが、名聲の廣く世に布くに至つたのは、名優市川小團治と相提携してからのことである。小團治は默阿彌の才能に服して、その脚本を仕活かさうとし、默阿彌は小團治の藝風を會得して、またその體格に適したものを作り出さうとした。兩々相俟つてよく看客を醉はしめるものがあつた。小團治の歿後、團十郎のためにも、或は左團次のためにも、その名をなさしめた。明治十四年『島衞月白浪』を脚色して、上場した時、默阿彌と改名して退隱を披露した。然しながら、なほ劇界の事情は其の沈默を許さず、死に至るまで五十八種の著述をなさしめた。その作前後合はせて二百種の多きに上つてゐる。

その傑作の尤にして、而もその特色を最もよく發揮した代表の作は、『村井長庵巧破傘』一に『勸善懲惡覗機關』と題するものがそれであつた。文久二年小團治によつて守田座に於いて上演せられた。江戸の町醫者村井長庵といふ惡漢が質商伊勢屋五兵衞の養子千太郎の吉原の遊女小夜衣と深い契のあるを知り、之を欺いて金を奪ひ、また妹婿を殺して其の娘の身の代を盜み、その罪をば浪人藤懸道十郎に負はする樣に仕組み、遂に藤懸をして獄死せしめる。また娘を尋ねて來た妹をば、流石に自ら手を下しかねて、友人の惡漢三次に託して殺害させる。千太郎は其の放埒が露はれて勘當せられようとする時、忠義の番頭久八が己の罪と稱し逐はれて紙屑屋となる。そのうち圖らずも藤懸妻子が貧苦の間にあるに邂逅する、これは父が舊恩を受けた人であつた。また貝阪忠藏といつて藤懸の家來筋のものも來會はせ、長庵の惡事を知つてゐる由にて奉行所に出訴する。久八は千太郎と小夜衣とが心中しようとする所に行き逢ひ、その刀を奪はうとして誤つて之を刺し殺し、驚いて奉行所に自首する。偶ミ三次は長庵の妹を殺してから良心の呵責にあひ、つひに堪へかねてまた奉行所に自首する。この時長庵は既に捕縛されてゐたが、强情にて罪に伏せず、久八の忠義の由を聞くに及んで良心覺醒し、その罪の次第を白狀する。藤懸の妻子は仇討を願つたが、法律の許さゞる所とあつて聽かれず、奉行の情を以て斬首の折の繩取を許される。久八は罪無く、また千太郎と兄弟なることが明かになり伊勢屋の家督を嗣ぐに至る。

こゝに梗概をしるしたのは、これによつて默阿彌のすべての作を髣髴せしめようが

ためである。作の別名が勸善懲惡を以て題する如く、實に勸懲の趣旨を以て作られたものである。これは舊時代の劇が悉く取る所の脚色であつた。善人榮え惡人亡びるは又陳套の趣向のみ。默阿彌をして其の名をなさしめるに當らない。しかも其の作が大いに世に喝采せられたのは必ず據つて來る所があらう。默阿彌にあつては、その勸懲は他の作家がなす如き理想のものではない。彼にあつては實際社會に見る所の事實であつた。彼が觀察する所の世相には、その理が明白に現はれてゐた。他の作家がたゞ耳から口にするが如きではなく、かれ自ら長い閱歷の後に悟入したものであつた。加ふるに、その人となりや謹嚴篤實、義理を重んじ、人情を缺かず、かの放埒な狂言作者中には稀に見る所であつた。故に、その勸懲も他の作の如く、形骸を殘すものではなくて、生々として活躍するものであつた。安政三年『鼠小紋東君新形』とて義賊鼠小僧治郎吉を主人公とした作があつた。これを手はじめに、幾多の盜賊物を脚色して、はては白波作者の名を受けるに至つたが、その白波物は皆凶惡無道の徒が折に觸れて翻然悟る所あつて改心し、思はずも人をして性は善と叫ばしめる。

默阿彌が結構布置の才は、殆ど天稟に出づるといはれた。その才は觀察の精緻を以てなほ養はれた。彼は寒中綿頭巾に面を覆つて兩國邊を徘徊し、到る處に奇警な眼を開いた。その中流の人情世態に通曉したことが、從來の劇に於いて免れ難い荒唐無稽から脫せしめた。その時代物にも不自然の跡は殆ど見ることが出來ぬ、まして得意の生世話物に至つては、世相人情をさながらに活躍せしめる所がある。げにその修練によつて一層堂に入つた技倆は、些々たる一小事實を捉へても直ちに眼前に一大活動を描き成すのであつた。自らいへるやう、昔からこれはよき筋と思ふと、机に向ひさへすれば、自然に想が湧くのであると。かの『霜夜鐘十字辻筮』に於ける脚色は、一浪人の貧しげなものが、乳呑子を懷に抱へながら筆賣りに來て、妻に死に別れた憐れな身の上を語るのを聞いて稿を起したといふこと。『勸善懲惡孝子譽』は、橫濱で一囚人が子を酷く叱りつけるのを見て趣向を凝したといはれてゐる。

默阿彌は決して他の筋を取らなかつた。いはく、「それより優れば彼を辱しめ、劣れば我が辱となる」と。されど、また廣く材料を自己の觀察以外書籍或は講釋等にも求めた。『村井長庵』は『大岡政談』に取り、『三人吉三廓初買』は梅暮里谷峨の『契情買二筋道』の文里に據り、『江戸櫻清水清玄』は講釋種なる黑手組助六を加味したものであつた。

默阿彌の作は『狂言百種』の中に十一種載せられて居る。皆得意の世話物である。要するに、その趣味は前時代の舊いものである、たとひ舊劇の刷新をば力めたものゝ、明治

の新時代の鑑賞を得ようとは思はれなかつた。しかし、その脚色の才に至つては、永く範を垂るべきものである。

舊文學はたゞに小說と脚本とに止らぬ。和歌もあり、俳句もあり漢詩もあり、漢文もあつた。さりながら、皆德川時代の作家の餘瀝を舐るに過ぎなかつた。今こゝに之を敍するよりは、寧ろやがて起るべき各文學革新に繋いで見るのが、却て便宜のよいことと思はれる。機を得て、更に揭げることとしよう。

第三章　新文學の曙光

明治十年の西南戰爭は、我が政治界また思想界に於いて、重要なる影響を與へたものであつた。雨降つて地固まるといふが、この事變があつて、ともすれば再び結ばうとする封建の夢は全く覺めはてた。新文明の下に立つて、明治新政府の勢力も承認せられた。新舊思想の間に首鼠兩端を學んだ民衆の歸嚮も定まつた。かくして歐化の熱は高まつて來た。さきに物質的文明の輸入にのみ孜々として力めたものは、更に進んで彼のすべてを移植せずば止まざらんとする。政體も、制度も、はては言語迄も彼に據らうとする傾向を生じた。民權自由の聲が土佐の一角に於いて板垣退助の口から出るや否、これに共鳴せる者が少くなかつた。これ等を主唱者として、急進なる政治論は頻りに喧傳せられた。中井兆民の譯したルツソーの『民約論』は彼等が無二の寶典となつた。さきの文明開化の呼號は、いつしか自由民權と代つたのである。文學界の中心も十年を中心として、この氣運と共に大なる轉廻を行つた。採菊も魯文も以前程の名聲を博することが出來なくなつた。草雙紙風の續き物のみが新聞紙上に威を專にする

ことが出來なくなつた。『鬼哭々々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』等が「繪入自由」「繪入朝野」「自由の燈」などの新聞雜誌に連載され始めた。これ等は佛蘭西革命か、さなくば露西亞虛無黨の陰謀などの血腥き記事で、皆西洋小說の飜譯または飜案であつた。別に脚色の複雜なこともなく、趣向の奇拔なこともないのに、たゞ題材に對する興味のみによつて新聞の販路も廣まつたといふ。それほどに時勢は變はり行くのであつた。

十七年藤田鳴鶴は『文明東漸史』を著はした。その名の示す如く西洋文明が幕末より我が國に輸入し來つた終始を敍したものであるが、一種の脚色を構へて、之に貢獻した志士の傳を述べた點が、單なる文明史論ともいひ難い。さりとて政治小說といふ程でもない、たゞ小說的趣向を加味したものともいはうか。これを先驅として漸次政治小說の體を具するものが出で始めた。その主なるものを擧げると、柴東海散士の『佳人之奇遇』矢野龍溪の『經國美談』末廣鐵腸の『雪中梅』須藤南翠の『綠簑談』『新粧の佳人』などである。就中、青年の讀者に大いに歡ばれたのは『經國美談』であつた。これは希臘聯邦の一なるシェーブスが國歩艱難の中に處して、よく他の强邦を壓し、つひに覇を唱ふるに至つた顚末を敍したものである。愛國の士エパミノンダスが同志の士ペロピダスと共に一身を犧牲に供してやまぬ決心、また幾たび蹉躓しても屈せず言論と武力とによつて强きを挫ぐ努力は、殊に之を讀むものをして、顧みて我が國の現狀を見、國家を泰山の安きに置くは我が任のみと、自らエパミノンダスを以て擬し、ペロピダスを以て擬せしめた。蓋し、『經國美談』の著者は、讀者をしてその念を抱かしめることを竊に期したのであらう。

東海散士の『佳人の奇遇』は近代世界歷史を背景にして、亡國の民東海の遊子が諸國を漫遊して、北米の獨立を見、自由の狀を見て、感慨禁ぜず私に再擧を計畫するに至ることを敍した。しかも趣向の複雜を求めて、明・西班牙・波蘭・土耳其・埃及等の亡國の志士を出入せしめ、また紅一點愛蘭の貴夫人幽蘭女史を配した。東海散士その人は會津の遺臣で亡國の感を抱けるものともいはう。書中に敍する所が直に散士の感慨を寓したものと見得ることはまた論をまたぬ。これ等の書は多く漢文調で、なほ朗々唱すべき筆致も乏しく無い。併しその他の書はつひに此の二書には及ばなかつた。

當時政治小說を通じて注意せられるのは、主人公の主人公として立つ所以は、その行動によるのではなくて、その言論によることであつた。或は同志と共に議論風發、或は公會幾千の面前に洛々の辯、これによつて讀者の血を躍らしめるのである。而も何んぞ知らん、そは主人公の聲ではなくて、まことは作者その人の政見であらうとは。讀者

はもとより藝術を解する暇なき人々であつた、その眼中にはたゞ政治があるばかりであつた。故に、この時の政治小説とは畢竟かういふ意味に於いて、始めて小説たることを知らねばならぬ。かのルツソーの名もロマンチツク文學の唱道せられた時、自然主義文學の紹介せられた時には、いつも新しい藝術の開祖としてのみ示された。然しながら、この頃に於いては『民約論』の譯者たる兆民に、果して文學者として說く暇があつたらうか。彼に『維氏美學』の譯はあつても、兩者の間は殆ど沒交涉に終つてゐる。されば、政治小說はたゞ歷史的意義に於いてのみ一顧の價値がある、作そのものゝ價値の如きは深く之を窮めずともよいのである。

この時西洋小說の飜譯も世に出ではじめた。しかし、それも果して小說として愛賞しての飜譯であらうか。否、當時の飜譯者の眼中には、作の文學的價値の如きは深く考へられなかつた。たゞ主人公が政治家であればよい、歐米の政治界の狀況、政治家、殊に野にあつて叫ぶ志士の描寫があれば更によかつた。もしそれ、革命の際腥風の間に身を挺して自由のために戰ふ如きものあれば、その作の拙陋なのをも避ける暇がなかつた。かういふ渴望を癒すには英國のリツトン・デスレリーの政治小說こそ恰好のものであつた。さてはこれ等を取つて飜譯するものは概ね政論家か新聞記者かであつた。卽ち純文學としての飜譯は未だ出でなくて、これも政治小說と同樣政論の副產物であつた。飜譯の動機は如何あらうと、兎に角に我が國に移植せられた上は影響なくてはならぬ。その文辭は無雜であつても、文體は粗大な漢文直譯であつても、原作の味も色も匂も失はれてゐても、かの淺薄な草雙紙や卑陋な中本にまさることは萬々であつた。わが新文學の曙光は、かくの如くにして放たれたともいはう。これよりさき、西洋の書籍の飜譯せられ紹介せられたものは甚だ多くあつたが、かういふ文學書の飜譯せられる氣運に向つたのは、また國民の知識の進步を證するものとも見られる。

十二年に『花柳春話』が『アーネスト・マルトラバース』の飜譯として世に公にせられた。リツトンの原著で、織田純一郎の譯であつた。漢文直譯體の文章で、巧妙といふことは出來ないが、始めてかゝる書に接した讀書界は、爭つて之を稱贊した。この書は明治に於ける飜譯小說の始祖として記憶せねばならぬ。これよりさき、六年の頃渡邊溫と云ふ人の『通俗伊蘇普物語』はあれども、それは寧ろ童幼のための訓話に過ぎなかつたから、これを以て第一者とすべきであらう。

それに踵いで陸續公にせられた飜譯小說は、關直彥にデスレリーの原作『春鶯囀』があ

り、坪内雄藏にリットンの原作『慨世士傳』があり、藤田鳴鶴に同じくリットンの原作『繋思談』があつた。井上勤にも『ジュール、ヴェルヌ』の原作『月世界旅行』がある。その他、牛山鶴堂の『梅蕾餘薫』尾崎學堂の『經世偉勳』服部誠一の『二十世紀』等があつた。

この種の翻譯小說は二十一年に公にせられた『谷間の姫百合』で終結した。原作はベルサ・クレーの『ドラ・ソルン』で、譯者は政客末松青萍であつた。從來譯されたものは、その原作の多くは歷史また政治、時に科學を主としたもので、事件の推移によつて興を繋ぐに過ぎなかつたが、この著に至つては人情の描寫、心理の解剖の見るに足るものがあつた。しかし二十一年といへば既に新文學の革新があつて後の作であるから、その選擇が從來のに異なる所のあるのも當然である。こゝにはたゞ政客の翻譯小說として、年代をしばらく不問に附していふのである。その序にいふ、『姫百合』を作る所以は、徒に花月を嘲弄し讀者の眼を娛まさんとするにあらず、彼の成人夫妻の事歷、以て門葉素訓甚だ相懸隔するもの漫に伉儷の約を結ぶは、終生の不幸を免れざることを示すなり。二女遭遇の異同は、以て處女躬行の柳線琉璃楊に供するなり。凡そ如此の類は、皆世の風教に關するもの云々」と。されば、この譯者は原作を解するに教訓を以てしたので、毫も純文學の見地に立つものではなかつた。或は知らず、これも歐化主義の反動時代に出されたので、かう見られたのであらうか。

劇の翻譯は、十六年に坪内雄藏のシェークスピヤの『ジュリヤス・シーザー』の譯『自由の太刀』餘波の切該撒奇談』があつた。沙翁の他の作を選ばないで之を取つたのは、比較的平明であつて當時の人に解されるからであらうが、また政治小說の流行と共の傾向を一にしたものである。詩にはロングフェローなどの譯が試みられた『新體詩鈔』がある。これは十五年に刊行された。外山、山、矢田部良吉、井上哲次郎の合著で、詩十九篇を錄してゐる。中十四篇は英詩の譯であつた。ロングフェローの外、テニスン、ブルームフィールド、カムベル・グレー、シェークスピヤ・キングスレー等の原作に係る。創作は僅かに五篇に過ぎないが、よく範を英詩に取つて、その風格を模倣してゐる。井上哲次郎は其の序に於いて「漢詩は支那の詩、和歌は過去の文學に過ぎず。新日本の國民がその情思を敍するには、現代語を以て西洋の詩形を取るべきである」といつてゐる。されば、その詩形は七五の句を一行とし、一定の數行を以て一節とし、數節を聯ねて一篇を成すのであつた。或は長歌、或は古詩とも匹敵すべく、短歌發句の短きとは雲泥の差があつた。詠ずる所もまた人生を敍し哲理を寓するものもあつた。しかし、これも新體詩といふ一體を創めた歷史的功績以外には、作としての價値を認めることが出來ない。この『詩鈔』はひとり詩界

の革新ばかりでなく、一般文學界に亙つての革新であるべきに、なほ文學の眞の意義には觸れることなく、たゞ形について云々するのみであつた爲に、文壇の革新をば遂げることが出來なかつた。それは實に『小說神髓』の出づるを待つて始めて期すべきであつた。

第二期　國會開設前後

第一章　逍遙と四迷

『慨世士傳』の序に、坪內逍遙はかういふことを書いた。この飜譯は、一は小說稗史の主旨のあるところを知らしめる爲である、かの地の小說は人情を描き出すことを專にして、勸懲といふことは賓位に置くのであると。また『八犬傳』を評しては、かの八犬士は皆道德の權化、人情を主とする小說の主人公としては到底不適當であるといひ、更に春水が精細の筆の能く人情の底を穿つことを推讚した。是等の言は未だその小說論の片鱗で、これを堂々と論じて寫實の主義を鼓吹したのが『小說神髓』である。この書の刊行せられたのは明治十八年五月、この時を以て眞の意味に於ける明治文學の幕は開かれた。書は上下二卷の小冊子、量に於いてこそ少いが、その影響の大なる、たゞに小說壇上の革新にとゞまらず、延いては文壇のすべてを覺醒する曉鐘であつた。『新體詩鈔』の、時を以てすれば三年を先つとはいへ、その結果はわづかに詩界の一波をあげるに止るが如きものとは、もとより同日の談ではない。

著者はまづ作者と讀者とを情眠から喚び覺さうとした。小說を以て教育の一方便のやうにいひながら、實際には殺伐慘酷、また猥雜の物語をのみ愛で喜び、他の苦しい筋は目にとめぬが當時の讀者の態度であつた。されば、一面に李笠翁の語を金科玉條として意を勸懲に發するを小說の主眼と心得、道德の鑄型のうちに脚色を凝さうとしながらも、時好に媚びて殘忍の稗史を綴るのが、流行の犬與論の奴隷たる當時の戲作者の態度であつた。この時に當つて、『小說神髓』の著書は、或は小說の變遷種類、またその裨益を說き、或は脚色の法則、敍事法を敍し、主人公の設置の論にも及んでゐるが、最も力を盡したのは、小說の主體は人情の小說、模寫の小說に存する理を闡明するにあつた。これが同時に勸懲主義や政治小說の缺陷の打破となつた。小說の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐとは第一の宣言。されば、小說家は人情の奥を穿ち心の中の內幕を洩す所なく周密精到に描き出さねばならぬ。また小說家は心理學者の如きものである。己が意匠を以て強ひて人情に悖戻した否心理學の理に戻つた人物を作れば既に人間世界のものでない、心理を重んじ、篇中の人物を活世界の人と見なして、その感情を寫し出すにおのが意匠を以て善惡邪正を豫め作り設けることなく、唯傍觀して有りのまゝに模寫すべきである。小說は常に模擬を以て其の全體の根據となし、人情を模擬し、世態を模擬し、ひたすら模擬する所のものをば眞に逼らしめようと力めるものである。かくの如き客觀的描寫をなした小說には、求めずして誹刺諷誡の法が備はり、暗に人を敎化するの力がある。もしこの意を以て現世の情態を寫し出したならば、現世の風潮を示し時好の赴く所を知らしめ、輿情の傾斜を察せしむる一活歷史をなすのである。かの奬誡の型に囚へられる小說の如きは、所詮この理を知らぬ故であると。

これ等の論は今日より見れば不備の點もあるべき筈、寫實主義の唱道に忙しくして他の主義の特長を顧みざる點もあらう。さばれ當時にあつては東西小說の比較研究を經て詩學上から論述した我國未發の卓見であつた。まして我が小說を改良進步せしめ、竟には歐洲のノベルを凌駕し、繪畫音樂詩歌と共に美術の壇頭に煥然たる光を放たしめようとする努力から成つたものである。その唱道はいかで空しからう。果然、寫實主義は一世を風靡するに至つた。四迷の『浮雲』もこれから出で、後の硯友社の活躍もまたこれに發した。殊に硯友社同人が徒に文學を愛玩するにあらで、一身をその研鑽に捧げるが如き態度にあつたのは實にこれに動かされたものであつた。

さうはいふものゝ、この論も『神髓』の縷說のみでは、まださまでの效果を擧げることは

出來なかつたらう。逍遙はまたその主義を創作に試みて、寫實小說の範を世に示した。その年の六月に第一冊を公にした『一讀三嘆當世書生氣質』といふのが卽ちそれである。翌年一月までに、清朝四號刷半紙二十枚ほどの小冊子として、每週一冊位づゝ刊行せられたが、この書の發行は如何ばかり世人を驚かした事であらうか。特に堂々たる文學士と肩書した春の屋おぼろの署名は、從來世人が賤しいものと見なして來た戲作と照し合せて、如何に奇異の感を與へたことであらう。更に、その內容を繙いて、淺薄な政治小說とも異なり、陳腐な人情本の亞流とも異なることの甚しいのに驚いたであらう。教育ある人の手によつて、教育ある士の翫賞すべき書は作られたのである。人々が歡迎したのも道理である。東京のとある一英學塾の書生の狀態を敍するのが主であつて、またその氣質の異なるに隨つて開拓するところの運命も亦異なることを示すのであつた。著者は更に人間の習癖行爲の變遷、たとへば輕躁の人も年を經て沈着になり、放蕩のものも老實のものとなることを敍述しようとした。然しながら、また他の一面には維新の際に離散した父子兄妹の邂逅するといふ顚末を以て興味を多からしめようとした。で、その脚色に忙はしくて、筆が遂に企圖を全うすることが出來なかつたかの觀がないでもない。

そはとまれ逍遙のこの著は材を自己の見聞する所に取り、人物もまた一々に現實のものを寫してあるので、當代書生の狀態はその委曲を盡し得て『神髓』の所謂一活歷史にして、當代の風潮時好を示すものであつた。さばれ『神髓』に說く所のすべては、未だ實現せらるゝに至らなかつた。性格の描寫の如きも、その名の示すやうに氣質は明かに描き出されたらうが、特殊の性情に至つては未だしい所が多く、また奇遇といふやうな脚色が事件の變化に重きを置き過ぎたことを語つてゐる。文章が馬琴を模倣した七五調、わざとらしい三馬まがひの滑稽戲作の態度はつひに全然脫することが出來なかつた。さりながら、世評はその缺陷を問はないで、或は實利の書にあらざるを難じ、或は文學士たる者がかゝる書を著はすことを難じ、或は著者の實歷なりとして責めたが、高田半峯が情理を盡した批評を得て、その眞價は世に認められた。寫實主義を普及せしめた點、小說は紳士の筆にして恥づるなき事業たるを教へた點に於いて、この作は永久に生くべきものである。

逍遙はまた矢つぎ早やに『妹と背鏡』を出し、『內地雜居未來の夢』を出した。後者は內地雜居も已に許され、國會も已に開かれた體に描き出して、諷する所があつた。前者は婚姻に關する事件を取つて漸く鍛鍊せられた寫實の筆を揮つた。然し、これ等も未だ

『神髓』に說くところの理想を實現することが出來たとはいへない。それが實現は『浮雲』の刊行をまつて始めて期待すべきであつた。著者は長谷川辰之助で、號を二葉亭四迷といつた。『神髓』が世に出でて新しい文學思想が人々に解せられ、模寫小說寫實主義の名が人の口の端に上る時、彼は外國語學校に於いて露西亞語を學び、教授グレー氏の感化をうけて、ゴンヂャローフ・ゴーゴリ・ドストエフスキー・の創作を讀み、ベリンスキーやドブロリュー・ボフ・ヘルチェン・等の論集を讀んでゐたが、文壇の風雲を見て意大いに動き、或はゴーゴリの飜譯、或はベリンスキーの美論の飜譯、さてはツルゲネフの『父と子』の飜譯をなし、更に進んで、ツルゲネフ等の取るところの態度を當時の社會に試みようとした。『浮雲』はその結果であつたが第一編を逍遙と合作の名目の下に出した。時は明治二十年である。翌年第二編、翌々年第三編を出して完結した。

叔母お政の家に寄寓する官吏內海文三は、學問はあれど世才に乏しく、之が爲に免職の身となる。お政はさきには娘お勢の聟にもと思つて優待したが、急に打つて變つて冷遇する。たゞ文三の心はお勢に繫がれて、耐へ忍んでゐる。お勢は明治の新教育を受けた者で、事毎にお政と衝突してゐるが、殊に母の文三に對する仕向が氣に入らないで、文三を庇護し勝ちである。さりとて文三に心あつての業でもない、また文三の友人で文三とは全然性格を異にして官界に羽振のよい本田に許すのでもない。文三はそれを曲解してひとり煩悶する。

『浮雲』の敍する所はたゞこれだけである。兄妹父子の奇遇があるのでもない。社會の風俗を廣く寫してゐるのでもない。事件は園田一家に起つた日常の小波瀾、人はわづかに四五人の小人數。しかも新舊兩思想の衝突、お政とお勢とによつて代表された兩思想の衝突が當時にあつては破天荒と思はれる程の深さを以て寫し出された。お勢の性格描寫の如きも『神髓』に於いて極言せられて『書生氣質』に於いて實現せられなかつたものを殆ど遺憾なく成し得てゐる。

新舊兩思想の衝突は、魯文等もすでに捉へ得た題目であつた。されど、それとこれとは雲泥も啻ならぬ差違がある。その差は主として露西亞文學の影響によつて然りといふべきであらう。切實に人生を見、深みと強みとを有し、殆ど後の自然主義と軌を同じくする態度は、或は當時の文壇より二十年を先つてゐるとも見るべきであらう。實に當時の最も進んだ藝術論といへども、なほ娛樂本位にとゞまり、その描寫も人情といふ外に出でなかつた際に、『浮雲』の著者は文學の基礎は人生にありと見て、人々が徒らに文體の末に焦心する時に、ダーヴキンの『種源論』を耽讀して深い冥想に沈んで居たの

である。

さうはいふものゝ、これにも亦時勢の影は爭ふことが出來ぬ。森嚴な態度を有しながらも筆の上には所々になほ輕浮な辭を弄した蹤が見られる。これは、作者が江戸に生れて江戸の敎養を受けたことが、累を成して居るのであらう。純な客觀的描寫を欲しながら說明に過ぎるのも一つの缺點、事情もあらうが同一の態度を以て終始することが出來なかつたのもまた一つの缺點。缺點は尠くないが、兎に角明治の小說壇を通じての有數の大作である。さりながら『父と子』の飜譯も『虛無黨形氣』と題する必要があつた當時には、この作の眞價も認められずして、人はたゞ逍遙と合作の名を以て持囃すに過ぎなかつた。

內容を新にした『浮雲』は形式に於いても全く戲作のそれと異ならしめることを要した。言文一致體を以て敍したことがそれである。これも、ゴンチャローフの文章を學んで得なかつたものと著著自らがいへる如く、露西亞の文章から思ひ附いたのであるが、また速記術が行はれて若林玵藏が圓朝の『牡丹燈籠』を速記して出版したのが、自ら言文一致體を採る一因となつた。たゞ圓朝のは「でござります」といふ敬語を以てせるのを、『浮雲』には「だ」といふ調を以てした。そのだ調で全文を行り、また會話と地の文との行を改めて書いたといふことも目新しい試みであつた。この時他の方面からです調の言文一致體が起つた。山田美妙齋の試みであつた。四迷と美妙とはもと朋友の間柄しかもこの言文一致の創始については、その間に何等の交涉があつての事ではない、一に時勢の然らしめた所であつた。そのです調はやがて紅葉のである調と移り行くされど、大膽な試作の先鞭は『浮雲』にあつたと見るべきであらう。たゞ世に發表した點は、美妙齋の方が一年先であつた。

四迷と逍遙との二人の提携は、つひに文壇をば寫實主義の旗下に席卷するに至つた。逍遙が二十二年に發表した短篇小說『細君』の如きも寫實小說の好箇たる模範を示すものであつた。『神髓』がいふ所の意見は、こゝに至つて自己の手によつて實現せられたのである。しかもその穩健な思想は後の家庭小說のために蒙を啓いたものともいふべきである。

第二章　東西思想の交錯

文學思想の革新は成つた。新文學は愈〻その嚮ふ所を知ることが出來た。さりながら、これも要するに西洋思想の模倣に過ぎなかつた。『小說神髓』はすべて彼の藝術論を我に擬せようとするものであつた。『浮雲』の態度も概していへば露西亞文學の模倣であつた。かくして西洋心醉の狀態は今もなほ依然として息まない。然しながら、今は昨に於けるやうに、徒らに皮相の間に彷徨するものではなかつた。かの文明の眞相を解し、その核心を把持しようとする趨向を生ずるに至つた。德富蘇峯は肥後の國から『新日本の青年』の草稿を懷にして來り、大いに青年の爲に呼號するところがあつた。嗟呼我黨の好青年よ、好男兒よ、若し卿の一步を轉じて泰西の自活社會に入らば、願くは卿の二步を轉じて泰西の道德社會に入れ、若し物質的の文明を望まば、更に眼を擧げて精神的の文明を望め、泰西の文明を我邦に扶植せんと欲するものは、必ず先づその眞面目を看破せざる可らず、その眞面目を看破するものは、必ずまづ精神的の文明に眼孔を注がざる可らずと。かくて新青年の覺悟については、青年の大敵は青年が恆に敬愛する

所の老人輩である。新日本は決してこれ等の徒に委ぬべきものではない。われ等はまづ歷史習慣の羈絆から脫して、獨立自信以て新日本を精神的文明の王國となすべきであると。かくて蘇峯は民友社を組織して、雜誌「國民の友」を發刊した。時に明治二十年。更にまた「國民新聞」を起して、二者相俟つて、この精神的歐化主義と藩閥政府に對抗する平民主義とを宣傳した。そして歐洲文明の眞相を會得するには文學によるを便とするので、民友社は一面には放膽の筆を取り、一種の民友社調と名づくべき文體を以て、縱橫に社會百般の事相を論議し批判する外に、西洋文學の紹介にも力を盡した。これが文壇の氣運と相合して新文學の勃興に貢獻することは多大であつた。「國民の友」紙上に文學欄を設けたことや、春秋二期の文學附錄に新進作家の作を載せたことは、重なる一二の例に過ぎぬ。試に蘇峯を主筆とせる社中を見れば、山路愛山・竹越三叉・宮崎湖處子・矢崎嵯峨の家德富蘆花・國木田獨步等の錚々たる士を網羅し、殊に客員としては森鷗外・森田思軒・二葉亭四迷・山田美妙・內田不知庵・石橋忍月等の當時種々の方面に於いて名聲錚々たる者を集めてゐた。されば、思想界・文學界に活動する雄々しさ、「柵草紙」が出づるまでは、獨り天下の覇を稱するものであつた。

思軒の飜譯壇に於ける名聲も「國民の友」によつて獲得することが出來た。思軒は最

初ヂッケンスや、ジュール、ヴェルヌ等をも譯したが、ユーゴーの作『瞽使者』『探偵ユーベル』を出すに及んで、唯一の佛文學紹介者として推稱せられた。もとより思軒のは英譯よりした重譯、また文章も少なからぬ苦心の餘に成るとはいへ、漢文調を多く取り入れて漢七歐三の評もあつた如く、到底流暢典雅な佛文學の情趣をうつし出すことは出來なかつた。然しながら佛文學の片影はかくして世に示された。事は二十年から二十二年に至る二三年間である。

露西亞文學の面影も「國民の友」に於いて見ることが出來た。四迷が二十一年に出したツルゲネフの短篇小說の飜譯『あひびき』がそれである。創作以上の創作と稱せられたほどの靈妙な譯筆、よく使ひこなした俗語の間に一道の新しさが動いて、如何にも若い人々の胸を躍らしめるものがある。その郊外の景は直に武藏野の地にあるかと思はれる位に我にうつしてゐる。獨歩の如きもこれによつて始めて自然を觀る眼を開くことを得たといつてゐる。譯者は同じ年に雜誌「都の花」に『めぐりあひ』を載せた。これもまたツルゲネフの作で、入神の筆清新の調、よく飜譯界の氣運を動かすに足りるものがあつた。

獨逸文學もまた「國民の友」に於いて紹介せられた。その衝に當つたのは森鷗外であ

る。鷗外の活動の始まつた二十一年に、東京大學に獨逸文學科が創設せられた。當時は未だ獨逸文學專攻のものはなかつたが、鷗外は醫者であつてまた獨文學に堪能なので、「國民の友」誌上に或は獨詩を飜譯し、或は文壇の趨勢を論じ、或は小說の創作をも試みた。後に落合直文、市村瓚次郎等と『柵草紙』を發刊して益〻縱橫の筆を揮つた。その前後に譯せるものは、バックレンデルの『黃綬章』『二夜』、クライストの『惡因緣』『地震』、シュビンの『埋木』、フレンチェルの『女丈夫』等があり、また獨譯によつて重譯したものに、露のトルストイの『瑞西館』、米のアーヴィングの『新浦島』等がある。中でも『埋木』の譯は、悲慘な藝術家の最期を敍して、うたゝ人を動かすものがあつた。

鷗外はまた二十三年に創作『舞姫』を「國民の友」に載せた。三篇共にその題材を同じくして、日本青年と獨逸少女「新著百種」には『文使』を載せた。三篇共にその題材を同じくして、日本青年と獨逸少女との戀物語を敍してゐる。當時瀰漫せる客觀藝術に對して、眞面目な主觀藝術の旗幟を樹立したものである。殊に『舞姫』は心理描寫などがよく精緻を極めた。たゞ、その創作も、その情趣が宛ら獨逸文學に接する感があつて、當時には褒貶相半ばした。

矢崎嵯峨の舍の諸作も屢〻「國民の友」に揭げられた。『流轉』の如きは其の一である。その他『夢幻境』の如き、或は「大和錦」所載の『薄命のすゞ子』の如き、「都の花」所載の『初戀』の

如き、皆喧傳せられた傑作であつた。可憐の趣、哀傷の風情、抒情詩めいてゐるのが、若い讀者の心を誘ひ動すものがあつた。

山田美妙齋の『蝴蝶』も「國民の友」に載せられた。我が文壇に於いて始めての裸體畫の挿繪が物議を釀した時にも、この雜誌はその論難の衝に當つた。新體詩の創作論議も、これが殆ど唯一の壇場であつた。當時已に文學雜誌は外にもあつたが、その覇を爭ふに足るべきものはなかつたのである。敵國はこれを他に求めねばならなかつた。

新文學の勃興を以てひとり「國民の友」一派の精神的歐化主義の然らしめる所とのみするものは、未だ他の一面を忘れるもの丶短見といはねばならぬ。それが活動に與つて力のあつたものは、また雜誌「日本人」であつたことを記憶すべきである。これは三宅雪嶺井上圓了志賀矧川棚橋一郎等の結社で、政教社といふもの丶機關雜誌であつて、その發刊は「國民の友」よりも遲れること一年であつた。かの精神的歐化主義に對し、これは國粹の保存を以て主義とした。誌上言を極めて、我には我の國粹があり特長がある、然るに之を棄却して顧みず、ひたすら歐洲文明を讃美し渴仰するの餘、つひにその缺陷をも併せ取つて得々然たるものは愚であると呼號した。

かの第一期に於いて見られた皮相的模倣は、この頃にもなほ依然たるものがあつた。

時の外務大臣伊藤博文公が鹿鳴館に假裝舞踏會を開いたなどは、その高潮に達したものともいはれよう。或は國語の改造を說き、或は人種改良を說く聲なども高かつた。されば、當然一轉回の來り、反動の起るべきであつた。十七年頃から、官界に於いては、獨逸思想が盛んに輸入せられることとなつた。これは英米の自由を尊ぶに反して制度立法を重んじ、國家的精神を重んずるものであつた。我が憲法制定に關して國家的主義は塙のスタイン博士から注入せられ、また國體が我に似てゐるといふ點を以て獨逸の政治を模範とすることとなつた。十八年に森有禮は文部大臣として、國民教育は國家に忠良なる臣民を作るにあり、そして之を作るは軍事教育によると宣言した。かういふ氣運がいつとなく起り始めた時、多年の宿望たる條約改正をなす準備として、法典の編纂が必要となり、隨つて過去に於ける法律習慣の研究が必要となつた。かゝる中に、條約改正は失敗に歸した。世はこゝに歐化主義を嫌忌するに至つた。かの新島襄の活動によつて漸く世に普及して來つた基督教も、異教なり我が國體に反すとの言下に、壓迫を受けるに至つた。

美術に於いても亦同一の色調を帶びて來た。東京大學の教授フェノロサは日本美術

研究の結果、わが國固有美術の優秀にして、決して歐米のそれに劣らざるを推奨し、大いに特長を發揮すべきことを唱道した。陋雜な石版畫にもせよ、洋畫といへば珍重して措かなかつた國民は、西洋人の口からこの言を聽いて、呆然たるものがあつた。他に教へられて始めて自國の美術の進歩淵源の深遠なのに驚いた。後に、美術取調委員が歐洲視察の結果議定した事項も、美術を教へるには、まづ固有の技を基礎とし、その成るに及んで他の長を取るといふのであつた。嘗ては顧みられなかつた古美術も、かくして再び世に出づる事となつた。古文學も亦研究を迫られ、翫賞を強ひらるゝに至つた。國學院も設立せられ、大學には國文學科が置かれた。國文學復興の聲はかくして愈〻高まつて行つた。これに多大の貢獻をなしたのは落合直文・小中村義象・の「日本文學全書」の刊行であつた。これは『竹取』『伊勢』『源氏』等の諸物語を始め、日記・軍記類・を飜刻したもので、當時稀有のものを網羅した。價は至廉、頭註は簡明、從來の珍籍も容易に手にすることが出來た。更に佐々木信綱も同一體裁を以て『萬葉』をはじめ「八代集」等を「日本歌學全書」と題して覆刻した。かくて奈良・平安・の古典が文學として廣く講究せられるに至つた。古文學の回顧はまた近世文學にも及んだ。第一期の戲作者が模範とする所は一九か三馬か、さなくば馬琴春水・であつた。

至り、八文字屋本にも至つた。實に西洋の藝術論によつて寫實主義が唱へられる時、その作品を元祿文學に於いて見出さうとは、思ひも寄らぬ所であつたらう。一度はたゞ驚愕の眼を瞠つたものゝ、その價値を認めるに及んでは、趨り赴くの徒が少くなかつた。硯友社、殊に紅葉の活動また露伴の飛躍は、こゝに始まつた。

かくの如き國粹保存の運動「日本人」にはじまり尋いで新聞「日本」にまた「東洋學會雜誌」及び「明治學會叢誌」によつて呼號せられたこの運動は、之を反動と見るにもせよ、國民の自覺と見るにもせよ、決して頑冥無智な保守ではなかつた。勿論、これは我が特性を發揮するにあつた。然しながら、過去を回顧すると共に他の長所を攝取して、初めて眞の改善を期待すべきである。「國民の友」と「日本人」とが代表する兩思想が相融和して、眞の新しい文學は成るべきである。明治文學に於ける東西思想融和の第一歩はこゝに現出した。

試に見よ、二十三年東京專門學校に文學科が置かれ、二十四年に「早稻田文學」は發刊せられたが、その取るところの方針は我が文學を圓滿ならしめる第一の方便は和漢洋三文學の調和を計るにありとし、東西古今を問はず、文學の精華を選拔して釋義詳註するを主とした。また見よ、「國文學の復興と共に、漢文學も或は飜刻に或は註解に、頻りに振

ひ起るの狀を呈した。漢詩壇また森槐南をはじめ國分青崖本田種竹小川岐山岩溪裳川落合東郭野口寧齋大江敬香等があり、之に專らならずと雖も、堪能を以て稱せられる者に末松青萍志賀矧川等があつた。しかも之等を通覽するに、或は詩は志をいふとして守舊の態度を取るものもあれど、更に進んで改新の實を擧げんことを期待するものも少くなかつた。曰はく、從來の漢詩は作家自身の述懷のみ、新文明の今日は宜しく詩材を廣く漁るの要がある、故に敍事詩を盛んにせよ、また西詩の材料及び趣味をも加味せよ、また更に西詩の飜譯をなせと。東西融和の蹤は詩壇の上にも之を認めることが出來た。古文學の復興が、退歩を示すにあらずして、新文學に資する所の多かつたのは畢竟この故であつた。

第三章　硯友社派と露伴

『小說神髓』が世に出づるに先つこと二月、卽ち明治十八年の春に、一の文學的結社が成立した。尾崎紅葉山田美妙齋石橋思案丸岡九華等を社友とせる硯友社といふのがそれである。多くは大學豫備門に於いて西洋思想に親しむ人達であつた。かくて同年五月に至つて、小說を主として美文韻文詩歌俳諧一口話繪さがし謎々までを載する回覽雜誌「我樂多文庫」を發行した。半紙二十枚か二十五枚位を綴つて、紅葉が社員の原稿を淨書したのであつた。その初編披露の序にいふ、「筆の林に閑居して不善はなさぬ君子等の快樂一派と、和歌詩文の上品より、小說狂文狂詩狂歌句四面に堅き角を去り、端歌都々逸の心意氣一切無差別書きあつめ、「我樂多文庫」の名にし負ふ諸彦も我も樂の多き冊子を月々に編して、而して讀書餘間の憂晴し、噫是天下無上の快樂俱にせんとの有志の君達珠玉を空しく祕め給はず、價をまたず沽らんかな沽らんかなとのたまへば、我もいはん買はん哉買はん哉」と。上に敍べた二葉亭四迷の態度が藝術を以て人生の眞を描くにありとすれば、後の硯友社は藝術の爲の藝術を樹立せんとするものであつた。

その後半のみを掲げたに過ぎない披露の序にも已にその傾向の存せることは見られるであらう。手書は第八號まで繼續した。九號に至つて活字を用ゐることとなつたが、なほ禁賣の印を捺した。時は十九年の十一月であつた。公然と發賣したのは二十一年の三月、一冊の價は僅に二錢。その頃には社員も增加して、二十二年の末には川上眉山・巖谷漣・江見水蔭・廣津柳浪・等も數へられた。「文庫」そのものゝ價値は大ならずとするも、これが文壇に雄飛する寫實小說の諸家を出した搖籃であつたことを記憶せねばならぬ。

これより先に、美妙齋は硯友社を脫して別途の發展を策した。二十年に雜誌「以良都女」を出し、二十一年に「都の花」を出し同年更に短篇小說集『夏木立』を出した。所載六篇のうち、殊に世に推稱せられたのは『武藏野』であつた。武藏野の荒漠たる地の出來事、新田家の悲劇を敍して、しかも歐洲趣味の橫溢せる、さながら讀者をして彼の敍事詩を誦する感があらしめた。世人が驚きの叫はその內容にもよれど、寧ろ形式に於いて發せられた。それは『浮雲』と似て非なる言文一致體を採つたことである。一體美妙齋は言文一致に對しては早くより一箇の意見を有してゐた。チョーサー傳を讀んで、俗文を以て今の英文の基を成した蹟を思ひ、チャンバーレンの文明と言文一致との關係に關する論文を讀んで動かされ、或は物集高見の著書『言文一致』中に『源氏物語』『平家物語』を口譯せるを見て刺激せられ、遂に十九年「風琴調」一節を出した。これは『浮雲』と同じ形式のだ調であつた。後更に工夫の末、ですといふ調を採つたのが『夏木立』である。その文には歐文の色調を帶びることが多く、また好んで擬人法の詞藻を用ゐた。

かくして二十二年には『蝴蝶』『ぬれ衣』『いちご姫』を出した。この中でも『蝴蝶』は當時の批評界に動搖を來さしめたものであつた。『蝴蝶』一篇時は平家滅亡の際平家に宮仕する可憐な一少女蝴蝶が、忠義の一念のためには相思相戀の間なる夫をも殺害し、而もその苦衷もあだとなる悲慘な運命を敍し戀と義理との衝突を說いたものである。さばれ作者の筆の運びは、その煩悶をも懊惱をも淡々としてうつし去り、すべてを抽象的敍述を以て行るに過ぎなかつた。これも亦新奇な言文一致體によつて喝采を博したといはゞいふべき程のものであつた。美妙齋の言文一致か、言文一致の美妙齋かの時評も道理ある言であつた。

『蝴蝶』の出づるや、美妙齋が退社後に於ける硯友社の盟主であつた紅葉は『二人比丘尼色懺悔』を「新著百種」の第一篇として出した。これは畢竟紅葉が美妙齋に對して宣した挑戰であつた。故に推敲また推敲を重ねた苦心の作で、決して「我樂多文庫」に揭げた

『江島土産貝屏風』や『風流京人形』等の如き、片々たる戯作ではなかつた。時はいつ、處はいづことも知らぬ山里の草の庵の一夜、終宵語りあかす主客二人の尼、共にその發心のもとはといへば、戀ひ慕ふ若武者があへない最期故と、しかも二人の戀人は同じ人なるを知つて今更に新しい愁に泣く、これが、一篇の脚色であつた。そして著者は、かういふ哀れに悲しい物語をうつし出すに、絢爛華麗な文辭を以てした。かくて俗にも雅にもあらぬ一種獨特の折衷體が創められた。紅葉の苦心はこゝに注がれた。美妙齋の言文一致は斬新とはいふものゝ未だ生硬を免れぬ、精緻はあるが冗漫に過ぎる。紅葉はまづ文體の取捨に迷つた末、その愛讀せる西鶴、淡島寒月の慫慂によつてその趣味を悟了せる西鶴の筆致を學んだ。たゞ印象を深くすべき言辭のみを取つて、意を言外に寓する。されど頻りに用ゐられた種々の記號、それはまた歐化主義の面影を示するものではなからうか。文體に於いて模範となつた西鶴は、また寫實の態度に就いても教へる所があつた。されば『色懺悔』に見るが如き抒情詩的趣味、傳奇的趣味に彷徨せる紅葉は、まづ現代社會の事相に觀察の眼を開くに至つた。「國民の友」「讀賣新聞」「都の花」等に於いて發表せる小說、卽ち『拈華微笑』『此のぬし』『夏痩』『新色懺悔』『二人女房』『伽羅枕』『おぼろ舟』『三人妻』『心の闇』などが、それである。時は二十三年から二十七年ごろまでの間。

中にも、二十四年に「讀賣新聞」に出した『伽羅枕』は、最もよく西鶴模倣時代の作品を代表するものであつた。旗本の水野石見が京在番の折、祇園の藝子小鶴に生ませた遺子お仙が、十二歳の時から島原の育ち、十四に太夫の突出し、十五に全盛の根引、流れ流れて吉原に歸咲きの佐太夫、或時は水戸の士の捕手に附狙はれるのを庇護し、或時は通ひ來る父子をあやなすなど、擒縱自在の手管や意氣の數々を盡した擧句は、妾となり、癩病者の看護婦となり、はては一念發起しての剃髮二十八から六十二歳の今年まで清淨無垢の寡居、谷中の某寺に一基の石塔を建てゝ三十四名の遊客の亡魂を祭るといふ老婆の懺悔話。花柳の巷の雰圍氣や、金にも姿にも屈せぬ傾城氣質など、數へ來れば西鶴が『好色一代女』の飜案か改作かと思はれる程によく似てゐる。

されど、西鶴には無意識ながらも、深く人生を觀察して、その眞を剔抉しようとするものがあつた。然るに、紅葉にあつては、西鶴は唯その題材の漁るべき方面を示し、その文辭の模すべきを示すに過ぎなかつた。深刻な洞察や苛酷と思はれる諷刺は、何處にも見出すことが出來ない。『二人女房』の如きも、美しくて虛榮にあこがれる姉娘と、醜くて眞實な妹娘との成行きを記して、前者は官吏の家に嫁いで一時の榮華も夢の間にて沈淪の身となり、後者は職工の妻となつて平和の家庭に樂しい日を送るといふ對照を以

て筆を結んだ如きは、到底西鶴の着想と一致すべきものではない。二十七年に出した『紫』は、醫學生が開業試驗に應ずる苦心を敍したものであるが、その結末は首尾よく及第して病院を開くことになつて居る。著者自らいへるやう、もし落第の煩悶を描かうとするが如き事あらば、それは露西亞小說の態度のみと。紅葉は遂に露西亞風の作者ではなかつた、否全く之を欲しなかつた。早くからゾラの作を讀んでその描寫の範とすべきを說きながらゾラたるを得ず、更に西鶴を學んで西鶴たることも出來なかつたのは何故であらうか。

紅葉は江戸の地に生れ、江戸に敎養せられた新江戸子であつた。隨つて、その才筆は江戸の輕妙、その描く所は江戸子氣質であつた。意氣とか、婀娜とか、粹とか、俠とかは、その好んでうつすところ、かの『伽羅枕』の佐太夫はこれ等を具象化したものではないか。その外、妾遊女等を寫すことの多かつたのも、亦これが故であつた。また紅葉は江戸の人の如く世間の道德知識に滿足し、藝術をその上に立てゝ之に遊ばうとするものであつた。故に、その文學は通俗の文學、その小說は同情の小說、人情の小說であつた。『色懺悔』に序して、この小說は涙を以て主眼とすといへるは、唯かの作にのみ就いていふべき言でない。『紫』が喜びを以て篇を結んだのも、これが爲であつた。女性の描寫の多いのも、この故であつた。またしても女物語とは『伽羅枕』だけの起筆ではなかつた。その女性は實際の觀察によつて、實世間から索め出でたものであつた。然し、多くは優にやさしい女、運命に服從し犧牲の念に富んでゐる女であつた。『三人妻』は紳商葛城某の三人の妾によつて、三人三色の趣を出さうとするもの、意地を以て鳴る江戸張りの藝者も、大家に仕へて美貌を以て自ら高うする娘も、二十四歲までも道德堅固に構へた琴の師匠も、葛城の毒手にかゝつては皆止むなき運命として唯々とし從ふのであつた。『朧舟』のお藤は貧ゆゑに妾となつて親に盡し、『むき玉子』のお喜代は繪師のモデルとなつて家のためにした。中にも『心の闇』のお粂は女性として寫された中でも最も傑出したといはれるもの、而も個性が明かに現はれてゐるとはいはれない。要するに、婦人の通性を示すといふに外ならぬ。されば、紅葉は寫實を標榜するとすれば、餘りに洞察の眼が鈍すぎた。性格の奥にわけ入ることもせず、人心の機微に觸れることをも能くしなかつた。畢竟深く省察する必要のない外裝と皮相の人心の發現とを描くに過ぎなかつた。隨つて、紅葉は事件の興味、對照の興味を忘れなかつた。これが新聞小說に着々成功して『紅白毒饅頭』の如き、その方面に於ける佳作を成し得た所以である。

蓋し、紅葉の努力の大半は、文辭の彫琢に注がれてゐたのである。『三人妻』の如きは一

句一語をも苟せず絢爛の極に達した。最早や行きつまりである、他に方面を轉ずるより外はあるまいとまで言はれた。『二人女房』は言文一致の試作であつた。これも美妙齋に對し、二葉亭に對して、別途に出でようと欲した鏤心の業であつた。ですにもあらず、だにもあらぬである調に落ちつくまでには、種々の洗煉を經たものであつた。

紅葉を中心とせる硯友社の同人の作は、殆どすべてが皆同一の傾向を有してゐた。その重なものに就いていへば、思案には『乙女心』『京鹿子』があつた。されど、その得意の壇場は、「我樂多文庫」に掲ぐるところの滑稽諷刺の小品であつた。柳浪は『二おもて』『遊菊』『いとし子』『絲の亂れ』『五枚姿繪』などを相踵いで出した。硯友社中にあつては最も深く人生を觀ようとするもの、後の深刻小說としての基礎はすでに開かれてゐた。眉山は『黃菊白菊』『墨染櫻』等の作があつた。その他の小品にも傑れたものが多く、その文致の輕妙なことは、よく紅葉と駢馳するに足りると評せられた。漣山人は『妹背貝』『片絲友禪染』等のもてはやされた作があつたが二十四年に『こがね丸』を出すや、その得意の境を開拓し得て、爾來少年文學に力を注ぐに至つた。要するに、これ等は皆文章上の技巧に腐心するもの、その唱道するところの寫實主義の如きも、その實あがらず、たゞ淺薄なもの、皮相のものたるに過ぎなかつた。

もしそれ江葉を以て西鶴の才を模し得たものとすれば、西鶴の氣を倣ひ得たものは幸田露伴でなければならぬ。

露伴の作は明治二十三年に「都の花」に載せた『露團々』に始まり『一刹那』を經て、その秋に「新著百種」に『風流佛』を掲げた。露伴の名はこの篇によつて定まり『奇男兒』『對觸髏』一名『緣外緣』を出し『一口劍』を出すに及んでその名愈高く、二十五年「尾花集」に『五重塔』を出すや大いに批評界を搖がし、紅葉と共に文壇に覇を稱するに至つた。紅葉の『伽羅枕』と共に「讀賣新聞」紙上に『ひげ男』を草する時などは、如何に人々をしてその勝負を期待せしめたか。紅露の名が頻りに對照して說かれたのは、この時頃から始まつた。されど、露伴は掲載して數回に達するや、その豪放な起筆を以て人々を驚かしたまゝ、飄然去つて赤城の山中に隱れた。その外、露伴はよく谷中の庵室に閉居して禪に參してゐた事もあつた。『五重塔』は實にその折の作である。作家その人の脫俗の趣は、また髣髴としてその作の到る所に現はれてゐる。

これよりさき、露伴は西鶴を愛讀して措かなかつた。遂にその研究を具して「國民の友」誌上に載せた。馬琴が西鶴を以て無學無識として嘲罵した以來、殆ど顧られなかつた故人の眞面目は、こゝに始めて明らかにされた。西鶴の復活について、その論文が資

するところの多かつたのは勿論であつた。露伴は西鶴に私淑するの餘、まづその筆致を模倣した。その長く連續して絕えようとして絕えざる如き紆餘曲折を極めた文脈が、それである。更にその風趣をも模するに至つた。風趣とは何ぞ、西鶴の作中に横溢せる意氣である、不羈放膽の氣骨である、自由活躍の精神である。それが躁をよく示すものは『五重塔』に若くものはない、そしてこれは露伴が作中の雄篇である。

江戸の棟梁に川越源太といつた江戸子の番匠があつたが、谷中の感應寺の五重塔建立をうけ負ふ事となつた。その時、源太の下に使はれる大工の渾名をばのつそりといふ十兵衛が、源太と競爭してそれを成し遂げようとする。人々はあの愚者がと呆れ、その不義理を嘲る中に、源太の俠骨なる、潔く承諾して更に助力しようとまでもする。然るに、十兵衛は才拙くて技倆未だ世に顯はれず璞玉たること多年、されば今こそ獨力手腕を示すべき時ぞと思へば、なか〳〵その親切をもきゝ入れない。或は源太の子分に白刃を以て迫られる事があつても恐れず、おのが配下の大工の冷笑をも顧みず、つひに五重塔をば落成させる。しかし落成が近づいた一夜、夜叉王何に怒つたのか、暴風暴雨江戸の寺や社を大方毀損した中に、十兵衛が死を決して守つてゐた塔のみは破れず損せず、巍然として高く聳えてゐる。風雨の中に十兵衛の名折にもと人知れず心配して塔の邊を見めぐりした義俠の源太も、眞からその技倆を認め、人々も今更に驚いた。

この小説ははじめ「國會新聞」に揭げられたが、一回分を書き終るや自ら郵便函に投函する例であつたが、月の夜など仰いで谷中の塔を見ると心動いて興會禁ぜず、この最期の脚色などはかくして成つたものであると、作家はいつてゐる。かの暴風雨の敍述の如きは、文壇稀に見るの大文字、これのみにてもその價を定むるに足りるものである。

この作に現はれた十兵衛は、五重塔建立のためには自己の身命をも犧牲に供して惜まぬ者である。親方に對する義理も、おのれが藝に對する一念のためには何等の意味をも有してゐなかつた。かくの如きは、ひとり十兵衛のみならず、『血紅星』の皆非居士が眞の詩を詠じ出さうとする努力、『風流佛』の佛像を彫刻しようとする苦心に見ることが出來る。否、これは露伴の作を一貫する中樞觀念であり、根本思想であつた。

この藝術に對する熾烈な愛、それがある以上は、何を以てか涙の伴ふ女々しい戀を描くの要があらうぞ。されば『五重塔』の中にも、遂に一の戀愛を見出すことが出來ない。『風流佛』の中なる戀愛の如きも、戀愛そのものが主たるものではなくして、所詮は藝術に對する愛の一支流に過ぎない。この藝術に對する愛の極致は何か。これぞ藝術の不滅永遠の生命を認める事である。『五重塔』はさしもの風雨にも板一枚破られず釘一つ

ゆるまなかつた。天の力よりも、自然の力よりも、人の力よりも、より強く大きいものは藝術である。藝術に對する信仰、信念、こゝに始めてその作は理想小說と稱せざるを得ない。いかに人々は高遠なものとしてその思想を仰いだらう。知らず、或はたゞ仰ぎ見て、その眞意を解し得なかつたのではなからうか。人々が幽玄を以て稱したのは多く文辭の上でなかつたらうか。當時一般讀書界からは、やはり紅葉の方がもてはやされた。たゞ文壇上の階級からだけは、紅葉の文露伴の想といふことが屢〻說かれた。

紅葉は人心の機微に觸れることを能くなさなかつた。しかし露伴は幽玄な人物の機微をも穿たうとした。また幽靈、或はものゝ前兆などの超自然についても、敍する所があつた。これは佛典に參することの深いその人の、さもあるべきことであつたらう。一面からいへば、露伴は抒情詩人の態度があつた。さりとて同じ態度を取らうとする美妙齋にかの『對觸髏』をなさしめたなら、果してこの深さを有することが出來たであらうか。とにかくに露伴の作は詩趣に富む、筆おのづから高調に達するところ、渾然玉の如きものを生じた。『風流佛』に於いて專心一意我を忘れて佛像を彫刻し、また鑿一鑿毎に裝飾の花を除去する節の如き、朗々誦すべきである。

露伴が敍する人物には、また他の異なるものゝあるを忘れてはならぬ。『五重塔』の源太の如きは卽ち好箇の代表者。彼は一度は十兵衞の仕向の甚しさに怒を帶びたが、その宏量は却て之に助力しようとする。この意氣地は實に元祿の潤達の精神、西鶴が描く得意の性格であつた。さきには自ら紅葉の江戶氣質と合せしめたが、こゝに露伴を得て武士を描かしめた。かの『奇男兒』の中なる義士喜劍の如きは、やがてその一例に過ぎない。かやうな、いはゞ偏僻の人物の描寫に力める露伴は、紅葉と歩をあはせて女物語を作ることは到底出來得ざることである。たまに女を描けば、紅葉に於けるが如き可憐の女ではなく、世にすねはてゝ神を怖れず佛を崇めぬ『對觸髏』のお妙の如きものであつた。

要するに、紅葉は女の通有性を現はし、露伴は男の通有性を現はした。二者共に眞の意味に於いて個性を發現することが出來なかつた。紅葉は客觀の眼を以て實社會を觀んと欲し、露伴は主觀の懷に入つて理想世界を現はさうとする。二者相背くの遠き全然相反するものともいはう。しかしその源は一つ。寫實主義のもとに西鶴の讚美と模倣とをなしたものである。

第四章　寫實小說の反動

紅露が西鶴から出でて寫實の旗幟を掲ぐるにさきだち、同じく範を元祿文學に取りながら、西鶴に赴かないで共磧に趨つたものに巍庭篁村があつた。篁村は前期の半から新泉居士、太阿居士の名を以て「讀賣新聞」紙上、次いでは「朝日新聞」紙上に、輕快の筆を揮つて、或は隨筆或は短篇小說を出した。二十二年に出版した『むら竹』はそれ等の合集である。同年單行本として世に出した『當世商人氣質』はまたその傑作の一。商人が成功する方法は一に着實にあるのみといふ着想を敍したに過ぎない。たゞ隨處に奇警な觀察と巧妙な諷刺とが見られる。題して當世といへど、宛として八文字屋本中のもの。實に篁村の作は明治の事象の中から江戸の風貌を漁り出して、之を諧謔の筆に寓する所があつて、他の模倣を許し難いものがある。故に明治の事象を明治の事象として寫し出さうとするに當つては、失敗に終ることが多くあつた。『堀出し物』の如きはその一である。

篁村が膺揚な態度、悠々迫らざる態度を持するにひきかへて、常に快罵善罵、嘲罵の數

數を盡し、或は諷刺家と呼ばれ、或は皮肉家と稱せられたものは齋藤綠雨であつた。綠雨は魯文の門下から出でて、夙に江刺みどりの名は、華麗の文辭と共に世に知られた。後には正直正太夫と名乘つて諷刺の筆を縱横に走らせた。二十四年に『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』などの作を出した。『かくれんぼ』の如きは雛妓と若々しい息子との間に起つた可憐な戀物語を敍したものであるが、なほ皮肉の觀察はこゝにも溢れてゐる。硯友社の戀愛小說が例の才子佳人を少々向きを變へたばかりなのに懲らず、また當時行はれた戀愛神聖論に反抗したものだと作者自身はいつてゐる。その態度の發展した所が後の『覗面』となり、『雨蛙』となり、隨筆『霰酒』となつた。共に小說としては何等優れた結構を有してはゐないが、その奔放自在の筆は、犀利冷酷の眼と共に、眞に肺肝を衝くに足りるものがある。

また舊文學を繼承したものに須藤南翠があつた。さきには政治小說家として世に知られたが、これも寫實の色調をその作品に寓するに至つた。『朧月夜』『照日葵』『こぼれ松葉』等は相應の喝采を博し得たものである。

かくの如く、寫實小說の勢が、旺盛を極めた時には、末廣鐵腸に『南洋大波瀾』といふ規模の大なる政治小說があつたけれども、さまでに迎へられず、矢野龍溪に『浮城物語』とて科

學趣味を加へた冒險小說があつたけれども、到底昔日の『經國美談』の名聲を再びすることは出來なかつた。紅露の壘を摩せんとするが如きに至つては、『浮城物語』の空想と同一樣といはねばならぬ。その外、宮崎三昧に『柱姫』『塙團右衞門』の作、依田學海に『楠木十津川』の著があるが、いかで大勢を動かすことが出來やう。蓋し、寫實小說の敵は外にあらで、蕭墻の間に潛在してゐた。まこと寫實小說の取材の範圍や狹く、觀察は淺く、その描寫は作者の周圍數歩の間を出でない。その標榜する所は、世態人情の眞相を把持して、さながらに之を描き出さうとするにあつたが、作家の眼は永く現實に對して凝視することが出來ず、いち早くも小主觀に囚へられるのであつた。當時評論界を動搖せしめた沒我論沒理想論「早稻田文學」に「柵草紙」に鷗外と逍遙とが或は沙翁を中心とし、或はハルトマンの美學を基礎として、論難辯駁數ケ月に亙つた主張も、寫實派の作家にあつてはもとより風馬牛であつた。彼等は事を主とし人を客とする戲作者の態度から脫却せることを以て、此上ない誇としてゐた。もしその執る所の態度を評すれば、人の性情を活寫するが爲に、人を主として事を客とし、事によつて性情を寫さうが爲に、事を先にして人を後にする域に、辛うじて達したに過ぎなかつた。されば、論ずる者は、人を因とし事を緣として因緣果をなし、果また緣をなして終に大團圓に至るべき最高境域あることを示して、之に導かうとした。ひとりこれのみならず、寫實小說が纖弱狹小の戀愛談をくりかへすを苦々しく思ふの聲は頻に放たれて、種々の要求は提供せられた。曰はく、社會問題を材料として、人智の啓發と風敎とに益せよと。曰はく、宇宙人生に關する自己の理想を發揮せよ、舊理想に安んぜず新理想を描寫せよと。曰はく、文壇に高遠の思想なきは、他界に對する觀念が今の作家に乏しきによる、故にまづ理學を超越せる世界を認むべきであると。されど、この高遠な理想は、それを主情派の詩歌に求むべく、社會問題に接觸することは後の觀念小說や社會小說に待たねばならなかつた。その二十四年頃、ひたすら辭句の洗煉に心を苦めてゐた寫實小說家は、その千篇一律の戀愛小說に飽かれるを知りながらも、如何ともすることが出來なかつた。求めて與へられなかつた讀者は、寫實以外の小說と見れば、その巧拙はともあれ、まづその新しさを迎へようとする狀態にあつた。ここに無名の士の起つべき時は來た。

思軒の下に「報知新聞」紙上に『三日月』を出した村上浪六は、はじめ紅葉か露伴の變名と思はれてゐたが、漸くその名を知られて一躍大家の列に數へられ、一作出づる毎に讀者は爭つて之に趨つた。

『三日月』の主人公三日月次郎吉は、正德享保に男を賣つた町奴、旗本といはず、大名といふ

はず、義俠の爲には打挫き打拉ぐ勇者、白刃の中に圍まれて泰然自若杯を手にする膽力、よき買手御座候はゞ何時にても此の命賣り申候但し現金取引の事、晦日ばらひは前以て御斷り申置候と、墨黑々と認めた帷子着ながす濶達姿、子分の罪を身に負ひての切腹、大老が情ある扱ひに琵琶の悲曲を聽きながら天晴な最期を遂げた。事に變化があり、筆に氣慨があつて、文壇また類を見難きものであつた。之に次いで『井筒女之助』を出した。戰國の世、書劍を荷つて四方に說けども用ゐられぬ境若狹が、憂憤の餘やさしの姿をそのまゝに髮を唐輪に結ひ、染月毛の名馬に跨つて往來し、刺客の影と附き纏ふをもの靜に抑へて大いに爲すあらんとした一奇士の生涯、剛毅と優雅とを打つて一團とせる一個の美丈夫を描き出した。その外『奴の小萬』『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』など、陸續として世に公にせられた。これ等皆、人も變り、時も變つてゐるけれど、すべてが意氣と俠氣との權化。いづれ三日月次郎吉が種々に假扮したもの。そも〳〵意氣と俠氣とは、我が國民にはいつの世にも共鳴すべき或ものを有してゐる。識者から見れば、よしや低きに過ぎるものはあつても、偏する所はあつても、このものゝある所は胸裏おのづから躍るべきものがある。浪六の作が人意に投じたのは、卽ちこれが爲に外ならなかつた。況んや、その筆致の奇なる當時鏤刻に過ぎた文章に接しがちのものは、歡び迎へて句々靈活字々躍動の評を下すに足りるとさへいふものゝあるに至つては、猶更の事であつた。

されど、その作品はたゞ類型を敍するに止まる。さきには人を主とし事を從とする境域に達した我が小說壇は、再び事を主とする讀本（ヨミホン）の昔に歸つたのである。その事も俠骨を活動せしめる一點に限られてゐるから、每篇殆ど同一樣で、內容の乏しい、そして深みのないものであつた。されば、撥鬢小說の名は、つねに識者が苦笑の種であつた。その頃「早稻田文學」誌上に、小說學校撥鬢科の敎則と題して「本科の作家とならうとする者は、筆先にて人を殺すこと練馬大根を切るが如く心得べき事。總じて死、自殺、血、美女、意氣地、姦落、不羈などいふ想像をたえず念頭に蓄ふべき事。總じて寬潤なる事すごい事、すばらしい事、強い事に心を注ぎ、兼ねてやさしい事、あはれな事に留心すべき事、所詮剛柔の二面を常住の心得と致すべき事。鬼の目に淚、一寸の蟲にも五分の魂、武士は喰はねど高楊枝、柔能く剛を制すなどいふ諺を、每朝百遍宛唱へてよく服膺すべき事。」などの項を揭載した。所謂撥鬢小說の特質と缺點とは、能くこの諷刺に見ることが出來やう。かゝる小說は一時珍奇を求める輩にこそ持囃されることはあれ、到底永續すべきものでないことはまた論を待たぬ。その一篇を讀めば、他は裕に之を忖度することを得たぬ。

とが出來る。讀書社會にはいつしか倦怠の色が見えはじめた。

一たび歩を舊き物語風讀本風の小說に讓つた我が小說壇は、趣味の低落が更に加はつて、なほ人を後にして事を先にする傾向を助長するに至つた。激甚な事件の變化局面の變化は頻りに渴仰せられた。探偵小說の流行はかくして起つた。殺人・強盜・詐欺・あらゆる罪惡を犯した姦惡の徒は、巧に跡を晦して世に紳士として時めいてゐる。寃罪を以て獄死したものの遺孤は餓に瀕して泣き、相續すべき財產を奪はれた子女は陋巷の月にさまよつてゐる。烱眼はやくも之を看破した探偵は、身を賭して死生の間を出入し、科學の利用、巧妙な變裝假扮を以て、終にその舊惡を暴露するに至る。黑岩涙香の『鐵假面』『非小說』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』は、その代表の作であつた。涙香は材を西洋の探偵小說に取つたけれど、その作は飜譯にあらず、抄譯にあらず、たゞその輪廓を借り來つて、一般讀者の意に投ずるやうに脚色した。これ等の作が一世を風靡したのは、實に二十六七年の頃であつた。その頃內田不知庵が露のドストエフスキーの傑作『罪と罰』を飜譯して出すや、その譯筆の妙を稱するは批評界の一隅に過ぎず、その作の深刻と心理的描寫の精緻とを悦ぶは識者の一部に過ぎず、他は探偵小說として興味を寄するのみであつた。

然しながら、この趨勢も、もとより永くは續かなかつた。人はこの低級の趣味に甘んずることが出來なくなつた。されど、墮落の底に沈淪せる小說壇には、直に之に代るべき高雅なものを見出すことも出來なかつた。歷史小說の興起を促すの聲がそれである。歷史小說さばれ、一道の光明は放たれた。歷史小說として期待せられた。多趣にして多量な點は卑猥殘酷ならぬ意味に於いて、健全小說に於いて長篇小說として期待せられた。更に進んでは、スコツトが路易十一世を寫した如くに、織田信長を描き、獅子王リチヤルドを畫ける如くに、不識庵謙信を寫すものゝ出づることを希望した。なほ一歩を進んでは、當代の人情・風俗・理想及び人物の影を見るに足りるものを欲し、過去の理想及び感想とその理想及び感想が造化天道と相因緣するの形跡を見ることを欲した。

當時に於いて、かゝる企圖の說かれるには、實に據る所があつた。さきに二十一二年頃に起つた古史古典に對する回顧は、空なる歐化主義の反動または漠たる好古好奇の念に驅れて起つたに過ぎなかつた。故に歷史の研究も、史材の彙集と考證とに止まつて、たゞ過去の形骸を求めるのであつた。然るに、今は過去の實質內容をも探知しようとするに至つた。ひとり社會表面の事象に止まらず、なほ深きに入つて歷史的人物を

個人として解剖し觀察しようとするに至つた。歷史を通じて人生を觀ようとするの傾向にまで至つた。民友社の「十二文豪」博文館の「世界百傑傳」の如きは、その潮流に於いて揚げられた一波にすぎない。これよりさき、雜誌に「史海」があつた。それによつて代表せられた一派は、常にマコーレーの所謂圓滿な史家を以て任じ、詩歌と哲學とを兼ね、小說と論文とを併せ有しようとした。乾燥無味な史實の穿鑿を避けて、趣味の橫溢を主とした。かくの如くば、そのもの已に歷史小說を距ること一步の間である。讀書社會は、この新しい讀物に向つて歡呼の聲を放つた。小說壇の不振の一因は慥にこゝに存してゐる。されど、この趨向は一面にはまた小說家の努力を促した。さきに歷史小說を促す議の盛んであることを敍べたが、そは畢竟これあるが爲であつた。更に顧みると『小說神髓』が極力稗史を斥け、馬琴輩の小說の人情に戾る點を指摘してから、小說といへば寫實小說に限るやうに思はれたが、また傳奇小說の必ずしも寫實小說に劣らざるの理を知り、『八犬傳』『水滸傳』以上の傑作長篇が西洋文學に存するを知り、これに倣つて沈滯した小說壇の振作を計らうともした。廿六年に「讀賣新聞」は懸賞を以て歷史小說を募集した。應募者の多い中で、選に當たのは高山樗牛の『瀧口入道』であつた。材を『平家物語』に取り、さしも時めいた平家が衰微に歸する悲劇を背景として、瀧口入道が苦衷橫笛が果敢ない戀の最期を敍した。勿論この前後に三昧學海の作もあつた。村井弦齋に『小弓御所』『衣笠城』『櫻の御所』等の作もあつた。なほその外にも、塚原澁柿園があり、遲塚麗水があるが、當時の讀者は多く弦齋の作の平易なのを歡び迎へた。

併し、これ等の歷史小說が、果して期待した如き結果を得たかといふに、到底その半をすら實現することが出來なかつた。かの『瀧口入道』も、たゞ人物を歷史に假り來つたといふのみで當時期待せられた如く過去の人間と天道とが關係因果した面影を髣髴せしめるには遠いものであつた。その結構脚色は單調に陷つて、たゞその詞藻の誦すべきがあるのみである。歷史的抒情詩とも稱すべきもので終つた。學海三昧等の作は正史野史に拘泥し、風俗言語史實に囚はれ、時代を描き出すべき資料の末に齷齪して、歷史小說の本領を忘却してゐた。

かくの如くにして、唯一の賴みとした歷史小說も、徒に喝望の聲を大いにせしめたのみで終を告げた。過去に卽して人生を視ようとする態度を押し擴めて、現實に就いて人生を觀ようとするに至つて、心理小說觀念小說を起し、小說壇は再び活躍することとなつた。

第五章　劇界の動搖

默阿彌によつて代表せられた舊劇は、勿論舊思想舊趣味の發現であつた。維新後太平の餘澤を樂むに及び、社會の優勝者は漸く耳目を慰むべき娯樂を要求した。然しながら、そこには一難事が横つてゐた。今の上流社會は多く薩長の武士、さなくとも勤王や維新の事業に奔走した磊落粗暴の徒で、到底さきの上流社會に於いて喜ばれた典雅な能樂に滿足する者ではなかつた。新時代の中流以下の人士も、亦すでに相應の新教育を受けたものとて、劇場を以て早學問視した舊平民と好尚を同じくすべきものでもなかつた。隨つて荒唐無稽な歌舞伎劇に滿足することが出來ない。要するに、上流にもせよ、中流にもせよ、新時代の人の頭に印せられたものは現實であり、實利實益であつた。過去の夢幻を破壞しつくして、新しい現實を築き上げた彼等は、過去を演ずる劇にもなほ現代の事象を見出さなくては滿足しなかつた。加之、西洋劇に關する知識の弘布は、顧みてわが劇の蕪雜陋猥を見、その缺點を認知するに至つた。こゝに於いてか、劇の改良は各方面から企圖せられた。

當時俳優もその地位を高めて、以前の河原乞食でなくなつた。みづから社會を敎訓し指導する者を以て擬した。敎導職の稱呼が、常に彼等の口頭に上つた。これは米國前大統領グランドが來訪の節、新富座に於いてわが演劇を觀覽に供したが如き、依田學海によつて團十郎、宗十郎、菊五郎が松田大書記官邸に於いて伊藤伯爵に面接した如き、更に聖上陛下が井上伯爵邸に臨幸の際親しく團十郎、菊五郎等の演技を見そなはされた如き出來事があつた爲である。

上覽劇の前一年、卽ち明治十九年に於いて、早くも演劇改良會が組織せられた。末松青萍の主唱に係り、藤田鳴鶴、外山正一が之を輔け、矢田部尙今、矢野龍溪、福地櫻痴等も亦同志として贊同した。その企圖することが、大凡三つ、從來の演劇の陋習を改良して好演劇を實際に出さうとすること、演劇脚本の著作をして榮譽ある業たらしめること、構造を完全にして演劇その他音樂會、唱歌會等の用に供すべき一演技場を設立しようとすることであつた。やがて演藝矯風會が起り、次いでその後身として演藝協會が起り、美妙、篁村、思軒、鷗外、紅葉、南翠、逍遙等を始め當時知名の文士は皆これに携はり、俳優も亦參加し、脚本と實技との二方面から大いに爲すところがあらうと企圖した。されど、その計畫は、要するに改良會と大同小異である。これ等を中心として、雜誌に、新聞に、演劇

に關する論議が見えざるはなかつた。所詮は、劇を以て大なる綜合美術と見るのではなくて、娯樂本位に立てようとする論に過ぎなかつた。然しながら、紛々たる改良論を通覽すれば、自ら二方面に分れてゐた。一は舊劇の趣味の低下を向上せしめようとするもの、猥雜と殘忍と野鄙とを避けて高尚にして優雅なものを出し、そして題目を忠孝節義に取らうとするもの、卽ち道德的標準を以てする論。その主張の餘弊は詩趣の缺如となり忠と義との傀儡を出さうとした。詩と實際に於ける善惡との別を辨ずることが出來なかつた。一は舞臺の上のすべてを現實化せんとするもの、科白から衣裳の末までも誇張せられた形迹のあるものを斥け、チヨボ、合方、ツケなどの技藝に必要のないものを排し、西洋劇の如くならしめようとする技藝に關する論。前者を理想の論といふべくば、これは寫實の議。これも亦幾多の謬見を有するものであつた。我が國の劇が元來準樂劇から發達したことを忘れてゐるもので、又徒に寫實模倣の枝葉の末に迷ふものであつた。これ等の論議の出づるのは、畢竟する所、かの歐化主義の趨勢を逐ふものであつた。

劇の改良論者は本末を轉倒して區々たる點にのみ着眼した。この謬見を矯正しようとしたのが逍遙であつた。曰はく、末技を云々するを止めよ、まづ事象の眞を寫して劇の本領を發揮せよと。鷗外も亦、改良論者が劇場の建築を前にして脚本の改善を後にするを見るや劇場の簡古素樸にあるべきことを唱へた。更にまた、實際主義の演劇の境に入るを喜べど、極端な模寫主義の之を侵して理想的妙處を滅亡せんことを慨いた。こゝに於いて、氏はその弟の劇評家三木竹二と共に、カルデロンの『ザラメヤ村長』を譯して『調高矣洋絃一曲』と題し、レツシングの『エミリヤガロチ』を譯して『折蕾薇』と題して出した。前者はその舞臺に適合することの沙翁に劣らざると、結構が邦人の嗜好に適する爲に譯したもので隨つて白も我が語調をまなび、グレスボオは團十郎、ボアンは菊五郎、大尉は左團次の慣熟の語勢に近かしめるなどの用意を取つた。その譯し振りについて論難の聲も聞えたが、當時の狀態は未だ實演することが不可能であつた。

兎に角、折角企てられた演劇改良の案は、種々の點に於いて缺陷を殘した。演藝矯風會の事業として殘したものは、篁村、南翠が二三の作に過ぎなかつた。然しながら、その努力、その理想に趨り寫實に赴きし論議は、こゝに一種の史劇卽ち活劇を得て始めてその終結を告ぐることが出來た。これは實に當時勃然として起つて、つひに一代の風潮を形づくつた歷史研究と相接觸した爲である。ひとりこれのみならず、當時の劇の翫賞家たる顯官紳士の上流社會は、多く地方の出身であつて、一攫千金の富豪の徒も多く

は地方から移住した者であつたので、江戸の町人の家庭の狀態を描寫した世話物に對しては、さまでの感興を惹き起さなかつた。この故に、活歷の主唱された以前、已に史劇即ち時代物はいちはやくも動き始めて、默阿彌の如きもその最も得意とした世話物殊に白浪物の筆を封じて、史劇の筆を執らねばならなかつた。たどたどしい史實の知識を以てした默阿彌にひきかへて、進んで正史に根據を置く劇を作り活歷流行の素因を成したものは學海であつた。學海はもと漢學の出で、漢文の風格は殆どその堂に入るものであつたが、夙に演劇の嗜み深く、小永井小舟と共に『新評劇曲十種』の著があつた。又從來行はれるところの俗曲を改作しようとする意があつた。俗曲は、舊幕の頃には、もと士君子の翫ぶものではなかつた。故に俗曲には忌むべき花柳の景情を歌つたものが多い。これを改善せねばならぬといふのが彼等の主張であつた。劇に對してもこの主張を以てし、一に道德的標準を高めようとし、加ふるに史實に忠であらうとした。曰はく、劇の演技は出來得る限り實際に近からしめ、その根本の事實は飽くまでも歷史に據り、たゞ許容せられた範圍に於いてのみ許多の脚色を點綴すべきものであると。

學海はこの主張を實現しようが爲に、まづ筆を鼓して『吉野拾遺名歌譽』を作つた。その附記した所を見れば、曰はく、「戲曲は男女の情態を描きて情義二ながら得しむるを主となし、傍ら弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ぶるに雅にして耳に遠からず、俗にして鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐慘酷なる形を示さず、又悲痛哀嘆に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なし」と。學海はまた『文覺上人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』とを、同一の主張と作意との下に作つた。但し、これは川尻寶岑との合作に係るものである。前者は『那智瀧誓文覺』と改題して、その作の成れる年即ち二十二年に上場した。全然『源平盛衰記』に據つたもので、殊に勸進帳を讀む場と院宣を傳へる場とは正史をさながらに取つてゐる。之を從來現はれた袈裟の貞節を脚色した戲曲に對比して見ると、たゞ盛遠が陽に袈裟を慕つたなどといふ踏襲のない點が當時作者の苦心の存する所として認められた。或は全篇の大綱は源氏の盛衰を示すにありといへるが如きは、訂正の拙を見ると評せられた。そは兎も角も、劇場外のものゝ作が上場せられた嚆矢として記憶すべきものである。その外題を改め、作者をも竹柴其水と稱したことの如きは、當時の狀態としては止むを得ざることであつた。

學海の改良意見は兎もすればとかくの如く枝葉の末に趨り、その作も史劇としては性格の描寫もなく、輕快な趣味もなく、たゞ敍事を以て足れりとする風があつた。要するに

に脚本界は改良論に動かされるところが多かつたけれども、その效果は貧弱なものであつた。然るに、こゝに舞臺の人には、識見と技能とを以て一代の雄と稱せられた團十郎があつた。思ふに團十郎ほど當時の社會の好尚を體現し得たものはなからう。その骨相風采は已に一代の理想的人物即ち當時に於ける國家料理の人物を現はすに適してゐた。かの含蓄のあり暗示力のある藝風は、多くの俳優が區々屑々の末技に心を若しめるのとは雲泥の差があつた。この藝風をよく會得したものは默阿彌であつた。その藝の簡樸洒脫豪宕富貴の態に適するを知つてゐた。また濃艶輕快下卑の趣の缺如して居ることを知つてゐた。この特性を發揮せしめるには、史上の人物が最も好適なることをも知つてゐた。加ふるに、社會の好尚が時代物にあるを顧みて、過去の人物を假り來つて、之に盛るに團十郎の藝風の特異な點を以てした。かくの如くにして成つた史劇には、いかで眞の意味に於ける史的人物の活躍を期待することが出來やう。平民の作者たるその人には、充分に新思想の上に立つべき新時代物は作り得なかつた。故に、その洗煉せられた舞臺的效果の操縱以外には團十郎の技倆を以て作の缺陷を充すに過ぎなかつた。かくてかれは、かの改良論に動かさるゝや、まづ意味のない故實調となり考古的大道具の工夫に終るのであつた。すでに十六年の頃菊五郎が『小說石魂錄』を上場するや、北條時代の風俗に就いて穿鑿するところがあつたといふ。その風が學海に至つて極點に達したのである。而も團十郎はかの改良論に耳を傾けるに至り、默阿彌の作に多く期待することの謬れるを悟り、改良論者の作をも上演しようとした。されど、學海をはじめ、それ等の作は質際上場の脚本としては不完全な點が多く、遂にその意を伸べることが出來なかつた。活歷といふ藝風の活動は、政論家にしてまた『幕府滅亡論』の著者として知られた櫻痴との提携によつて盛んになつた。櫻痴は演劇の改良に就いては學海の如き急激な步武を進めようとする者ではなかつた。いはゞ漸進の態度を取つてゐた。もし學海の作が上場せられたのを演劇史上に於ける珍奇な現象とすれば、これは尙進んで歌舞伎座の立作者として脚本の作をなすに至つたことを驚かねばならぬ。こゝに始めて我が演劇史に横はれる固陋な習俗を破り、脚本家も補綴を以て足れりとする窮狀から脫して、一の堂々たる文學者として待遇せらるゝに至つた。俳優の贔屓に唯々諾々としてゐたものも、今は進んで俳優を役し、自己の作意を實現させるやうになつた。然らば櫻痴の作は如何。彼に『春日局』『關原譽凱歌』『大久保彦左衞門』『日蓮記』の好評嘖々たるものがあつた。これ等以外、なほ幾多の作があつたとはいへ、その多くは櫻痴の演劇に於ける理想を實現したものではなかつた。すでに

その意見が漸進的であつたこの作家は、まづ主として團十郎の藝風に適合することに力めた。新舊劇の折衷、そこにその立脚地を定めた。幾多の非難は隨つて起らざるを得なかつた。曰はく、これ性格劇を距ること餘りに遠しと。曰はく、これ舊劇の特長なる夢幻的妙味を全然廢絶するものと。その描く所の人物は、殆ど同一樣の性格、卽ち類型的で、その成敗の因果は餘りに單純に、餘りに獨斷的であつた。要するに、櫻痴の史劇は史上の人物によつて人生を示さうとするものではなくて、只團十郎の型に適合する小なる範圍に人生を拘束しようとするのであつた。されど櫻痴はよく團十郎を生かして用ゐた。當時の民衆の意に投ずべき團十郎の特性を利用した。題材としては忠臣義士節婦烈女を取り來つた。この點に於いては頗る成功せるものであつた。しかも、これは默阿彌が團十郎の藝風特技を餘すところなく發揮せしめたに反して、その範圍を狹くしたものと稱せられた。かくして彼は團十郎を窮地に陷れたものともいはれた。團十郎の藝が同一軌に出でて變化に乏しいものと成り、無技巧ともいふべき肚藝も、つひに一般觀客に了解せられず、漸くその平板枯淡に倦まるゝや、櫻痴の作も隨つて世に迎へられなくなつた。さきの活歷又は寫實主義の反動として、再び舊樣の趣味依然たる歌舞伎劇に歸らうとした。一たび皮相的寫實主義に迷つた我が演劇界は、迷ひ迷つて再び故の棲處に歸らうとする。十年の努力もつひに空しからうとする。この危機を見て默する能はず、椽大の筆を鼓して「早稻田文學」誌上に過去に於ける史劇の變遷を敍して、近松出雲から五瓶南北に及び、更に近くは默阿彌から學海櫻痴に至り、縱橫評論して、わが舊劇の特長と缺點とを擧げて「夢幻劇論」を成したのが逍遙であつた。これは實に二十六年から二十七年に亙る大議論であつた。氏は近松から默阿彌までの傳奇的史劇を總稱して、これを夢幻劇といつてゐる。その作意が現實を離れて夢幻に似てゐるからといふのである。荒唐な脚色、妄誕な事件、不自然な人物、不條理な結構、散漫な關係若しくはその變相と矛盾とに富めるが爲に旨の一致を缺ける、事業の意表に出づる、事物の誇張せられてゐることは、皆夢中の幻相でなからうか。これを以て舊史劇の缺陷とすれば、その長所たる點は背理の裏に潛んでゐる至醇、不自然の中に穿たれてゐる至理といふことに於いて見るべきである。その形の美ではなくて、その神髓である。故に、この缺陷を捨て、この特長を利用しようとするものは夢幻的と活歷以外の一新劇を興すの要がある。この夢幻相の由つて出づる所以は、その作が敍事詩の體を脫しないところのあつたからである故に、まづ劇詩と敍事詩との別を嚴正に別つところの作を以てせねばならぬ。劇をして旨の一致を具せしめねばならぬ、また性格を

して諸作業の主因たらしめねばならぬと。かやうにして大いに性格劇を鼓吹する所があつた。

鷗外は「柵草紙」に於いて之を評していふ夢幻劇の造語は新しけれど、その實は舊い、夢幻劇は西洋審美家の所謂情劇である逍遙の說く所の未來の史劇は、今の西洋の純劇又性劇に過ぎない、されば逍遙が提起せる改革案中の三條の如きは、近時の審美學上の書を繙いて純劇の條を檢せば、誰かその必備の資格中にこの二條あることを見出さぬものがあらうかと。寧ろその意見の平凡なことを怪しむの狀があつた。しかし逍遙の意見たる、これを泰西の純劇性格劇に接したものから見れば、或は平凡の嘲を免れぬ所はあつたとしても、わが劇壇の當時にあつては實に青天の霹靂であつた。世は始めて劇の嚮ふべきところを知つた。逍遙は自らその性格劇の範を示さうとして、かの『小說神髓』に於ける『當世書生氣質』ともいふべきものを作つた。その發表は次期の劈頭に於いてせられた。

第六章　新體詩の新調

『新體詩抄』は詩壇に一波を擧げた後、杳としてその跡を絶ち、第一集より漸次號を逐ふべき豫定は實行せられなかつた。『詩抄』についで『新體詩歌』出でて十五年以降十九年までに第四集を出したが、大方は『詩抄』の作を轉載するに過ぎなかつた。併し新作の中には、政論家が時に感想を新詩形に寄せるものがあつた。小室屈山に「自由の歌」「外交の歌」があつた。用語は蕪雜であり、思想は粗野なものに過ぎなかつたが、なほ一種の氣慨の見るべきものはあつた。集中の作者未詳なる「櫻井驛遺訓」及び「小楠公」の如きは當時兒童の間に高唱せられたものである。さればこそ沈滯は永く續いた。時に湯淺半月の敍事詩「十二の石塚」の如き長篇があつたけれど、未だ以て斯界を覺醒するには至らなかつた。

然るに二十年山田美妙・尾崎紅葉・丸岡九華の編輯によつて『新體詩選』が出で、落合直文が「孝女白菊の歌」を「東洋學藝雜誌」に出すに至つて、再び活躍の緒に就いた。直文の「白菊の歌」はもと井上巽軒の漢詩を七五調に譯した長篇で、世に推稱せられた事は發表

以後數種の雜誌に轉載せられたのでも著しく、又一時は青年の間に「阿蘇の山里秋ふけて眺さびしき夕暮に」の句が常に唱へられた。二十二年、鷗外等が組織した新聲社即ちSSS同人の譯詩集『於母影』の「國民の友」に出でたのは斯界の運動に多大の貢獻をなしたものであつた。その同人とは、鷗外及びその妹の喜美子と直文、市村器堂等で、それらが獨詩英詩漢詩を和譯し、或は漢譯したもの十一篇外に『平家物語』の鬼界島の漢譯詩一篇を添へてゐる。この譯詩の中には獨逸のゲーテ・ハイネ・ホフマン・あり、英のバイロン・シェークスピヤ等があつた。押韻の試や種々の句法に苦心の跡の歷々たるものがある。『於母影』の「國民の友」に載せられた年、同誌上にまたゲーテ・シルレル等の獨逸詩人の短詩を譯したものが載せられた。引きつゞいて美妙の新作も、そこに發表せられた美妙はその以前すでに雜誌「以良都女」の紙上に於いても、種々の試作を出して世に問ふ所があつた。「薔薇の使」には八六調を「世はそのまゝ」には五五調を試みた。然るに、二十三年「醉沈香」を「國民の友」に出すや、附記していふ「SSSの社中の人が珍しく韻文に一步足を踏み入れましたが、終に世人は冷淡に看過しました。今主人はこゝにまた韻文を草しても冷淡に取扱はれるのを知つて居ますが、今日に於いて向後の日本韻文はどうしたらいゝか斯うもしたらとの野心の餘りこしらへた物です」と。かういふ抱負のもとになつた作の內容は、美妙が艷情を發しようとするものであつた。小說『蝴蝶』が裸體美人の挿畫のために發賣禁止となつたを憤り、社會の僞善を嘲り、流行を諷するものであつた。その七五調の如き、巧に詠みこなされてゐる。また「つぼすみれ」は口語體の七五調を以て、成功せるものと稱せられた。

この年、宮崎湖處子の『歸省』が公にせられた。全篇無韻の敍事的抒情詩といふべく、歸省二週日の感想見聞を錄したものであるが、外形內容共に清新の色調に滿ちてゐる。歐文の情致を宛らに傳へて、自然の描寫が精緻を極めた。文中處々に挿める新體詩數篇、皆自然の深い思を寄せ、殊に作者のつねに愛唱して措かなかつた陶淵明とワーズワースの調の掬すべきものが見える。爾來、湖處子の詩は續々「國民の友」誌上に出でたが、大方は『歸省』篇中のものと同工異曲の作であつた。

湖處子の清雅に對して、飄逸一道の奇氣を藏してゐたのは中西梅花であつた。梅花は後年狂氣した者であるが、それか否か作中には抑へがたい情熱が含蓄せられてゐる。もし詩人がその情熱を標準として月旦せられるものならば、當時にあつては詩人たるものは唯一梅花あるのみであつた。「靈魂」また「出放題」の吟の如きは、世の宗教家哲學者を諷したもので、その思想の據つて來るところは老莊であつた。詩集に『新體梅花詩

集』がある。個人の詩集の公にされた權輿である。卷頭の長篇「九十九嫗」は集中最も世に推賞せられた作である。

かゝる中に、我が新體詩界は、未だ創作に於いて世の耳目を驚かすに足るものゝ出でないのに、まづ評論を以て賑はされた。石橋忍月が「國民の友」に「詩論」を掲げたのに次いで、美妙の『日本韻文論』が出でた。說く所は、韻格の制定といふことが、その骨子である。韻語のつらなりて句をなせるもの卽ち韻句を、散文句卽ち散句と區別する。韻語韻句の完全な節奏を成す標準は韻律であるが、それは音の抑揚によりて決する。揚音をば高調長音、抑音をば低調短音と名づけ呼ぶ。この抑揚音にては、くもが蜘蛛となり雲となるやうに一定せざるもの多く、抑揚自在である。これは漢英獨の音と異なる所で、我が國語の奇なる現象、作詩の上に此上なき便利である。將來の作詩はこの高調長音低調短音の巧な交錯によつて成されねばならぬ。不可思議と實體論と理學の進歩とは詩美の敵である、詩はこれに逢ひてその根柢を撼かされようとするものがある。韻格の制定は詩を開化に伴はしめて、その壽命を永からしめようとするもの、これによつて我が古來の詩歌の弊たる餘情主義を更め、また厭世思想或は纖弱な思想を破り、將來に於ける詩美の基を築き上げん。こゝに始めて世界的韻文は成らんと。

この論は忍月、不知庵、鷗外の批評を促して、一時喧傳せられたが、韻格の制定そのものは得る所なくして終つた。美妙はまた數種の詩を殘して詩界を退いた。同じころ、嵯峨の舍は北邙散士と號して、その小說に見るが如き清新の作を出した。美妙の作は『青年唱歌集』に收錄せられ、北邙のは『文の庫』に收められた。二十五年に至つて詩論また盛んに、旗野櫻坪に「俗歌韻話」があり「無韻非歌論」があつた。大西操山も「詩歌論」の題目の下に美學上から詩歌の內容に就いて說く所があつた。そしてまた、批評界から詩人に對して新たな題目を得て大いに活躍すべきを勸めるものが多くなつた。今の新體詩は新社會の思想を自由に發表するものにあらず、歌ふところは詠物詠史のみ、何ぞその詩題を一變し、風雲月露の自然界より人生自由、社會人物といふ人間世界に移轉せざると、憲法を破らんとする頑迷の徒に光明を示せ、我が國民が進んで到るべき光榮ある民政國を歌へ、我が國民を習慣と壓抑より脫れしめる自由の精神を詠ぜよ、四海閑田なきに農夫ひとり南畝に泣くの慘狀を歌へよとは、詩人に向つて紹介せられた幾分の新詩題であつた。詩人の自覺といふことが、之に伴つて他の方面からも說かれ、造化人間の純美を感得し、理會し、且つ活畫として同胞に示すにあることが唱へられた。

かゝる傾向の下に詩壇の波瀾は漸く高まつて、戸川殘花・磯貝雲峯・北村透谷等出で、また壇場も「國民の友」以外「女學雜誌」や「日本評論」が加つた。雲峯にはバイロンの飜譯があり、スコツトに模倣せる史詩「知盛」があつた。殘花は「女學雜誌」派を代表せる者ともいふべく、巧麗流暢の詩風を以て稱せられた。七五調は此人を得て完璧に近きまでに進歩したとも評せられた。「朝の歌」「夕の歌」の如きはその一例である。「女學雜誌」は毎月白表紙赤表紙の二種を發刊してゐたが、その白表紙の方から「文學界」が生れた。元來「女學雜誌」は岩本善治の主宰の下に、宗教・文學・その他社會の現象に就いて評論し、「國民の友」と相對抗するに足る勢力を有してゐたものである。透谷は早くからこれに厭世詩人と女性、或は處女の純潔、或は戀愛を論じたが、その雜誌が、純文學の見地に立つて執筆し難い事情のあるに鑒み、こゝに「文學界」を創刊したのである。かくして詩人は拘束せられない熾烈な情緒を歌ふ機關を得て、詩界の新調が大いに興起した。この同人に平田禿木・島崎藤村・戸川秋骨・馬場孤蝶・星野天知があつた。皆評論に新體詩に縱橫の筆を揮つたが、その眞の活動は次期に於いて見るべく、こゝには主として透谷の奮鬪が見らるべきものであつた。透谷は激越な調を以て人生を論じ、他界を論じた。「人生に相渉るとは何ぞや」の如きは、恰好の代表論文であつた。透谷は常に半ば病める人で

あつた。隨つて「山庵雜記」に於いて見るが如く、病に對する深い理解と同情とを持つてゐた。これ等の情緒は相依つて詩に發せねばならぬ。二十二年早くも長篇「楚囚の詩」を作つて國事のために縲紲の辱を受けた囚人の身を詠じた。爾來相踵いで「行きたふれ」「螢」「雙蝶の別れ」「眠れる蝶」などを出した。中にも出色の作は二十四年に成つた「蓬萊曲」であつた。この形式は未だ世に見ることの出來なかつた劇詩を以てして、三齣八場の長きに及んでゐる。世を呪ひ、人を苦め、戀を憎み、不滿と不平とに驅られ、一度は神に憧憬して蓬萊原頭を低徊したれど得る所なく、更に靈山に惡魔と戰つて自憤やみ難く、死滅を以て隱家とする外はないといつて、遂に深壑に投じた憐むべき人の子の上を敍したもの。その欝勃たる覇氣と情熱とは、つひに世に容れられなかつた薄倖な透谷の實生活と對比する時に、これやがてその悲壯な心情の赤裸々な發露として首肯せられる。按ふに此の作の價値はこゝに存してゐる。用語の雅醇ならざる、結構のバイロンのマンフレド、ゲーテのファウストを模せるなどは、必ずしも指摘するの要を見ざる所であらう。やがて次期に於いて澎湃の濤を揚げたロマンチック・ムーヴメントの先驅として記憶せねばならぬ。透谷は友の死亡に對して哀詞を草した頃から、頻りと我を削り行く跡を示したが、つひに二十五年五月に自殺して痛ましい最期を遂げた。こ

の期に於ける新體詩は、透谷の死によつて殆ど結末をつけ、更に日清戰役によつて次期の活躍を始めようとした。終りに臨み、直文に『騎馬旅行』の長篇があり、鹽井雨江にスコットの『湖上の美人』の譯があつたことを附記せねばならぬ。また與謝野鐵幹が別樣の意味に於いて、大聲を發するに至つたことをも附け添へて置かねばならぬ。

第三期　日清戰役後

第一章　日清戰役と文壇

日清戰役は空前の大事變であつた。國民が擧つて激昂興奮の狀に入つたのは道理である。我が軍の榮譽な義戰であることを思へば、如何に高潔正大の氣にうたれたであらう。我が連戰連捷の快報に接しては、如何に國民的自負心に驅られたであらう。詩人の情はいやが上に熱した。しかもなほ、殉國の義烈悲慘の活劇戰後の寂寞、幾多の題目の日常見聞することの出來ないものを與へられた。新體詩之を歌ひ、小說之を敍し、劇之を演じた。戰爭に關する數種の雜誌と畫報とは相踵いで出でた。篁村・松葉南翠・湖處子・澁柿園・櫻痴等頻りに筆を鼓し、外山正一『新體詩抄』以來の沈默から出でて「我海軍」「旅順口のヒーロー可兒大尉」を歌つた。殘花に「靈鷲高千穗」の吟があつた。小說脚本中の尤なるものには、松葉の『昇旭朝鮮太平記』があり、櫻痴に『豐島嵐』があつた。その外、創刊せられた「文藝倶樂部」「太陽」「新小說」上に數多の作が載せられた。文運の興隆はこの時に極れるかの狀を呈した。併し、それも一時の夢であつたか、やがてもとの沈

滯に歸つた。畢竟想は淺く、趣味は低く、取材の範圍は狹く、たゞ一時の情を寓するに過ぎない際物文學であつたからである。時好に投じたものはある、絶對的價値の大なるものはなかつた。大勢から之を見ると、戰爭文學の如き、所詮はこれ水上の一泡沫、沙上の樓閣に過ぎないのであつた。

さりながら、空前の大戰爭たる日清戰役が、我が文壇に寄與した所は、斯の如き憐むべきものであつたらうか。戰爭そのものが與へるところは或はこれに過ぎなかつたらうが、その影響するところの廣く且大なるものゝあつたことは之に止まらない。この戰爭の起る前一年、二十六年頃からの文壇の狀態を顧ると、前にも記せる如く、不振との評を免れなかつたが、これに反して思想界の現象は未だ見ることの出來なかつた程生生の氣を具してゐた。從來世間と交涉の淺かつた宗教や哲學は、種々の方面から接觸する樣になつた。保守派と自由派と相分れて、神學上の異見から相軋轢した基督教はおの〳〵根據を世間人の中に立てようとし、「六合雜誌」「宗教」「三籟」の評論上、頻りに唱導する所があつた。佛教も亦宗教教育衝突問題以降、退嬰の態度を改めて、進んで世と相近づかうとした。玄妙深遠な宗教としてのみ仰がんことは時世の許さゞるところ、或は哲學上から、或は歷史上から、批評研究した新佛教を建設しやうとするものもある

に至つた。哲學も亦漸く社會に普及して、書齋を出でて街頭に立つの狀があつた。西洋哲學の研究と共に、東洋哲學も研鑽せられ、東西の精髓を渾成した我が新哲學を樹立しようとの希望も生ずるに至つた。抑〻かゝる現象は何によつて起つたか。「明治に生れ明治に養はれた青年も、はや三十歲に近づいた。舊習慣と舊思想とを離れて、新たな根柢の上に立たうと欲した。その信仰追求の念が、こゝに宗教界哲學界の動搖となつたのである。哲學精神の動くところ、純文學の方面に於いても、その研究は科學的となつた。わづかにハルトマンの美學が二三の徒によつて唱へられた頃とは異なつて、その美學は歡迎せられて審美の論は屢〻雜誌の紙上に現はれた。美の根本性質が說かれるばかりではない、これを規矩とし標準として、小說詩歌は批判せらるゝに至つた。併し、かやうに美學は盛んになつたものゝ、それは文學の理論的方面に止り、直ちに創作を振起するものではなかつた。思想界の活動すればする程、批評壇の活躍すればする程創作界は一所に停滯するのであつた。換言すれば、內に藏するところが餘りに深く大くて、外に發する所以を知らなかつた。その發露することの出來ない煩悶、それが一轉してかの遊俠探偵の低級文學を生じて、辛うじて慰藉したのではなからうか。

かゝる中に戰爭は起つた。感情の激昂動搖、その內に藏するものが迸り出づべき途

は始めて開かれた。二十六年以來蓄積したところが溢れ出づるは今であつた。ひよりそれのみならず、戰爭はなほ多く指導する所があつた。平淡の間に人生の奥祕を見ることは難い、然し激昂の際に人情の機微を見、人情の精華を見、國民性の神髓を明かにするのは易い。かくても人生の深奥と自然の祕義とを見ずやといはぬばかりに、幾多の活劇悲劇はこの大戰役によつて目前に展開せられた。前期の娯樂的小說はいかで再び起ることが出來やう。活歷の藝風に滿足する事が出來なくなつて、性格劇の盛んになるのもまた言を俟たぬ。

戰爭は作者及び讀者をして現實に密接せしめた。過去の回顧といふものが少くなり行き、人生そのものを觀ようとするので、詩歌は自ら主觀的となつて、抒情詩の發達を促すに至つた。且さきの宗教哲學の動搖は、更に抒情詩の素を作るものではなからうか。いまだ把持せられない人生の理想にあこがれて、詩人は心の動搖をさながらに描き出さうとした。新體詩人が或はワーズワース・シェレー・に私淑するもの〻多きを加へて行つたのは、自然の趣向といはねばならぬ。

戰勝は國民的自負心を喚起せしめた。國民が自己の力量を認め得たのは、この時であつた。我が國は維新の後に世界の一國として數へられ、國粹主義の行はるゝや國民として自覺し、こゝに世界の一國と伍するに足るの自覺をなし得た。隨つて他を因襲し模倣するの陋習から脫して、國民的文學を建設しようとするに至つた。そして、その國民としての自覺が、思想界に起つたのが日本主義の宣傳であつた。

「日本主義は三十年に至つて、井上哲次郎・木村鷹太郎・高山林次郎・等によつて發表せられた。これは從來唱道せられた歐化主義と國粹主義とを打つて一團となしたものと見るべく、過去に於ける日本を基礎として世界の長所を取つて新日本の新道德を樹立しようとした。日本國民の人生觀は日本主義に存すると呼號した。現世主義と國家萬能主義とを以て、基督教を排し、佛教を斥けた。その論旨に空漠な箇所多く、當時他の一勢力であつた世界主義との間に起つた論爭の如き、獨斷に過ぎた點が少くないが、戰後の國民は翕然として之に耳を傾けた。

日本主義は國民的自覺運動に伴つて起つた一新潮に過ぎない。これによつて、國家個人の問題を解決して、勝を國家に讓つた。然るに、國民的自覺は再び國家對個人の問題に歸り、つひには前者と全然相反して個人に勝を讓るの時が來た。これが三十四年以降のニーチェ哲學によつて代表せられる。こゝに至つて、我が文學はロマンチシズムの運動に入るのであつた。しかし今は筆を反して文學現象に歸り、まづ戰爭によつて

深みを與へられた小說壇の趨勢を敍することとする。

第二章　心理描寫の作風

撥鬢小說探偵小說はまた顧られず、歷史小說は期待に背いて、小說壇の沈滯せる際、漸く忘れられようとする寫實派の苦衷は如何ばかりであつたらう。その嫌忌せられたのは外面の寫實に止まり、皮相の描寫に過ぎなかつたからであつた。故に、之を救ふの途は一步深く人生の內容に立ち入つたものであることを要する。性格發展の描寫、心理推移の描寫の精緻を求めるのが、最好の徑路であつた。されど、心理小說は、その觀察やその描寫が、久しく娛樂本位の藝術の上に立てる者に取つては、蓋し至難の業である。されば、まづ心理のすべてに互れるものを後にして、その一端から始まつた。所謂觀念小說がそれである。當時はこれをも直ちに稱して心理小說といつた。しかし、それは狹義に解すべきものであつた。

二十八年の春であつた「文藝倶樂部」に一つの新小說が載せられた。曰はく「夜行巡査」。作者は紅葉門下の泉鏡花。職務に忠實な一巡査がある。深夜密行巡査としてすべての力を盡して職に當つてゐる。一人の醉漢があつて、辛うじて一女に助けられて

家に歸らうとする。女は巡査と相愛の間で、而もその戀は父なる醉漢の許さゞる所である。父は巡査を怒罵し惡罵して、二人の間を割かうとする。巡査はそれを聞きながら敢て怒らず憤らず平然として二人の後に跟隨する。醉つて過でもあらうかとの職務上の懸念からである。果然醉漢は濠に落ちた。巡査は私の怨を忘れて水に入つて之を救ひ、自らは溺死する。この一篇は戀をも私をもたゞ義務のもとに抑壓しようとする一觀念を描き出したものである。觀念小說はこゝにその緒を開いた。『外科室』と題する一篇も、また觀念を取り扱つたものである。

眉山も亦時を同じくして觀念小說の作風を提げて起つた。一種の社會觀念を以て、織麗の筆を運んでゐた。名利のために父はその女の貞操を犧牲にせしめ、人は名利を以て處女の純潔を弄ぶといふのが『書記官』。慈善家が冷酷な社會のためにその家產を失ひ、しかも世に顧られないのを憤つて盜賊に陷るといふのが『うらおもて』。

觀念小說と軌を同じくして、しかも人生の暗黑な裏面に專らなものを、その傾向から目して、深刻小說とも悲慘小說とも稱した。柳浪の作が卽ちそれである。痘面でこの上なく醜く而も貞節の厚い一婦人が、ともすればいひ寄る舅を貞實のために涙を呑んで毒害して、自らも死ぬといふのは『黑蜥蜴』。變目の醜さに加へて侏儒の悲しい身が思

叶はないで殺人罪を犯す徑程を敍したのが『變目傳』。これ等に於いても見ることが出來る樣に、その描き出す所は、性格體質または境遇によつて人生の悲慘な事象を生ずることを、心理的に解剖しようとしたのである。そして、事件の結末は殺人自殺にして、その主人公は肉體か精神かに缺ける所のあるものであつた。この二作を出した翌二十九年には『白百合』及び『龜さん』を出したが、同年更に『今戶心中』『河內屋』等を出した。深刻小說は一轉して心中小說となつた。近松は心中を描いた、それは光明に滿ちたものである。然るに、これは戀愛以外幾多の事情の纏綿してゐる、或は全然戀愛なくして境遇に左右せられて情死の悲慘な最後に至る。『河內屋』は殊に人物の描寫・心理の推移・會話の巧妙を以て稱せられた。これと名を齊しくしたのは、心中物ではないが『畜生腹』であつた。雙兒を生んだ女が、惡婆に勸められて一兒を殺してからの煩悶を敍して、陰森の氣の人に迫るものがある。

かくて、三十一年に柳浪は『女仕入』を出した。從來の如く、徒らに深刻陰鬱な事象を描くに力めずして、心理描寫に心を致した。『羽拔鳥』に至つては、從來の作と趣を異にして、その結末は悲慘事を避けてゐる。心理小說の一部である特殊の態度を取つて特筆するにあらで、眞の意味に於ける心理小說に步一步と近づいて行くのであつた。この趨

勢は眉山にも見ることが出來る。眉山にあつては、三十年の『瓏富士』『絃聲』に於いて、しかいふべきものがあつた。

鏡花に至つては、觀念小說の傾向を、その極端にまでも推し及さうとするものがあつた。二十九年に出した『化銀杏』の如きは、すでに幻怪の域に分け入るの狀があつたが、更に『龍潭譚』『風流蝶花形』『清心庵』『辰巳巷談』『梟物語』等に至つては、その描き出さうとする所は悉く神祕幽怪の趣、その筆は皆餘韻含蓄の多い奇矯の文字を以て滿ちてゐる。他の二家が漸次心理小說に入り、一般文壇もまたその旗幟の下に立つ時、この作者はひとり超自然に趨つて、現實を後にした。兎角の非難はあれど、また嘖々の世評を受けた。かれもまた才筆といはねばならぬ。

されば、心理小說を以て一家をなしたものを求めようとすれば、まづ樋口一葉と後藤宙外とを推さねばならぬ。一葉は『闇櫻』を處女作として、明治二十五年中に七篇を作つたが、それ等は何れも古い技巧に囚はれたもので、作意もまた義理と人情との矛盾を描くに過ぎなかつた。然るに、二十八年に及んで幾多の傑作は、相踵いで公にされた。『にごり江』『たけくらべ』『十三夜』『わかれ道』『われから』はその年の一年間に書かれたものである。『たけくらべ』には吉原近くに生ひ立つた少女が、いつの間には人懷しくなり始めて、快活の氣象も次第に沈鬱にうつり行く心理の變化を敍して精緻を極め、『濁江』は酩酒屋の女の面白可笑しく日を暮らしてゐたものが自殺するに至る徑路を敍して、花やぐ燈のかげに涙の潜む樣を深刻に描き出してゐる。その他すべて心理を描き、世相を敍して、その深きに觸れるものがあつた。そして、その文章はやさしい中に力があつて、雅俗の語彙を役して、縱橫意のまゝをなしてゐる。されど、一葉の作は、その文辭、その心理描寫のみに、價値を認むべきものではなかつた。一葉の初期の作に現はれた女は、境遇に社會に道德に對して、絕體に服從する弱い女であつた。それが二十八年の作の女に至つては、社會の冷酷無情を悟り、人情の機微に觸れて後の、強い反抗力を持つものであつた。怖しいものは涙の後の女子心、これが彼の作の精髓であつた。その絕望の餘り、またその反抗の甲斐ないことを知つた時、一葉の女は果して如何なる態度を取るのであつたらうか。『十三夜』『この子』に見るやうに、子といふものが隱れ家である。もしその子といふものすらもない時の女の運命は如何なるものであらうか、そこに當代またと見ることの出來ない沈痛の人生が描き出されてゐる。一葉の萬斛の淚はこゝに注がれて、作者は作中の女と共に冷い重い呻吟をなしてゐる。

これを一葉その人の短くつらく苦しかつた生涯に照し合はせて考ふる時、纖弱な女

の身でありながらたゞ一管の筆を以て生活と闘つたことを顧みる時、その作は直ちに自巳の苦衷を訴へたものとして見ることが出來る。そして「文學界」同人と相知り相交つたことが、從來の技巧脚色のために腐心する弊を脫却せしめて、活きた現實と相呼應せしむるやうになつた。故に、一葉の作には、個人としての經驗から來ることを認むると共に、時代の思潮から來たものゝあることをも認めねばならぬ。兎に角に、一年の間に卒然として幾多の傑作を殘したまゝに、二十五歲の短い生涯を以て去つたその人を思ふ時、づひにその來る何ぞ早きかの感にうたれざるを得ない。

宙外は早稻田派文士の一人である。二十八年に、失敗の爲に發狂した實業家の心理描寫を試みた『ありのすさび』にその名を知られ、ついで『闇のうつゝ』にその名定まり、三十一年に『思ひざめ』『亂れ心』等の佳作を出だし、相ついで何れも世に迎へられた。宙外の作の特色は、心理を描いて精緻を盡し、微細を極めた點にある。自殺・狂死の事件を取るけれども、それは必ずしも深刻を欲してゞはなく、寧ろ葛藤の複雜を示さうとするが爲であつた。その弊も亦こゝに存して、煩瑣に流れ、說明に過ぎるの譏を免れることが出來ない。宙外の他の特色は『ありのすさび』の萩の湖の敍事に於いて見るやうに、敍景といふことを顧みることであつた。また、他の諸家が多く都會をうつし出す時に、その作

は多く田園を舞臺とした。されど、未だ鄕土色を云々する程のものではなかつた。

早稻田の東京專門學校から出した作家は宙外一人に止らない、水谷不倒があり、島村抱月があり、校友ではないが準早稻田派ともいふべき伊原青々園があり、三木天遊があつたが、また小說壇に相依つて一敵國をなすの觀があつた。多くは評論に筆を執るものであつたが、また小說壇に相依つて一敵國をなすの觀があつた。殊に、三十年には機關雜誌『新著月刊』を出して、作り且つ論ずるに至つた。不倒の作は平淡を以てまさるもの、『枯野の眞葛』『錆刀』の如きがそれであつた。抱月の作はその形式の整備を以て稱せられるもの、『めをと浪』『月暈日暈』がそれであつた。青園の輕快にして滑稽に富める、天遊の詩趣に滿てる、皆稱するに足るも、いまだ創作を以ては硯友社に當ることは出來なかつた。しかし文壇に穩健の思想と周到の筆致とを附與した功は忘るべきでない。

當時また二十八年刊行の「闇秀小說」によつて代表せられた女流作家の一群があつた。一葉をはじめ、北田薄氷・田澤稻舟・大塚楠緒子・三宅花圃がそれであつた。その中では、一葉を除いては、花圃を卓れたものとする。花圃に『萩桔梗』の作があつた。一葉と共に老熟の筆致を以て世に推賞せられた。たゞ一葉と異なる點は、社會と個人との葛藤を描いて調和の終結を得ることであつた。かれに厭世觀を齎すものがあれば、これは樂天

觀の上に立つものであつた。花圃の作では『露のよすが』がまた好評を博した。薄氷の『鬼千疋』稻舟の『黒眼鏡』共に悲しい運命を敍して、平穩の筆致に流石に女流の優しみを籠めてゐる。

心理描寫の風が一世を動かす時、紅露の大家も自らその態度を取るに至つた。紅葉は二十七年に『隣の女』を出してから『不言不語』『冷熱』と相踵いで飜案物を出すにすぎなかつた。然らずば『片戀』『名曲クレーツェロフ』『笛吹川』の如き合作物を公にするに止まつた。「國民の友」にはその想の淵れたことを論ぜられ、新進の作家が次第に肉薄し來る時、超然として俳句の選者で甘んずることは出來なかつた。こゝに於いて、俳諧に非ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作にあらざる作、快腕一揮の創作を起さなければならなかつた。遊戲娛樂の筆から逃れて、靜に觀察した人生を描き出し、自己の有するところを現さねばならなかつた。所謂自家の米の飯たる『多情多恨』はかくして「讀賣」紙上に於いて連載數月、二十九年から三十年に亙つた。同じ新聞小說とはいへ『紅白毒饅頭』の類ではなかつた。事件は、たゞ妻を失つた神經質の男が、追慕の念に驅られ寂寥の情に責められる心の動きに過ぎない。その懊惱を右から左から繰り返し繰り返し敍してゐる。冗長の評、無意味の評が聞えた。世評は到底さきの日「讀賣」紙上に明朝を樂しませた『不言不語』に及ばないところが遠かつた。しかし米の飯たる所以は、こゝに存してゐた。この作は實に紅葉が藝術の頂點に達したものであつた。戲作者の態度は全然脫せられて、最も新しい文藝の態度を取つた。心理小說の新進作家も、心理の描寫がしかく平淡に、しかく微細に入るを見ては、瞠若たらざるを得なかつた。

『多情多恨』は性格描寫に成功したものとは思はれない。主人公鷲見の性格は徒に誇張せられてゐる。これに反して、快活な實業家葉山は作者自らを描寫し溫順な妻お種はその夫人を描寫したので、よく活躍してゐる。それはともあれ、日常の生活をあれ程までに再現し得たところ、また「花もなしに」の一句を殘して未解決のまゝに止めたところは、當時にあつては豫期し得べきものでなかつた。況んや、常に感興を筆端から迸らすことをのみ心掛けゐた紅葉の作に、この事のあるのは奇蹟ともいふべきものであつた。『多情多恨』はまた言文一致體を以て記された。美妙も二葉亭も今は遠く及ばない程の巧妙な一體が創められた。この點に於いて『多情多恨』は言文一致の『三人妻』であつた。

『多情多恨』に於いて大いにその手腕を揮つて、捲土重來の勢をなした紅葉は、三十年に及んで更に『金色夜叉』に筆を染めはじめた。然しながら、これは前者の如く心理描寫に

專らなるものではない。作の動機、作の根本の思想は、他に存する。されば、今しばらくこれを措いて常に相駢馳する露伴の上を見よう。

露伴を以て心理小説家となすは謬れる見であらう。されど、こゝには心理描寫の風が、その作中に動いてゐる點を以て說くのである。蓋し、前期に於ける彼の作は理想小說と見るべく、抒情小說と稱すべきものであつた。然し、その理想は時々空漠に流れて、深く現實に接せざるものであつた。幽玄を欲するの極時には空虛に陷らうとするものもあつた。然るに、今は性格を描いてその浮動を求め、心理を描いて自然の推移を求めた。現實を觀、世相を悟つた後には、之を說き之れを語つて一の抒情詩味を留めざるものともなつた。この傾向は二十六年に起稿せられた『風流微塵藏』に於いて知られる。初篇『笹舟』について『菊の濱松』『獨寐』『雲の袖』と相踵いで出でて、二十九年に至り、しかも局を結ばずして筆を擱いた。

されど、これを以て露伴の作のすべてと見るのは當らない、その人生に觸れ人情の深奥に入ると共に、その上に高遠な思想を寓してゐる。その人生に對するや深い沈思と冥想とから來り、人間を察するや洞觀に至つて止む。さきには佛典の教理を以て直ちに律しようとしたのが、今は現實と併せ參せようとするのである。老莊に於ける亦さうであつた。かの二十八年の『新浦島』の如きも、老莊をかりて悟道を說き理想を說くものであるが、しかもそれを說くにはまづ現實に始まつて、然る後に凡俗を超越した神仙境に及ぼしてゐる。露伴の特色はこゝに現はれてゐる。

二十九年に露伴は『毒男』を出した。武田家の臣で毒男と渾名ある笠井某が、主家に盡す苦心を敍した歷史小說であつた。文辭の遒勁を以て大いに稱せられた。

心理小說はまた他に幾多の變態を出した。狹斜小說もその一である。美妙は久しく新體詩に專心して、小說壇から隱れてゐたが、二十八年に及んで『お千代』『鰻旦那』を出し、二十九年に『若白髮』を出した。これが皆狹斜に關する事實によつてゐることから、はしなくも世論を惹き起したが、その寫實の手腕の冴えたことは世の齊しく認める所となつた。美妙はなほ狹斜に材を漁つて數種をなしたが、三十年に『閻魔地藏』『可憐狂』を出した。されど、言文一致の圓熟した跡を示すに止つて、內容の以て讀者の耳目を驚かすに足りるものはなかつた。まして、その人物の輕薄な氣に富めることが、漸く世の嫌惡を招くに至つた。

他の變態は、心理描寫をなしながら、かの深刻悲慘または狹斜の末に趨らないで、つねに詩趣の橫溢を期した一體であつた。江見水蔭まづ之を代表し、田山花袋また之に次

いだ。水蔭は硯友社の一人で、さきに戰爭文學の起るに當つて頻りに筆を染めたが、二十八年に短篇小說集『水車』を公にした。集中「狂詩人」「兜の星影」の如きは二十年に出した『炭燒の煙』またその前年の『女房殺し』と共に、世に賞讃せられた。その作は皆短篇、その想はすべて抒情詩的のもの、その人物は畫師か詩人さなくば、巡禮の如き、炭燒男の如き、藝術か野趣かにたづさはる者であつた。そして、それ等の徒は多く社會の冷酷に壓迫せられた弱者である。こゝに於いてか、作者の同情ある筆はその弱者を助け、社會に對してその罪を責める態度に出でた。その趣は頗る一葉のに似てゐるとはいへ、全體の調は空想を以て編み出されて、かの深みと強みとがなかつた。

花袋は新進の作家であるが、二十八年に『山家水』『水車小屋』『小桃源』等を出して、水蔭と共に詩的作家として聞えるやうになつた。描くところは多く初戀か失戀の煩悶であつて、その背景を美しい自然に置いてゐる。二者相俟つて無韻の詩をなしてゐるところが頗る青年の間に迎へられた。

漣山人が二十八年に出した『菫日記』も二者に劣らぬ優しい情緒を湛へた短篇であつた。少年文學に力を盡せる人の態度は、自らそこに至らねばならなかつた。されば、彼にあつては深刻な着想を以て描いた『昭君怨』の如きは、却て變態と見ねばならぬ。

その他、多少ながら心理描寫に入つて從來の寫實の風を離れ始めたものには、嵯峨の舍篁村、思案、忍月、湖處子、乙羽があつた。抱一庵も活動し始めた。然し抱一庵は飜譯の方面が主であつた。

第三章　俳句の革新

天保に至つて墮落俗了の極、びたすら黠者の口腹を充すの資となつた俳諧は、弘化嘉永に及んでも依然たる舊態に低徊した。豊島由誓・高梨一貝・兒玉弘淵等の手を經て、月の本爲山・菊守園見外のものとなり、更に維新となつては衰微の狀愈激しくなつた。この最短詩形はいかでか當時の粗大奔放な時代精神を盛るの器たることが出來やう。また寂とか栞とか力めて幽玄の言をなして要領を得ない說は、もとより門外の徒の容啄を許さない、隨つて文學の革新の唱へられる時にも俳諧のみは漏らされるのであつた。されど、市井の商人職人の間にはその好尙が日に月に加はつて、かの宗匠といふ者も少なからず數へられた。その中の錚々たる者は老鼠堂永機と春秋庵幹雄とであつた。幹雄は白雄の後を承け、永機は其角の流を汲み、一は地方に一は東京に、その勢力を張つて互に下らなかつた。しかも二者共に舊趣味の間に俳徊して陋習を墨守することは全く同一樣であつた。永機の門に機一があり、幹雄の門に松江があつたが、それも各師風を株守するに過ぎなかつた。十三年には、角田竹冷は丈六庵一草と共に、報知新

聞」に俳句を載せて、新聞紙上に俳句を揭載する例をなせるが如き、とにかくに俳諧といふものは沈滯の中にもなほ一縷の生命はあつた。然るに二十二三年頃からの國粹保存元祿文學復活はまた俳壇を動して、これを研究し、これを翫賞しようとする者も、頓に多きを加へ來り、二十四年には『鶉衣』『芭蕉翁一代集』『風俗文選』などの飜刻せられるものがあり、翌年には『俳諧寂栞』『本朝文鑑』『俳諧一葉集』の飜刻せられるものもあつた。この年幹雄はまた俳諧を通俗に解說して、初學を導かうとして『俳諧自在法』を著はし、機一も亦趨勢に促されて『發句作法指南』を出した。俳人の傳記を評論的に述べた『俳諧史傳』の著の出でたのもこの時である。かくの如くにして、二十六年となるや、蹇庭篁村の「俳諧論」は「早稻田文學」の誌上に載せられ、その十一月には「日本新聞」紙上に正岡子規の「芭蕉雜談」が連載せられた。子規は未だ無名の俳人、而もその論は明治俳諧史上に於ける『小說神髓』と目すべきものであつた。

その新しい觀察、何等拘束せられない言論は、まづ芭蕉の崇拜せられながらも却てその眞價の認められずにゐることを論じた。世の俳諧に遊ぶもの、芭蕉を以て翁と呼び、芭蕉翁と呼び、芭蕉樣と呼び、恰も宗教信者の大師樣お祖師樣などと稱するのと異ならず、甚しきに至つては神と崇めて廟を立て、本尊と稱して堂を建てることは、決して一文

學者として芭蕉を觀るのではなくて、一宗の開祖として敬するものである。その俳諧は完全無缺、神聖犯す可らざるものとせられ、同時に俳諧としては殆ど解する者なきに至つた。偶〻その意義を解する者あるも、批評する者に至つては全く跡を絶つた。されば芭蕉の句といへば、その巧拙の如きは敢て論ぜず、悪句駄句盡く收錄せられて、徒に句集の紙數を增加するに過ぎなかつた。世はつひに芭蕉の芭蕉たる所以を知らなかつた。さらば芭蕉の眞價は如何。日本の文學は多く纖巧細膩、その中にひとり芭蕉のみは豪壯の氣を藏め、雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を敍して一世を驚かした。その以前の十七字詩は卑俗漢詩は幼稚和歌は陳套、その間に起てる芭蕉の新調は日本韻文學のすべての面目を一掃したものであつた。「夏草や」の吟「荒海や」の吟の如き、到底他の夢想だに及ばざる所。それのみならず芭蕉の技倆は縱横自在、種々の變態をなし、變調を學び、ありとあらゆる變化をば盡く自家々集中に收めようとするのであつた。幽玄纖巧奇拔滑稽溫雅華麗、或は自然の妙を得た「明月や池をめぐりて」の吟、或は驛族の實況を寫した「蚤虱馬の尿する」が如き、實に三唱措く能はざるものがあつた。もし夫れ「古池や」の吟「枯枝に」の吟の如きに至つては、何等の取るべき價値がない、これ道德敎訓の眼を以て見或は傳說を附會するの餘、始めて人口に膾炙せられるに過ぎな

い。これが子規の所說の大要であつた。宗匠輩の盲信は、この言によつて破られた。新しい詩眼を以て俳天地に對し、新しい詩語を以て新思想を吟ずべき時が來た。よしその言は獨斷に失するとも、俳壇革新に於ける「芭蕉雜談」の功は遂に忘るべからざるものであつた。

子規は明治十八年の頃から、すでに俳諧に志してゐたのであつた。その高等中學の在學中、同じ伊豫松山の出身者内藤鳴雪竹村黃塔五百木瓢亭藤野古白等と共に會合をなして、互に趣味の開拓に力めた。然るに二十四年に至り、子規は俳句分類の編纂を企てた。これが子規をして俳眼を開かしめる緣であつた。その研究が昔の連歌時代から始まつて、貞德派の無趣味な滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら尙五里霧中に迷つて居る有樣であつたが、『春の日』『荒野』などと漸く佳境に入り、始めて『猿蓑』を繙いた時には句一句面白く思つたとは彼自らのいふ所である。かくの如くにして會得した『猿蓑』の閑寂な調を軌範として、吟ずるところは多く敍景であつた。二十五年、子規は大學を半途で退學して「日本新聞」社員となり、その一欄に據つて頻りに俳話俳論を公にし、またその作句を載せた。「芭蕉雜談」はこの際に發表したものである。さきの鳴雪瓢亭等また之を助け、藤井紫影伊藤松宇佐藤肋骨高濱虛子河東

碧梧桐等の志を同じくし或は教を受けんがために集り來るものも多く、つひに新聞「小日本」を發刊して俳趣味の研究と鼓吹との機關に當てゝ俳句を募集するに至つた。時は明治二十七年二月。この年はまた竹冷及び大野洒竹等が日々「毎日新聞」に作句を公にし、また「讀賣新聞」が竹冷紅葉を判者として俳句を募集した時で、新俳諧の羽翼は大いに張るに至つた。實に、この年から翌年にかけて、新俳諧の結社は少なからず起り、地方も亦翕然として響應した。

これよりさき、子規が俳諧に志した十八年には尾崎紅葉もまた俳句に手を染めようとした「我樂多文庫」の說上に於いて、已にこれが趣向のあることが認められた。たゞ紅葉にあつては俳句はもとより小說著作の餘技、しかも小說に於ける西鶴の崇拜は俳諧に於いてもその一派たる宗因の談林調を以て模範とした。子規がそれに慊らないで更に蕉風の閑寂に進んだ時、紅葉は諧謔滑稽を喜んでこれに力を盡した。されど、後には紅葉もその小說が西鶴を離れて新文藝の境域に進んだが如くに俳句もまた談林調から出でて蕉風に移つた。これは子規が「小日本」發刊の交であつた。紅葉の俳社は紫吟社と稱し別に木曜會を組織せる小波と共に之を主宰した。屬するものには硯友社の同人以外、中山白峯村山鳥巡星野麥人牧野望東があつた。その作句の多くは「讀賣新聞」と「文華」とによつて公にした。

竹冷は戸川殘花と共に紫吟社の一派を併合して秋聲會を起した。機關雜誌として「俳諧秋の聲」があつた。この主とする所は新舊俳諧の調和であつた。その翌年、帝國大學生たる洒竹臨風紫影醒雪等所謂大學派によつて筑波會は起され「帝國文學」を以てその機關とした。

これ等の俳社の多くは子規一派に對抗せんために起されたとも言はるべきもので あつた。二十七年七月「小日本」が廢刊せられ「日本新聞」に俳欄を設けて之によつて所謂日本派の名をなす頃、蕉風に沒頭した子規の態度はいつとなしに變つた。その俳句の研究の序を以て、進んで安永天明に至るや、こゝに蕪村に際會し、その異調奇調に驚歎の聲を放つて、遂にこれが模倣に陷つた。自選の句集『獺祭書屋俳句帖抄』の序文は、その間の消息を傳へてゐる。はじめ芭蕉の「猿蓑」によつて俳眼を開き、やゝ俳句の寂を知るやうになり、二十五年の冬頃からは自然の景物を咏ずることが自在になり、二十六年の行脚と多作との一年を超えて、二十七年には元祿調から天明調にうつりかけてゐたと。碧梧桐と虛子とが天明調を學び、蕪村を學び、子規の意を承けて、奔放の一體を創めたのはこの時である。陳腐を離れ變化を多くするには、從來の句風では未だ複雑の思想を

現はすに足らずとし、更に進んで、語に漢語を多く使用し、句法に虚字を少くし、敏達な調を用ゐようとした。かくの如くにして、複雑な、變化の多い、新奇な美を發揮することが出來ると。碧は客觀詩に長じ、虚は主觀詩に長じ、句風異なるも二者その態度を同じくして、明治の新俳諧に於ける尖兵たらんと期した。十六字句二十四五字句の奇矯な調も、盛に公にせられた。

されど、子規は徒に蕪村の皮相を模倣して得たりとするものではなかつた。蕪村の「新花摘」を讀んで、蕪村の眞諦に觸れたのは二十九年である。これによつて、蕪村の苦吟の餘になつたものが必ずしも卓れたものではなく、得意の句もまた優れたものでなく、優秀のものは却つて無雜作の間に成つたものにあることを知つた。子規の句が自在になり行き、すべての格調を包容することが出來るやうになつたのは、この時に始まつた。日本派の全體も隨つてその奇鋒を收めて、平淡の間に逍遙するに至つた。しかも縱横の變化は却てその中に寄與せられた。子規はこゝに蕪村の詳細な研究に入つて「俳人蕪村」を「日本新聞」に草した。畫人としてのみその名聲を知られた蕪村の名は、こゝに始めて俳壇の光となつた。子規は蕪村と芭蕉との比較研究をなしていふ「芭蕉は消極的美、靜的美に傾き、古雅、幽玄、沈靜平易等の趣味を主とし、蕪村は積極的美、動的美に傾き、壯大、雄渾、艶麗、奇警等の趣味を主とした。芭蕉は主觀的美によつて天然に感興をよせ、蕪村は客觀的美によつて人事に感興をよせてゐた」と。子規の前人未發の精緻な研究が發表されると、蕪村崇拜の勢が俄然として大いに高まり、その句集の翻刻せられるものが相踵いで出でた。かくて蕪村の作風は殆ど一世を風靡するに至つた。かうなつては紫吟社も不振、秋聲會も不振「秋の聲」はつひに廢刊の厄にあひ、日本派のみひとり隆盛に、松山に於いて柳原極堂が刊行してゐた雜誌「ほとゝぎす」は東京に移され、虚子がその編輯の衝に當ることとなつた。時は明治三十一年。日本派の基礎はこゝに動かすべからざるものとなつた。

さらば、子規一派の俳句は、蕪村の埒内にあつて、天明の昔にかへつたのに甘んじてゐたか。否。これだけに止らば如何でか明治の俳句といふことが出來やう。子規が病體を以て苦痛と闘ひつゝ努力した甲斐が何處にあらう。子規は新俳句と月並句とを比較して、五の差異をあげていふ「我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんとするが其一、我は意匠の陳腐なるを嫌へども彼は寧ろ新奇を嫌ふは其二、我は言語の懈弛を嫌ひ彼は緊密を嫌ふは其三、我は音調の調和する限りに於いて雅語俗語漢語洋語を嫌はず彼は自己が用ゐ馴れたる狹き範圍を出でず、雅語をも用ゐざるは其四、我

に俳諧の系統なく流派なし、彼は之を以て特殊の光榮とするは其五」と。これ等の言は革新の當初に於いて標榜すべきもの、蕪村を得た今、月並調破棄後の今は更に進んで明治調と蕪村調の異なる點を擧げねばならぬ。子規は卽ち言をなしていふ「明治の俳句の古人以外の特色は、元祿より、天明より、更に複雜に、精緻に、緊密になつた事である。されば碧梧桐の句風は蕪村に比して、一層空間的に印象の明瞭を來し、虛子の句風は時間的に複雜のものとなつた」と。

日本派の選集は三十一年に『新俳句』があり、三十四年に『春夏秋冬』があつた。敍景から抒情、佶屈から平淡に推移した跡を認めることが出來る。その間、大阪には松瀨青々等が雜誌「車百合」を發刊して、日本派のために地方の俳壇を開拓せんとした。しかも子規は病つひに革つて三十五年九月に歿した。子規の事業はもと俳諧革新のみではなかつた。和歌に對し、新體詩に對し、敍事文に對しても、沒すべからざるの遺業が存する。これ等は更に節を改めて說かねばならぬ。

子規は一新俳風を樹立して俳壇の積弊を一掃して復興の實を擧げた。その功績といひ、またその圓滿な俳想を以て衆人を率るて立つ態度といひ、よく芭蕉に似てゐた所がある。ひとりそればかりではない、芭蕉の歿後に各門弟が割據した如くに、子規の歿後もその同人は各自その認める所、信ずる所を發揮せんとして門戶を張るに至つた。これすらも相似てゐる。また以て子規の大さを示すものといはねばならぬ。

第四章　和歌の革新

明治の和歌は、なほ俳句と同様の運命のもとに、その革新は最も遲れた。何となれば、和歌に於いて起るべき變動は、轉じて新體詩の勃興となつたからである。しかし舊態を墨守してゐる和歌は俳句よりもなほ盛んであつた。維新後の多事なる中に於いても二年には宮中に歌道御用掛を設けられ、三年には皇族華族及び勅任官から新年の歌御會始の歌を召させ給ひ、七年には御會始の歌題を賜はつて汎く一般臣民からの詠進を嘉納し給ひ、更に選者の精選を經て豫選の歌を御前に披講せしめられることとなつた。かくて臣民詠進の歌數は一萬首にも達するやうになつた。二十一年には、宮内省に御歌所の設立をも見るに至つた。その昔、村上天皇が創設せられた和歌所の跡を復活せられたのである。この盛運たる、一に明治天皇の叡慮から出でたことを記憶せねばならぬ。天皇は常に大御心を和歌に寄せさせ給ふこと深く、溫藉な高調は拜誦するだに尊く、且つ御製の多いことは、歷代の天皇は申すまでもなく、遙に歌數の多いことを以て喧傳せられた藤原定家の上にさへあらせられた。

御歌所の歌檀は實に桂園派にあつた。桂園門下の高足八田知紀の門人高崎正風は設立以來の所長であつた。まして明治の初年には知紀を始めとし加藤千浪・近藤芳樹等があつた。稅所敦子・小出粲等も、またその名が聞えた。これ等はその流派をこそ異にするものゝ、多くは桂園派と同一樣の態度を取るものであつた。また井上通泰の如き、特に桂園派の研鑽に精しく、幾多の論著を出してその歌風を鼓吹する者もあつた。かゝる中に、海上胤平の詠はひとり異彩を放ち、御歌所一派の纖弱な歌風を罵つて、剛健雄渾な萬葉風を主張した、されど遂に眞淵の上に出づることは難くあつた。

古文學復興の運動は尋いで來つた。歌壇もまた活躍の氣を帶びて來た。新思想は新體詩を起すと共に、和歌の舊詩形を放棄すべきでないことを知つた。なほ俳句が新思想の器たることを知り得たと同樣である。萩野由之の「和歌改良論」、森田思軒の「和歌論」「詩歌文章の神韻」「和歌と漢詩との比較研究」などは、この趨勢の下に現はれた論議であつた。この氣運に乘じ歌壇の一新調を齎し來つて、所謂新派の旗幟を鮮明にしたものは、「孝女白菊の歌」の作者落合直文である。青年の歌人は翕然として之に趨つた。淺香社はかくして成立した。社中でその名の知られたものは、與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・服部躬治・大町桂月・鹽井雨江・金子元臣・久保猪之吉であつた。直文その人の詠は

必ずしも新思想といふことは出來なかつたが、その題材の廣いことは所謂舊派歌人の比ではない、その用語といひ、その形式といひ、皆新しい色彩を帶びてゐた。作者自らが歌人として詩人としての境遇を詠ずるものは古歌には見えなかつたが、直文は歌つて曰はく、

時雨ふる旅の宿りのつれ〴〵に
　歌かきつけぬ菅笠の上に

と。海士や樵夫の境遇を詠じた歌は古歌にもあつたが、人物そのものを詠じたこと、

觀音を刻む佛師の小刀の
　光もさむき燈火の影

の如きものはなかつた。加之、直文がその徒を指導するは全く從來の歌人が爲す所と異なつてゐた。曰はく、余は題を出せども新しい題のみにて古き題を出さず、その新しい題も、たゞその大體の目的を示すのみにて、その精しい方面の事をば勝手氣儘に習はしめる、これまでの經驗によれば、その方が進歩の早いばかりでなく、何れもその肺肝より考へ起して詠むが故に、歌おのづから活氣を帶びて、優れた詞も出で來るのであると。その歌題は實にその言の如く、「丹躑躅のかげに白き蛇ねぶれり」「壁にたてる琴の緒自らきれたり」などの如きであつた。

更にこの傾向を甚しからしめたものは鐵幹である。男子の歌の振興を以て己が任となし、新體詩の作と共に『東西南北』及び『天地玄黃』を著はした。時たま〳〵日清の戰しかも韓山にあつた彼は悲憤慷慨の叫びをなし、また常に「虎」「太刀」「鷲」等の辭を用ゐて、ひたすら强大剛健の調をなさうと努力した。よし平俗の嘲を免れず衒氣篇に充つるものはあるも、その漢語俗語を自在に使役するの一事は、以て手腕を示すに充分であつた。

鐵幹がかゝる急進を以て和歌の革新を叫ぶ時、漸進の態度を以て、舊形式をも新形式をも併せて採用しようとする竹柏園一派があつた。これこそは佐々木信綱の主宰する所。信綱は『千代田歌集』の撰者弘綱の子、かの國文學復興の氣運に際し、『日本歌學全書』を編して歌界に貢獻する所があつたが、二十九年頃から「めざまし草」誌上にその詠歌を發表した。詩思聲調共に穩健にして、かの鐵幹に見るが如き奇矯のものを見ない。用語の如きも、漢語俗語の使用を敢てせず、從來の雅語を取つて力めて新樣を出さうとする。されば、これに學ぶ者も極めて廣く、特に上流社會の女流がその多きを占めてゐる。三十四年の『竹柏園集』の撰集は、よくこの派の體を代表したものである。雜誌「心

の花」を出して、その勢力を廣めた。信綱その人の詠は『思ひ草』『新月』等に於いて見ることが出來る。

鐵幹信綱が二方面から和歌の革新を唱道するや、正岡子規は俳句革新の餘勢を以てまた來り加はつた。子規の努力は俳句によつて成し得た客觀的趣味を、和歌の上にも移植しようとするのであつた。彼にあつては和歌と俳句との間には、何等の別をも置かなかつた。俳句の長いものは和歌、和歌の短いものは俳句であるとも說いてゐる。蓋し、俳句と和歌との境域は、遠い以前から全然相背反するものとせられ、俳諧道の境は到底和歌者流の覗ひ知る所のものではないとせられてゐた。子規はその固陋を破らうがために、「歌人に與ふる書」を草して、大いにその主張を明かにした。子規はまづ歌壇に對して俳諧の取材範圍をも寄與し、自らその調和者を以て任じたのである。更にその詠は趣味を自然に求め、手段を寫實に取ることを求めた。かゝる態度を持したものを過去に尋ねて『萬葉集』を得、また井手曙覽を得、更に備前の歌人平賀元義を得た。こゝに於いて、その歌風を宗として邁勁の調を成し、これと共に俳句の緊切なる句法からして從來歌詞の弊であつた冗漫をも救ふことが出來た。子規はその吟詠を公にすると共に「歌人に與ふる書」についで、幾度か縱橫の言をなして歌壇を罵倒した。然しながらその運動は俳句に於けるが如き效果を及すことが出來なかつた。たゞ、三十二年に興された根岸短歌會には、香取秀眞、伊藤左千夫等の相集ふものがあり、子規の歿後には機關雜誌「馬酔木（アシビ）」を出してゐます〳〵『萬葉集』の態度と古語とを取つて、更にその思想をも襲はうとするに至り、佶屈の調の漸くその陋弊に陷るものもあつた。

明治の和歌壇の革新が、この三方面からその緒に就いたことは略〻これを盡した。更に顧みて三十三年鐵幹が新詩社を起した當時から敍述せねばならぬ。この新詩社の標榜する所は、自我の詩を取れといふにあつたが、兎に角に陳套を破れ、傳習を棄てよ、そして動の如き深い意義によるものではなかつた。言は必ずしも四十年以後に起つた運て自ら認むる所の我を吐露せよといふのであつた。それは當時勢力のあつた硯友社一派の文藝とは全く異つた色調であつた。しかもその雜誌が所謂ヒーロー二個の價即ち當時行はれた卷煙草の價を以て頒つといふ粗雜な體裁であつたことが、また當時の青年を魅する一つであつた。かくて鐵幹は奔放熱烈な情を詠じた、しかしそれは『東西南北』時代の如き「太刀」や「虎」の假面を借つての剛健ではなかつた、皆心裏自然の聲、小生の詩と題せるのが即ちそれである。

その雜誌の體裁が漸次改つて、歐洲文藝も紹介せられ、歐洲名書も挿入せられて、從來

に見難いものを出す頃には、鐵幹の詩も亦新になり行きて、時事を諷し世相を歌はないやうになつた。之に代つたものは戀愛の強い深い情緒であつた。實にこの時ほど西洋詩趣から來る戀愛の讃美せられた時はない。人生卽ち戀愛とまで極言せられた。かの新體詩界に於いて、星菫時代を劃した趨勢は、和歌に於いて一層甚しきを加へた。鐵幹の戀愛歌にて一として「星」「菫」「百合」「紅」「紫」などの語の含まれざるはない程であつた。もし夫れ、鐵幹門下にして、妙齡なる女流作家鳳晶子に至つては、更に激しいものがあつた。

晶子は恐らく當代の鬼才を以て許すべきものであらう。才鋒は早くその作にほの見えて居つたが、その戀愛を歌ふに及び、熾烈の情よく有髯男子をして後へに瞠若たらしめるものも少くなかつた。素よりそれは人目の關を避け、世の口の端を怖れるが如き態度ではなかつた。何等の忌憚もなく、自己の熱情を表現し告白せんとするものであつた。鐵幹の『紫』について出された『亂れ髪』一篇がやがてそれである。『小扇』の集もまたそれである。されば、晶子の詠を讀んだもので、その用語の放膽その形式の變幻に驚くものは、未だ晶子を知らざるものであらう。紅恨紫怨その懊惱の情をのみ取るものは未だ晶子のすべてを解せざるものであらう。卽ち『亂れ髪』や『小扇』や皆戀に活きんとする女の努力の聲であつた。戀のためには舊道德も舊習慣も燃し盡さずば止まざらんとする情火の閃き、舊道德舊知識に對する反抗挑戰の聲であつた。もし夫れ

やは肌のあつき血汐に觸れもせで
さびしからずや道を說く君

といへる一首を誦すれば、よく他を推するに難くはなからう。しかしながら、その戀愛觀も感情の上に立てられて、理智の後に出でたのではなかつた。故に、その末は漸く振はざるものとなつた。これは新詩社すべての傾向であつたが、しかも晶子の才華は、一轉他の境を開拓して、悠々としてその詩思を發展して行くことが出來た。

直文の門下で鐵幹と共にその名を知られたものに薰園がある。平正の調を以て敍景に巧みに、よく直文の風貌を傳へてゐる。尾上柴舟もまた溫藉の作をなした。前者に『小詩國』『凌宵花』があり、後者に『銀鈴』『靜夜』の著がある。柴舟はまた新體詩をも試み、「ハイネの詩」の飜譯がある。

はじめ新派の起るや、新舊兩派の間に論難攻擊は盛んに起つた。二者各、おのが長を說き他の短を發いた。されど、この期を終る頃には、その特色たる淸新と溫雅とを合せ、平淡と熱烈とを合はせ、相依りて褊狹に失せず放逸に流れざるものを生ずるに至つた。

新詩社の活動は一に新派の基礎を堅くしたのみでなく、また和歌界の全般に革新の實を擧げしめた。さらばかく完成の域に近づいた歌壇は、いかなる推移をなすべきか、新體詩と發展を共にすべきか、或は後に殘留せらるべきか、それが問題である。

第五章　新體詩の隆盛

日清の戰雲のまさに深き時、國民熱狂の情はまづ發して新體詩となつた。二十八年二月「旅順口の英雄可兒大尉」は「帝國文學」に現はれた。『新體詩抄』の作家の一人たる外山正一が再來の詠であつた。尋いで「輸卒」「忘るゝな此の日を」などを出した。その詩形は最も放膽な試を以てし、七五・五七調の舊套を破り、現代語を使用せんとする一種の散文詩である。これを名づけて朗讀體といふものは、表情を含める朗讀法によつて無韻無律の缺陷を補はうとするからであつた。これと同一の主旨によつて、上田萬年、中村秋香・阪正臣等によつて試みられた作は、正一の詠と共に合はせて『新體詩歌集』の出版となつた。されど、その運動は一の論爭の的となつたに過ぎなかつた。

『詩抄』の作者の一人井上巽軒、また丹後風土記中の傳說を題材として、長篇の詩「比沼山の歌」を出した。漢語俗語に亙つてその語彙を豐富にせんとすること、なほ正一と同一の態度を取つたが、從來の七五の舊型を用ゐた。これも用語の蕪雜を以て、さまでの賞讃を博し得なかつた。

もしこれ等が生硬拮屈のために失敗せるものとせば、その弊から脫しようがために異調を取らず、七五五七の雅醇の調によつて溫藉の情を寄せようとするもの、從來の詩形によつて新思想を歌はうとするものが出でた。鹽井雨江、大町桂月、武島羽衣がそれであつた。三人ともに各〻「帝國文學」によつてその作を發表したが、やがてその詩文を合集して『花紅葉』と名づけて公にした。羽衣はまづ「小夜砧」にその名を知られた。遠く思を軍旅の人の上に馳せた少婦が、戰死した夫の靈に誘はれて、廢寺の荒塚中の人となることを敍した一篇、すべて幽韻の詩趣橫溢し、しかも西詩を飜案した斧痕をとゞめざる所に、三唱の價値がある。雨江はさきにスコツットの『湖上の美人』を譯したが、更に『深山の美人』の大作をなした。戀に破れ、世に倦みて、花の深山の奥深い草庵の主となつたやさしい女の身の上を歌つたものである。雨江は辭の彫琢を以てまさり、羽衣は想の卓逸を以て知られたものとせば、桂月は寧ろ氣の激越を以て稱すべきものであつた。

然しながら、三人ともに辭句の古雅を求むることは同じく、つひに擬古派を以て目せられた。この古雅を欲するために思想の空漠を來し、眞情流露を缺くに至つては、また朦朧體の貶稱をも受けるに至つた。しかも之に對へていふ、無味を避け露骨を斥けんとするには朦朧たらざるを得ない、かくて始めて詩たることを許すべきものであると。

これ等朦朧派に對し、擬古派に對して率直の情をさながらに歌ひ、かの纖弱な少女振りに對して、男子の調を以てしようとするものは、與謝野鐵幹であつた。鐵幹は、年少氣銳、豪放の語卷中に溢れ、多く韓山谿族の情を歌つた。子規の如きはその新體詩見本に於いて之を諷して「小楊子むづと手に執りて、喉笛見事にかツ切れば、ちよいと痛めど血は出でず」とさへいふに至つた。生硬平板を免れずとはいへ、また漢詩の脈を採つたなどは、詩壇に於いて多とすべきものである。その詩集は和歌と合せて二十九年に『東西南北』を出し、三十年に『天地玄黃』を出した。一集を加へる毎に進境の見るべきものがある。

子規亦竹の里人と稱して俳味に富んだ一種の新體詩精微な觀察になつた客觀詩を出した。そしてまた頻りに押韻をも試みた。雜誌「日本人」に於いて立論していはく、押韻は日本の詩歌に適せざるやうに我も人も思つたが實驗の結果名詞を韻にするの必要を認め、また押韻による三の利を知ることが出來た。狹い範圍に在るを以て却て自己の技倆を現はすに適すること、言語の範圍を限られるが爲に却て思想の上に惑を生ぜず、早く作り得ること、限られた韻語を探して韻語から思想を得るがために却て奇想警句を得ることが、それであつた。されど、その利といふことは、韻そのものから來る

ものではなくて、唯語句の配列に變化を生ぜしめた間接の功に過ぎなかつた。

三十年にはまた『抒情詩』が出版せられた。湖處子・嵯峨の舍・國木田獨歩・松岡國男・田山花袋の作を載せたもので、中にも國男の作が穩健をもつて時流を拔いてゐた。三木天遊・繁野天來の作も、この時に『松蟲鈴蟲』と題せる合集によつて公にせられ漢語俗語を自在に用ゐた點を以て稱せられた。新體詩界の勃興は、この際に於いて甚しく、「この花」及び「心の緒琴」などいふ專門雜誌さへ出づるに至つた。美妙もまた雜誌「大和琴」によつて捲土重來の勢を示し、中にも長篇「魔界天女」を連載して喝采を博した。

されども、これ等の諸作家も、島崎藤村には一籌を輸せざるを得なかつた。藤村の詩集は五十一篇の多きを收めて『若菜集』として世に出された。各篇いづれも既に「文學界」「帝國文學」等に公にせられた時に、とり〴〵に嘖々の聲價を得たもの。これよりさき、二十九年に「一葉舟」「秋の夢」に矚目せられ、雌雄の鷄をかりて世相を寓した「鷄」にその名聲は定まり、三十年の春「天馬」を出して詩界の覇を以て稱せられた。その形式は七五調であるが、牝牡の天馬が奇瑞を以て地に生まれしも人に知られず空しく鞭撻の苦楚を嘗めて、私に天界に憧憬するあはれさを詠じた高遠の理想奔放の想像清新の用語が、蓋し他の企て及ばざる所であつた。藤村は更にその後の作を『一葉舟』と『夏草』とに收めた。

これ等を通じての詩想は戀愛と藝術とに活きんとする努力であつた。藤村は文學界派に屬してゐたが、その派は同人の一人が自殺の悲慘を來す程に、人生と藝術とに對して嚴肅な態度を持してゐた。當時は國家主義が一世を風靡し、實利主義が頻りに鼓吹せられた、その火の柱となり雲の柱となつてゐた基督教は四圍から種々の壓迫を受けた。かういふ趨勢はいかで文學界同人の滿足することが出來よう、在來の人生觀道德觀にいかでか慊焉たることが出來よう。こゝに於いてか理想に憧憬し、更に戀愛を生命とし、藝術に獻身せんとするに至つた。藤村が戀愛を歌ふや「おくめ」の如き「四つ袖」の如き、皆主情主義の上に立つて、觸れる所はすべて燃し盡さうとする情火に滿てるものであつた。藝術を歌ふや「晩春の別離」の如く、「月光」の如く、一として讃美と愉悅とに充たされないものはなかつた。然し、これは藤村の絶頂に達した時の聲であつた。それがまた何時となしと現實に觸れることが多くなつた。『夏草』の中に收められた「農夫」と題した長篇の牧歌的敍事詩は、やがて詩風の變轉を語つて居るものである。日清の役に於ける戰士が、歸り來れば相思の女は我を慕つて病死したといふを聞き、憂悶の餘りに一度は僧形に身を窶さうとしたが勞働によつて人生の苦悶を忘れるの道あるを知つて、飜然努力の生活に入らうとするに至ることを歌つたもので、それが三十四年

に出された『落梅集』に至つては、更に進んで人生の奮闘を主題とするものが多くなつた。「壯年の歌」「勞働雜詠」が卽ちこれである。さきの讃美詠歎の叫は、今は沈思冥想の呻吟となり、嘗て理想の影を逐つたものは、今は現實の洞觀となつた。まして藤村は信濃の小諸に隱れ、つひに詩筆を折り、後つひに小說壇上の人に轉じた。かゝる推移はあるものゝ、要するにその詩風は主觀的抒情的の語に盡きる。これに對して、剛健の詩風よく冥想的であり敍事的であつたものは、土井晩翠である。

藤村の詩風は題材の然らしめることとて、おのづから感傷的な傾向はあつたが、その模倣者に至つては徒にその末のみに趨つて形式の雅醇にばかり汲々としてゐた。されば評論壇に於いては、ホイットマンの如く、僞善を棄てゝ赤裸々に率直に衷情を吐露せよとの要求も出でた。古典を顧みず西洋趣味を顧みず、矯飾と模倣と作爲とを脫して、直に感傷の本に還り、肚裏一切の景と事と情とを、そのまゝに掴み出せといふ苦言も出でた。さらば藤村に代つて斯界の覇となつた晩翠の作は、果してよくこの要求に應じ得たであらうか。

晩翠は二十九年の末に「紅葉青山水急流」を「帝國文學」に出し、更に「萬有と詩人」「羌笛餘韻」等を出した。漢詩の脈を以て漢語を自由に操縱し而もその中に西詩の思想を寓する所、また哲學的思索を藏する所、當時これに比すべきものがなかつた。三十二年に詩集『天地有情』を出し、三十四年に『曉鐘』を出した。前集には「星落秋風五丈原」があるが、諸葛亮が出廬から哀雲深い祈山の陣營に至るまでを敍し、敍事と抒情と相依つて成れる渾然たる一篇の哀詩、六章三百五十句の長きに及んでゐる。後集には「萬里の長城」があるが、秦の始皇の悲慘な運命と清朝の凋落とを併せ詠じたものである。

晩翠の詩は、その人生と自然とを歌ふに拘はらず、必ずその中には或ものを藏してゐる。その詠ずるところは、皆苟安以て現實に立つものではなく、常に理想と光明とを追求してゐる。かの「登高賦」に於いて、十九世紀の積弊をば高風一掃して光と愛と詩との二十世紀を期待するが如きは、その好一例である。されど、理想の實現は難い、かの「富嶽の歌」に於けるが如き理想國を、我邦土の上に實現するのはいつの世であらうか。それは餘りに高く、餘りに遠くあつた。歷史の榮枯盛衰は、それを示してゐる。諸葛亮もさうであり、始皇もさうであつた。こゝに於いて、詩人はまづその想像の翼をかつて、詩歌の靈境に遊ばねばならぬ。晩翠の詩は、このやうにして成つたのである。然し、これもかの感傷の本に還れ、その衷情を吐露せよといふ要求に合したものではなかつた。藤村に於ける非難は、晩翠の上にもまた繰り返された。「曉鐘」の出でた三十四年は世評が

漸く晩翠から離れ行く時であつた。この時晩翠は歐洲に遊んだ。作は猶ほ引きつゞいて出で「亞細亞大陸回顧の歌」「ミロのキーナス」の如き、また相當に賞讃せられた。

藤村が退き、晩翠が去つた詩壇には、これに代るべき詩覇がなかつた。その名聲はもとより二人に及ばぬけれど、薄田泣菫があつて、後の活躍の間を繋いでゐた。泣菫は三十年の頃「花密藏難見」といふ戀愛詩を「新著月刊」に出して小藤村の名を成したが、爾來詩作は頻りに出でて、三十二年には詩集『暮笛集』を出し、三十四年には『行く春』を出した。その歌ふ所は、愛と詩とによつて人生を美化し醇化し、清淨化しようとするのであつた。そして、『行く春』に於いて、また注意すべきは、田園の興趣を傳へようとする牧歌的敍事詩の少からず見えたことである。泣菫はまた雜誌「小天地」を大阪に於いて發刊して諸家の作を載せたが、三十六年その廢刊となるや、鐵幹主宰の雜誌「明星」が代つてその位置に立つた。これに於いて、その作を發表するもの、鐵幹、泣菫以外、蒲原有明、平木白星、前田林外、岩野泡鳴があつた。この時は小天地派と明星派とを一にして、星、菫時代と稱せられた。その詩の題材は多く戀愛、その標號としては可憐可愛な「星」「菫」「百合」「髮」「紫」「紅」等をかり來つたからである。

詩形に就いて種々の工夫の凝されたのも、この時である。七五、五七は已に當時の詩思を盛るに堪へなかつた。泣菫が『暮笛集』に於ける八六の調は、『行く春』に至つて完成の域に近づき、更に七四、六五の調も試みられた。有明の「獨絃哀歌」は四七六の調から成り、前聯を八行後聯を六行となしたものであつた。いはゞこれ、ソネットともいふべきもの。鐵幹は『紫』に收められた如き每節不定の短句を錯綜した小詩形を試み、林外は「アメリカ彦造の墓」に純たる散文詩を試みた。

泣菫はさきにキーツに私淑して、その風韻を傳へ得たと稱せられたが、いつしかロセッチに之き、有明はロセッチを飜譯してその詩趣を語り、殊に「獨絃歌」の如きは、幽玄な神祕境に對する憧憬時劫の進みにも老いせぬ愛に思を寄せて、よくその風貌を髣髴せしめた。これぞ次に來るべき象徵詩勃興の兆をなしたものともいはう。もと象徵詩については、上田敏が早くから佛蘭西詩人に就いて語り、その詩を飜譯して世に教へる所があつた。「海潮音」に收めたのがそれである。有明が佛蘭西象徵詩に向ふやうになつたのも畢竟この誘導があつたからである。有明の詩集『春鳥集』には、その序に於いて象徵主義について說く所があつた。之に對して是非の聲は頻りに起つた。或は獨逸の象徵派の變遷から見て之を難じ、或はトルストイ・ノルダウの言によつて非難した。

この象徵詩風を以て主觀的方面に於ける活動とすれば、神話傳說を題材とする傾向

は客觀的方面に於ける活動と見るべきであらう。三十六年に鐵幹林外白星の合作から成つた「源九郎義經」が出で、ついで鐵幹の「日本武尊」が出た。この年、林外と泡鳴とは「明星」から分離して「白百合」を發刊し、詩歌の刷新を絶叫した。されどなほ、「明星」とその傾向を同じくした。有明は「國土創成賦」を作つて伊邪那岐伊邪那美二尊の事跡を歌ひ、泣菫は「雷神の夢」と「金剛山の歌」とにまた神話を齎し來り、泡鳴は「女護海島」また「豐太閤」を出した。殊に泣菫の「天馳使（アマハセヅカヒ）」の如きは、敍事詩として卓出した作、ミルトンやホメロスの史詩に近づくものともいはれた。白星には「心中およよ新七」があつた、戲曲小說の材料も新體詩に採られるやうになつたのである。さては泡鳴の冥想詩劇「海堡技師」は口語を以て謠はれ、山崎紫紅の「日蓮上人」の如き他に見ることの出來ない長篇をも出すに至つた。

顧みれば、詩壇の風潮以外に、幾多の佳調もあつた。高安月郊の作は「春雪集」に收められ、白星にはなほ「日本國歌」があつて帝國主義を歌ひ、林外には「夏花少女（ナバナヲトメ）」があつて華麗の辭また八七調四行八行二行の三節より成る新詩形を試み、河井醉茗に「塔影」があつて平淡の調をなした。そして、兒玉花外もまた「花外詩集」を出して、放奔熱烈の情を絶叫した。花外はこれより先に社會主義を鼓吹して「社會主義詩集」を出し、發賣禁止の厄に遭つたこともある。

三十七年、詩壇はまた一遊星を加へた。小說家の泰斗露伴が新體詩の處女作「出廬」を出した。これは「心の跡」の序として出したもの。詩と世と共に悅び愛すべく、實現と空想と相卽き相容るべきを詠じた。理を敍して精細、辭を行る自在、かの詩作に專らにして空しく詩形の末に齷齪するものゝ企て及び難いところがある。或は國詩始めて現ると絶賞するものさへもあつたが、これにつぐべき篇は出でないで終つた。

第六章　劇壇の消長

二十六年に「史劇論」を草した逍遙は更に二十八年の初から史劇『桐一葉』を、二十九年から『牧の方』を「早稲田文學」誌上に連載し、三十年には『沓手鳥孤城落月』を「新小說」に出した。

「桐一葉」は片桐且元を主人公となせる悲劇で、七幕十五場から成つてゐる。且元が、一方には大坂城内の姦臣大野父子等の讒謗に苦しみ、つひに衷心の苦計施すに由なく、後事を木村重成に託して居城茨木に退隱する始末を主題とし、これに配するに淀君の猜忌狂憤、また且元の女蜻蛉が重成に對する可憐の戀を以てした。これは我が過去の劇壇に於いて見られなかつた好箇の史劇で、事件はよく統一せられて從來の如き散漫な點なく、人物も亦各特殊の性格を具して類型に甘んずる所なく、しかも修辭の巧妙の誦すべきものがあつた。されど、評論壇には幾多の非難も起つた。それは多くは且元の性格に關するもので、或はその因循の態度、その淺はかな煩悶は、到底悲劇の主人公たるものでないといひ、或は歷史に拘泥して劇の本質を沒却したものであるといふのであつた。しかし作者はもとよりその言の起るべきを期してゐた。作意は他に存してゐたからである。作者は、且元の悲劇は性格に因緣する所が少くて、境遇に因緣する所の比較的に多きに心を牽かれた。卽ち性格悲劇を欲せずして境遇悲劇を求めたのであつた。且元の悲慘な境遇に歷史的倫理的劇詩的感興を覺えた上は美學上の約束の如きは必ずしも履行するに及ばぬものと信じた。性格悲劇にはなほ他に事件の發展を示すべき法もあれ、これは人を主とせずして事を主とし、局面の變化を多くして、然る後に翕然大團圓に至つて收むる所の從來の作風の、却て境遇悲劇に適するものとして採り用ゐた。

しかし、作者は批評の言によつて且元の誤られんことを恐れ、これが後段を書き加へて、その性格を明かにしようとした。『沓手鳥孤城落月』がそれである。されど、境遇悲劇たる本來の作には、何等の變化を及さなかつた。そして作者自らはいふ、もしこれを性格悲劇と見ば、前の『桐一葉』と同樣、且元と淀君との雙頭の性格悲劇であると。この作は三幕七場から成り、且元の最後と、大坂城の陷落とを示してゐる。且元は老獪家康の在世中は策の施すべきものなきを知り、彼が他界を待つて兵を擧げようとするけれど、かれに達觀の眼なく、しかも重病のために事すべて志と相合はず、遂に落城となり、淀君母

子の最期となり、悲憤の極城門前に落命するに至る。殊に、淀君が狂亂の場の如き、いふべからざる悲慘の氣を齎すものがあつた。

『牧の方』は北條時政の後妻牧の方を主人公とした悲劇で、六段十七節から成つてゐる牧の方はおのが生める政範を寵愛の餘り、之を將軍になさうとして、千幡將軍及び尼將軍政子、またおのが策謀の妨となる義時を殺さうとする隱謀を抱いたが、義時のために早くも之を看破せられて、遂に自殺するに終る。おもふに、鎌倉時代は歷史上に於いて。最も闇黑な時期とて、作家は之を利用し、牧の方を假り來つて縱橫に歷史上の機微を描き出さうとした。而もこの脚本はこの篇を以て獨立するものではなく、『源實朝』及び『左京兆』と相まつて三部曲とし、以て義時を主人とせる一大史劇を作らうとしたのである。故に牧の方は此篇の主人公にして、必らずしも然らず、すべての者の死と滅亡とを莞爾としてうち眺めて他日の大望を收めんとする梟雄義時の片鱗を示現する端役に過ぎなかつた。されど、なほその性格の明かなる、その事件發展の緊束せる、これのみを以ても裕に劇壇を賑すことが出來た。『源實朝』と『左京兆』とは遂に出でなかつた。

今やこれ等の脚本及び後に出でた正行を主題とせる『二葉楠』等によつて、逍遙の史劇作風を見るの要がある。然しながら、その大體は略〻史劇論中に於いて、髣髴せしめられた。活歷の作風の缺陷を夢幻劇の長所を以て補はうと欲するのであつた。もとより史劇といふ以上史實の穿鑿は至れり盡せるものであつた。されど、活歷主義の如く、風俗の末に區々として役せられ、歷史の表面に屑々たるものではなかつた。成るべく歷史の裏を覘つて、そのかいなでの歷史に於いて期待し難い機微を穿たうとした。牧の方の隱謀がそれである。且元の忠不忠問題が歷史上未解決に殘れるに對して、一家の解說を試みようとしたのが、またそれである。然しながら、その史論家的態度が、勿論劇詩の本領に累を及すものではなかつた。近松と沙翁とに胚胎した一種のロマンチシズム、これを以て史劇の本旨とした。活歷者が寫實と呼び自然と呼ぶ形式上は姑く措いて、まづ內容情趣の自然を求めるにあつた。さりとて、近松の荒唐を離れ、默阿彌の淺俗を脫し、沙翁の形式によつて性格を描寫し、かねて因果應報の理を示し、不易の性格を現はさうとした。

これ等の作によつて、世は始めて眞の史劇に接することが出來た。之を模するもので、高安月郊の『重盛』の如き、『眞田幸村』の如きものが出づるに至つた。されど、當時の梨園の狀態は、直に之を上場することを許さなかつた。按ふに、當時の劇壇ほどに暗澹たる密雲に閑された時はなかつたらう。演劇の繁昌は幾多の觀客を得て、この時に極ま

り、しかも舊脚本を補綴するに過ぎず、藝術としては最も不振の狀態であつた。慥に改良といふは反動を呼ぶ下策新作は一切廢止、大小劇場を押通して舊劇舊歌舞伎の總ざらひ、今の見物に歌舞伎の氣を出さしめるのが改良唯一の方便であるといふ諷刺の言も出でた。これも畢竟文壇と劇部とが隔離して、新作家に舞臺上の知識がないため、また文壇の傾向も主觀的抒情的で、敍事詩的なるべき劇の發達に適應せざる爲であつた。大勢如何ともすべからざるを見るや、輿論の形成といふことも唱へられた。見功者劇評家文藝家等の具眼者の間に一定の時好を諧調して一の輿論を作り、新俳優の出づる日を待つて活躍しよう、新舊の調和の如きは絶望の至り、一に全然の刷新を要するといふのであつた。三十年六月に帝國大學及び硯友社派、早稻田派の間に組織せられた觀劇團はそれによつて起つたものであつた、されど何のなす所もなくて終つた。

同年櫻痴居士は歌舞伎座の立作者として『俠客春雨傘』を出した。それは狂言世界に爛熟した陳套の材料を齎し來つた故に、俳優には素より修練の技、何等難澁の跡もなく、實演としては成功した代りに、また一の新意匠もなく、新思想もないものであつた。

劇壇が一般にかういふ狀態にあるので、かの壯士劇も漸くその基礎を堅くすることが出來た。そも〳〵壯士劇たる、第一期民權自由の論が唱道せられた當時に胚胎してゐる。激烈な政論は、やがて政府の壓迫を蒙り、所謂壯士の徒は或は落語家となり、或は講談師となつて、政府を攻撃し罵倒してゐた。その中で、角藤定憲、川上音次郎等は、また演劇の手段によつて政論を續けようとした。もとより彼等には劇について何等の素養があるのではない、唯柔道の型と俗臭紛々たる大坂仁和賀の模倣とを以て觀客を繫いでゐるに過ぎなかつた。そして、劇中には必ず法廷の場、演說會の場を設けて、その得意とする所の辯舌を弄した。脚本の蕪雜生硬は言を俟たず、藝術として價値のないことは當然であつた。されど、この壯士劇なるものがあつて明治の生世話物は始めて出でた。從來演ずる所の世話物は、到底現代に觸れるものではなかつた。その缺陷に乘じて壯士劇は兎に角に成立した。されど、千篇一律の弊は世人の倦怠を招いて、一旦沒落の域に陷らうとしたが、それを窮命の域から救つたのは日淸戰役であつた。彼等は直ちに戰爭の狀況を舞臺の上に移し、題して「戰爭見聞誌」といふ。かくて戰爭劇相踵いで出でて大いに好評を博し、堂々として歌舞伎座にその旗幟を掲げるまでに至つた。ひとり戰爭劇に於いて成功したばかりではない、多年の練磨はこの時に發して、明治の新世話物、卽ち從來の政治劇とは全然趣を異にした新社會劇を成して、明治の社會狀態を活寫することが出來るやうになつた。壯士劇はこゝに於いて新演劇と稱せられ、壯

士役者は新俳優と稱せられるに至つた。

三十三年その主領たる川上音次郎は歐洲漫遊の途に上つたが、新演劇は愈〻發達して行つた。殊に注意すべきは、近松の復活がその新俳優の手で着手せられたことである。これは伊原青々園の主唱で、伊井蓉峰河合武雄によつて上場せられたのである。青々園はいふ、現時の脚本界の寂寥は如何ともし難い、故にまづ脚本改革の方便として近松の世話物をそのまゝに演ずべきである、その性格の鮮明にして心理的に深刻なるは、新時代の觀客の要求する自然の趨勢であると。三十五年の春『天の網島』を上場せしを手始として、『堀川波の鼓』『戀八卦柱暦』『心中宵庚申』『冥途の飛脚』など、近松の作意をそのまゝに現はし、科白衣裳もすべて元祿時代を實現しようと力めた。されど俳優の技倆はいまだ之を完全に成すことが出來なかつた。たゞこれによつても脚本の沈滯と新俳優の技術の進歩との、比較的に速かであつたことだけが認められる。

實に脚本の沈滯は甚しかつた。三十二年、左團次によつて上場せられた松葉の史劇『惡源太』は到底傑出せる作ではなかつたが、新作といへばまづそれに指を屈せねばならぬ狀態であつた。三十四年月郊はイブセンの社會劇として『社會の敵』と『人形の家』とを世に紹介したが、何等の效果もなかつた。演劇の機關雜誌「歌舞伎新聞」が、永い歷史を有しながら、廢刊の厄に逢つたのも、この間である。

三十六年、音次郎は歐洲から歸朝した。この年から翌年にかけて、舊劇の明星團十郎、菊五郎、左團次の物故を見た。加ふるに、伊井蓉峰は鷗外の新作『玉匣兩浦島』を上場した。是等の出來事は少からぬ動搖を劇界に與へて、觀客俳優のすべてに一刷新の兆は起つた。音次郎は歸朝匆々『オセロ』の飜案劇を出した。作者は江見水蔭で、作そのものの價値よりも寧ろ舞臺上、興行上に於いて西洋劇の形式を採れることが、大いに人の好奇心を動した。爾後『ハムレット』『マーチャント・オブ・ベニス』『サフォー』『パオロ』『フランチェスカ』等の飜案劇が、續々として上場せられるに至つた。されど、これ等は實演としては兎に角に、作そのものとしては多大の價値は存してゐない。『玉匣兩浦島』に至つては、決して、さうではなかつた。

『兩浦島』は我が劇壇に於いて未だ試みられない新調を帶びてゐる。內容は浦島子の古傳說に盛るに新思想を以てして、新日本の將來を現はし、形式は七五調で、前の人物が七をいつて後のものが五をいふが如き、西洋の韻文式の脚本の呼吸を活きた例によつて示すものであつた。鷗外の新作『日蓮上人辻說法』もまた上場せられた。前者の如く七五調を取らなかつたが、よく日蓮の性格を現はし得て、沈靜森嚴の氣に充つるもの

がある。

月郊も亦『大鹽平八郎』『江戸城明渡』等の作をなし、また『闇と光』と題して『キング・リヤ』を飜案し、漣山人も『瑞西義民傳』と題して『キルヘルム・テル』を飜案した。されど劇壇にはこれ等以上の一新武器が加はつた。小說を脚本化する流行がそれである。この事はさきに大阪の劇壇に於いて現はれたが、今や觀客の好尙のあるところを察して、靡然として行はれた。三十六年、德富蘆花の『不如歸』は新俳優によつて演ぜられて好評を博し、爾後新派の忠臣藏の稱を受けるに至つた。ついで紅葉の『金色夜叉』菊池幽芳の『己が罪』鏡花の『高野聖』も演ぜられた。

舊俳優もこの趨勢に乘じて新興の氣を起し、三十七年には、大阪から上京した片岡我童は、中村芝翫市川高麗藏と共に『桐一葉』を演じ、尋いでまた『不如歸』を演じ、三十八年には本鄕座に據れる高田河合と相對抗して、幽芳の作『乳兄弟』を演じた。これがはしなくも新舊俳優の技倆を比較するに、都合のよい機會を與へた。新作物に對しては舊俳優は新俳優の好敵手ではなかつた。かくて新俳優の名聲は大いに上り、その演技は一箇の藝術として認められるに至つた。されど完成の域に達するまでには、なほ幾多の洗煉を經なければならぬことは勿論である。兎に角に、これ等の動搖によつて、文壇には

文學者と劇部の者との密接の關係を來すに至つた。從來歌舞伎が要求した舞臺上の條件は必ずしも採るの要がなくなり、之に代つて西洋劇の標準を以て臨むやうになつた。劇文學の勃興は隨つて來り、諸作家が脚本の飜譯又は創作に力めることが少くなかつた。小栗風葉の『豫備兵』柳浪の『目黑巷談』はその一例である。これと共に能樂は復活する、西洋音樂は輸入される、ワグネルが紹介され、歌劇の論が時めきそめた。かくて、この趨勢は日露戰役に會して、逍遙をして『新樂劇論』を草せしめた。

逍遙は『牧の方』『孤城落月』以來筆を絶つて專心育英に從事してゐたが、時運を見て再び蹶起し、多年の蘊蓄を傾けてこの新論をなした。時は三十七年十月。いはく國劇刷新の時期が來た。その刷新は根本的のものでなければならぬ。一體世界の各國が各〻その特有の美なる要素を發展し、醇化し、相寄與する事によつて、始めて世界全體の眞文明が集大成せられる。この意を推せば模倣は排すべき手段、折衷も亦特質を相殺し相沒する仕方、それ故に國劇固有の特性を發揮し、それを發展し醇化するを主とせねばならぬ。さらば固有の特性は如何にといふに、科白劇を主とする者と、樂劇を主とするものとがある。二者共に重んずべきも當面の問題としては、まづ後者の刷新から始めねばならぬ。樂劇を主とする傾向は、すでに能にも歌舞伎にも

振事にも見られる。されど、能や歌舞伎は過去の藝術、故に常盤津、長唄等に伴ふ振事劇を醇化し發展して、現代の好尚にかなふべき新樂壇を起すべしといふのであつた。この企圖を實現した『書生氣質』といふべきものは、卽ち『新曲浦島』である。

『新曲浦島』は浦島傳說を題材とせる三幕十二段の樂劇。浦島乙姫は皆過去の音樂を現はせる象徵、そして歸鄕後の浦島を慰める青年男女は又將來の音樂の象徵。浦島の老翁となるや、天明け旭昇るを見て、青年と共に將來を祝福するといふに終る。淨瑠璃のあらゆる節を取捨し、新樣の舞踊を配し、所々に科白を加へてゐる。いひしらぬ幻影に憧れる浦島、龍宮にあつてはまた父母の幻影に心迷ふ浦島、欵し來つて神韻漂渺たるものがある。尋いで逍遙は『新曲かぐや姫』を出し、爾來相踵いで新作を出した。かくの如くにして劇壇は建設の時代に入つた。

第七章　浪漫的運動

三十一年には「新著月刊」廢刊し「國民の友」その後を追ひ、「早稻田文學」もまた文壇から去るに至つた。そも〳〵文壇に於ける是等の萎靡沈滯は、いづこから來れる。一には實世間主義現實主義の汪流に發したのである。日本主義の唱道もまたこの現實主義の上に立つたのである。そして、その一轉する所は、卽ち個人の覺醒であつた。倫理道德の根本義に關する論議が頻りに反覆せられた。宗教論もまた頻りに現はれた。日本主義の主唱者井上哲次郎はいふ、教育界に於ける目下の缺陷は德育の不振であるが、それは基本をなすべき宗教の存在しないからである、しかも今日の宗教はいづれも不完全たるを免れない、たゞこの諸宗教が次第に融合調和して將來の宗教を胚胎すべきである、そしてかゝる大勢は畢竟知信の關係を內存的のものとし、實在の信仰を根據として實在論を立てる歐洲哲學界の趨勢に從ふものであると。されど、その知信の合一も實際にあつては未だしく、要は倫理道德に對する動搖であつた。その動搖はすべて個人の覺醒となり自覺となつた。今は紛々たる煩瑣の學風の下に躊躇すべき時では

なくなつた。たま〳〵獨逸の思想家フリードリッヒ・ニーチェの訃の傳はると共に、その傳記や學說やが直に紹介せられた。二者相依つてこゝに我が文學界思想界にロマンチック・ムーヴメントの勃興となつた。そして、その運動の先登に立つたものは、日本主義を唱へた高山樗牛であつた。樗牛は早くも文藝の解放を說いたものである。いはく煩瑣な學風は動もすれば趣味を沒し、人情を沒し、常識を沒し、亦動もすれば人生の大本に對してその統一的存在を打破する惧がある。この弊を救ふべきものは文學者である、なほ廿世紀の初期に於いて、詩人が蹶起してロマンチック・ムーヴメントを導き起した如く、今や思想感情の自由の爲に文藝の解放の爲に煩瑣の學風と形式的な德育とを破棄せねばならぬと。それがニーチェに會するや、個人の意義を明瞭にし、進んで個人が社會に對する反抗をも說くに至つた。そして、その反抗を强くするものは文學者でなければならぬ、しかも一代の文明を抱擁して自家の理想中に化育せんとする文明批評家たる文學者でなければならぬ。なほ一詩人にして獨逸の思想界を動搖しつゝあるニーチェの如きを要するとまでいつた。

三十四年六月には、ニーチェを說くものが他からも出でた。「フリードリッヒ・ニーチェ論」を「帝國文學」に連載せる登張竹風がそれである。その說くところは、殆どニーチェの思想を借り來つて、現代の道德文明を罵らうとするものであつた。國家主義、帝國主義に對する個人主義、歷史尊重主義に對する藝術主義、平凡なる教育方針に對する天才主義、善惡說に對する絕對的權威說、皆一として現代に對する反抗破壞でないものはなかつた。「非文明論」「非道德論」は相踵いで草せられた。世評は囂々として起り、贊否の聲は喧しかつた。樗牛は之に和して、益その筆鋒を銳くして、挑戰的、反抗的、破壞的態度を取つた。倫理學者を道學者として、宗教家を僞善者として、罵倒した。あゝパンを求めて與へられるものは石のみ、信仰を求めれば信仰の說明、哲學を求めれば哲學の歷史を與へられるに過ぎない。その求めんと欲する所は偉大なる人格、そしてそれは强大なる意力の發現である。その意力の發現は本能滿足となり、こゝに始めて生々存續の勢力を有して、宇宙發達の元氣の藏せられる所、人生至樂の境地を現し來るのである。道德から來り知識から來る滿足の情の如きは、畢竟假面のみ、僞善のみ。本能の滿足に於いて始めて絕對の價値は起る。吾等をして自然の子の如く語らしめよ、かの性慾の發動の醇なるものは、眞にこれ天下の至美、人生の至樂であるかとも叫んだ。謂ふ所の美的生活論が卽ちそれである。更に平淸盛を論じて、自我の滿足を外にしては眼中何等の價値を認めず、それを遂行した偉大なる人格として

推稱した。かういふ論には大なる矛盾がある事は自明の理であつた。されど當時にあつては、この論は理といふよりも詩として青年の間に喧傳せられた。青年は共に醉ひ共に歌ひ、そして共に夢幻の境に彷徨した。さきには「文學界」によつて鼓吹せられた主情主義に身を委ね、今は美的生活の詩に心を託した。新詩社の一派が星や菫を歌ひ、赤裸々な性慾を詠じたのもこれあるがため、舊道德舊思想に反抗する態度を取るに至つたのもこれあるがためであつた。この頃、キーツ・ロセッティの詩風が新體詩界に横溢したのもこのロマンチシズムの上に立てるものでなからうか。傳說神話を主題とする敍事詩の勃興したのも、またその主義の重要なる一要素として出でたのではなからうか。

美的生活論が文壇に及ぼせる影響は、たゞ之を一時の變現象として見るに過ぎなかつた。しかし、それが實行に移り、風紀を紊亂し、なほ遊蕩の兒に此上なき口實を假すに至つては、世の教育者倫理學者はつひに默することが出來なくなつた。最初はニーチェの推稱をば人道の敵として賤み、次ぎに國民の矜持を侮蔑せられるが如くに感じて憤慨し、混亂せる我が德育界の一大妨礙として激怒し、つひに「馬骨人言」を草したのは逍遙であつた。これは三十四年の十月から「讀賣新聞」紙上に連載せられた。匿名を以てし、

諧謔の筆を以てして、縱橫にニーチェを論じて、その思想の由つて來る所を尋ね、循俗の驅兒であると斷じた。竹風は直ちに之に答へて應答數次に及び、島村抱月も亦論ずる所があつたが、ニーチェの叫びはいつとはなしに漸く終りに近いた。

かゝる間に樗牛は個人意力の完全なる發現をば平清盛に求め、更に日蓮上人に求めた。日蓮の取るべきは我を高しとする點にありとした。この態度はやがて極端なる主我主義たらしめた。イゴイスト、人によつては此名前ばかりでも既に多くの罪惡を豫想する、剛情、我慢、私利、私慾、不人情、沒道義、これ等の聯想が起る。されどなほ自分は實際イゴイストであると告白するに至つた。人生の價値は我自ら造りて始めて價値ありとするに至つた。この主我主義の傾向は、樗牛その人にあつても、いつしか信仰の境に入つて晩年の飾りとなれる如く、文壇もまたいつか宗教の色調の濃かなるものを見るに至つた。これ懷疑の後に現はるべき光明のおのづから來らねばならぬ趨勢であつたのである。

基督教の大學傳道と稱して辻說法を始めたのも此時、德富蘆花、中村春雨等の宗教小說が愛誦せられたのも此時である。清澤滿之は雜誌「精神界」によつて心からの主義を立てゝ、心內に滿足を求め、一切の苦樂運命に對して、自省し、以て平安不動の地に到ら

んとする主張をなし、近角常觀はまた絶對他人、如來歸命、往生極樂善惡不擇の福音を宣し、伊藤證信も亦無我愛主義を鼓吹した。これ等は皆佛教から來つたものであつたが、基督教もまた新調を帶びて、海老名彈正等の進歩思想に集ふものが甚だ多かつた。姉崎嘲風の『復活の曙光』は神祕主義を唱へた。その說く方面は異なれど、これも宗教的情調を普く世に布かうとするものであつた。その傾向の極まる所は、卽ち三十八年五月雜誌「新人」に於いて公にせられた「予が見神の實驗」である。これぞ綱島梁川の筆。

「嗚呼吾れ一度神を見てしより、おふけなくも此の一大因緣を世に宣べ傳へんと願ふ心のみ日毎に强くなり行きて、而も如何にして之を宣べ傳ふべきかの手段に至りては放焉として闕けたり。如何にして目的を達すべき。顧みればわが見證の意識の超絶駭絶して幽玄深奥なる、到底思議言說の以て加ふべきものなからんとす。人の世の言葉や思想は其の神祕的具象的事相の萬一をだに彷佛せしめがたき概あるにあらずや」と。更に見神は一度にあらず、二度三度、その最後のものこそ最も驚喜の極であつたといふ。

「一燈の下小生は筆をとりて何事をか物し候ひし折の事なり、如何なる心の機にか候ひけむ、唯だ忽然はつと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成り、筆の動くまゝ墨の紙上に聲するそのまゝ、すべて一々超越的不可思議となつて眼前に輝き申候。この間僅かに何分時間といふ程に過ぎずと覺ゆれど、而もこの短時間に於ける謂はゞ無限の深き寂しさの底ひより堂々と現前せる大いなる靈的活物と、はたと行き會ひたるやうの一種のSshocking錯愕驚喜の意識は、到底筆舌の盡くし得る所にあらず候」と。

學者宗教家は之に對して交〻冷酷の批評を加へた。見神は所詮迷信、七月二十六日の夜に三體佛の上るを見るの類なり、催眠術によりても神は見らるべしと評する者もあつた。見神は幻覺なり、宗教は神と合一するを要す、神を見るの謂に非ず、神を求めんよりは一身を修むるこそ然るべき策なれともいはれた。されど、青年の間には、前の梼牛熱にも比すべき程の梁川熱が渦巻きかへつてゐた。その聲を聞いて、また自覺者なり豫言者なりと稱する徒も少なからず出でた。よしや將來の宗教は一般的なるべく、道德的なるべく、合理的なるべく、見神の實驗などといふ一時的のものにあらずして、始終靈的感應を有するものでなければならぬと論ぜられたにもせよ、つひにこの見神の言によつて、我が宗教情調は嘗て見難きほどの高潮に達した。梁川が法悅の人となりて、神子の自覺を持して死に面する病牀の苦をも忘れた時は、卽ち我が思想界が倫理の研究から主我的傾向、主觀的傾向を經て、つひに宗教的自覺に入つた時であつた。されば、それは理性と神祕とを合せ、智と情とを諧調する努力であつた。されど要するにさき

の主觀的傾向と相竝びて情緒的といふことが出來る。もとより理に卽すとはいへ、大勢より見れば、なほ情に傾くものであつた。よしその人は、かの主觀的反響をば直に神よりの聲を聽取して得た如くに妄想し狂喜するリヴイバリスト一流とは全然異なるものありと辯ずるも、畢竟情緒的と見るべきであらう。この情緒的はやがて一のロマンチシズムを形成した。この運動は創作の方面には動くこと少くして、たゞ思想界評論界にのみ活躍した。この運動の盛んなる時は文壇が最も寂寥を極めた時で、逍遙退き、四迷去り、思軒世を辭し、子規紅葉も他界の人となつた時であつた。かくの如きは、所詮、文學の大旋轉の來るべき兆を示したものであつた。文壇の蔭に於いて横流せるロマンチシズムは、やがて來るべき文學の諸條件を養成し化育しつゝある搖籃の地であつた。情の反動は理となり智となる。情緒的反動は知力的のものを作る。まして日露戰役は、かの主我主義を益〻旺盛ならしめて、愈〻現實に觸れしめた。現實的文藝は、かくして起つた。自然主義文學の勃興がこれである。而もこれが歐洲文學の轉移と同一の徑程を經たものである。我がロマンチック時代大嵐時代は、この意味に於いて重要なる時期を劃してゐる。そして、時を以てすれば、三十四年から八年に至るの數年間に過ぎない。

第八章　小說と實世間

觀念小說、深刻小說、心理小說の行はれるや、さしもの娯樂本位に立つた紅葉も『多情多恨』を草したが、作風又一轉し『金色夜叉』の稿を起すに至つた。高等中學生間貫一が、許嫁の女お宮が富の爲に己を捨てゝ他へ嫁するや、憤怨抑へんとして抑へきれず、世は所詮金のみと觀じ、惡辣なる高利貸となつて復讐する所あらんとした。宮はまた一度は富に眩惑したが、富を得て始めて戀の貴きを知り、煩悶の極幾度か貫一に哀願した。されど、貫一はなほ初一念を飜さずして金のために努力する、しかも宮が衷心の言に心のうち一脈の和ぎのほのめくものがあつた。紅葉はかくの如く敍し來つて、未だ終局をつけざるに、宿痾の惱み革つてつひに起たず、その腹稿を齎したまゝ、七度生れて文章のために盡さうとの遺言を殘して、遂に他界の人となつた。それが三十六年の秋である。

『金色夜叉』は、さきの『多情多恨』の筆致とは異なつて、その文章は絢爛を極めてゐる。構想も亦幾多の波瀾があり曲折があつて、一度は劇にも演ぜられた程に變化の多いものであつた。しかし『金色夜叉』の當時好評を博したのは、よく時勢の要求に投じたから

であつた。この作の初篇が「讀賣新聞」紙上に連載し始められたのは三十年一月である。この時は深刻小説・心理小説の餘弊の滔々として底止する所を知らぬ時であつた。不健全な作、不道德な作といふ譏が頻りに聞えた。狹斜小説の流行も、この時に起つた。こゝに於いて、實業小説・政治小説・社會小説等の要求は盛んになつた。要は實世間と小説とを接近せしめようとするものであつた。心理の末の區々たる努力、社會の皮相、一局部の觀察は用なき努力として斥けられた。兎に角に取材の範圍を擴大せよ、實業・政治・教育・宗教とあらゆる方面に着目せよと說かれた。『金色夜叉』はおのづからこの希望に觸れて居たのである。この傾向を更に强く持ち來つたものは、內田魯庵であゝ。

魯庵はさきに不知庵の號を以て評論の筆を執つた。今は一面に於いては小說の向ふべき所を論じながら、一面には創作の筆をも執つた。『暮の二十八日』は當時にあつては一般の作風と趣を異にしてゐる。事業に對して猛進せる青年が、一旦蹉跌して煩悶の極身を處する所を知らなかつたが、宗教の光に接して平和の生涯に入るといふのである。『今厭世男』『浮き枕』など、皆この宗教の情味を加へ、また之に一種の諷刺を藏してゐる。

然しながら、評論界はなほ憚らずとして、時代精神論となつた。三十二年に樗牛の唱へた所說が、それである。大なる文學は大なる人物と等しく、最も好く時代の精神を代表せるものでなければならぬ。さりとて世俗の好尙に迎合するの意ではない。ただ能く當代國民の感情及び欲求に最も明瞭なる發聲を與へ、その憮悅する所の前途に最もよき具象を附し、見よ爾等の理想茲にありと告ぐるものでなければならぬと。魯庵も亦いふ、今の小說家は身常に社會を離れるが故に、全く時代の精神を理解して居らぬ、政治・宗教・學術の社會は彼等に取つては風馬牛である。されば、その作は新聞紙の三面雜報を延長したに過ぎないと。露伴もまたいふ、作家として世に立たん者の作としては、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與へるものでなくてはならぬと。されど、時代精神論の如きは、その實甚だ空漠たるものであつた。時代精神の何たるは遂に示さなかつた。理想といひ精神といふも抽象的のみ、藝術の表現は個人化でなければならぬ、これ今の作家の試みる所であつて、謂ふ所の要求に應じて居るのではないかといふ異見も創作家から出でた。その論の當否はともあれ、小說壇には愈〻實世間と密接になり行く傾向は加はつた。その具體的要求は社會小說であり、政治小說であつた。宙外の『腐肉團』風葉の『政鷲馬』德田秋聲の『惰けもの』が、その代表の作品であつた。魯庵の『かたうづら』『霜くづれ』も、亦同じ風潮の上に成つたものである。されど、大

勢から見れば、到底紅葉等の技巧に及ばないものであつた。宙外の如きも、佳作は却て『新機軸』『影日なた』にあつた。それはさきの漢然たる社會問題を以てせずして、從來の心理描寫を加へたものである。それと同じ態度は柳浪にも現はれて、『縫ひ絲』『骨ぬすみ』『紫被布』『亂菊物語』等を出した。

この虛に乘じて、新聞小說家として各〻少からぬ讀者を有するものがあつた。皆一般文壇の風潮の外に立つて、俗衆の好尙に投じようとするのであつた。浪六が「朝日新聞」に出した『五人男』の如きは、五人の苦學生を敍して、依然たる遊俠の氣質を籠めた作であつた。弦齋の作は最も普遍的なもので『小猫』『深山の美人』等を出し、就中『日の出島』に於いて大いに喝采を博した。心理描寫が一卷を要すべき記事も、これにあつては僅に二三頁、話柄の豐富局面の變化皆筋を主としてゐるので、讀者を維ぐことは他の及ぶ所ではなかつた。遲塚麗水も亦『さんざ時雨』『照日松』に於いてその手腕を揮ひ、澁柿園は『島左近』『五月女坂』等に歷史小說家として漸次その技倆を開展しつゝあつた。

かういふ新聞小說の歡迎せられたのは、たゞ心理描寫や社會問題の仰山らしいものの避けられた爲のみではなかつた。一面には小說と道德との調和が考へられて來たからであつた。嚴肅な家庭に於ける趣味ある讀物を求める聲は、漸く世に高まつた。

少年に小波の御伽話を與へた如く、健全な小說を家庭に寄與するものゝ出づることが待たれた。社會小說の活動は、ともすれば社會生活の偏頗な一面暗黑隱微の方面に卽するやうになり、社會の敗殘者に對して同情し、罪惡を庇護する傾を有するやうにも見られた。その反動として起り來つた要求は、もとより如上の新聞小說を以て滿足すべきものではない。こゝに於いてか『不如歸』は蘆花によつて三十二年から「國民新聞」に出で、幽芳の『己が罪』は三十二年に『大阪每日』に出で、中村春雨の『無花果』は三十四年から「大阪朝日」に出でた。田口菊汀も亦『片男波』を「萬朝報」に出した。皆從來の罪惡小說から脫して健全な道德的趣向を具し、所謂家庭小說光明小說として世に喧傳せられた。この中でも『不如歸』は大いに嘖々の評があつた。されど、その內容は新舊思想の衝突を描き、夫婦姑嫁の關係を敍したに過ぎない。上流社會に材を取り、夫婦の間の戀愛を描いた點が從來のとは、稍〻趣を異にしてゐる。蘆花は更に『思出の記』を出し『黑潮』を出した。構想遙に前者にまさり、殊に『黑潮』の如きは、よく明治の社會の裏面を描寫し盡したものと稱せられた。春雨はまた『小羊』『密航婦』等を出して益〻宗教の情調を發揮し、幽芳は『乳兄弟』を出して淸新の興味を發揮するに力めた。草村北星の『濱子』といふは稍〻後れて三十五年に出でたが、またこの傾向をうけて精進主義活動主義を鼓吹してゐ

た。同じ作者の『澄子』といふのも、同一の主義から成つてゐた。宙外が方面をこそ異にすれ、その主張する田園生活論に立脚して、ひたすら田園の平和淡靜の趣味を傳へようとした『遺る光』『乳母が家』の如きも、同一型と見ることが出來やう。

時の先後をしばし措いて、かく數へ來つた家庭小說、所謂道德と文藝の調和の上に立てられた小說は、藝術上の價値はともあれ、讀者の範圍を從來よりも廣くし、また一般讀者社會の讀書眼を向上せしめたことは記憶せねばならぬ。

小說壇に於いて、かゝる趨勢が起つた時、全然背反せる態度を取るものが他に存してゐた。小栗風葉、小杉天外によつて唱道せられた寫實主義がそれである。風葉は硯友社の一人、紅葉の門人として華麗の筆を以て稱せられた。二十九年に『寢白粉』『龜甲鶴』を出すや、暗黑面に於ける錯雜せる戀愛を描き出して、評壇の論議を釀したが、三十一年に『戀慕流』『髮下地』を出して再び社會の暗黑面を敍し、更に三十四年に至つては『醒めたる女』『黑裝束』等を出した。『醒めたる女』の如きは、不倫不德の行爲をも赤裸々に描いてゐる。本能滿足說の盛であつた時とて、その風潮に棹した作であつたのである。

天外は初め緑雨の風を繼いで諷刺に長じ、はやくも『改良若旦那』等の作があり、『奇病』『卒都婆記』の如き佳作があつたが、三十三年に、かねて專心工夫した寫實の筆を執つて『初姿』を出し、『女夫星』を出し、『戀と戀』を出し、更に三十五年にはその主張を最もよく具象化した『はやり唄』を出した。

「自然は自然である、善でもない、惡でもない、美でもない、醜でもない。たゞ或時代の或國の或人が自然の一角を捉へて勝手に善惡美醜の名を付けるのだ。小說また想界の自然である。善惡美醜の孰に對しても敍す可し、或は敍す可らずと羈絆せらるゝ理窟はない。たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得せしむればそれで澤山なのだ。讀者の感動すると否とは詩人の關する所でない。」これぞ『はやり唄』の序に於いて作者の言つてゐるところである。『はやり唄』の題材は上流社會の不倫の戀愛、しかしそれが境遇と遺傳とに左右せられることを敍してゐる。これをかの序文と相對比して考へると、全然佛國の小說家實驗小說を標榜せるゾラの態度を模倣せるものである。

天外はまた『魔風戀風』を出した。寫實主義はますゝその極端にまで進み、現代の青年學生を主人公とし、その實際狀態をそのまゝに描寫しようと力めた。之に對して風葉はまた『青春』を出して、同一の材料を同一の態度を以て取り扱はうとした。されどこれにはゾラよりも、ツルゲネフのルーヂンの影響が少からず見える。

これよりさき、我が小說壇はニーチェから來つた本能滿足論に影響されることが多かつたが、更に西洋小說の影響はなほ甚しかつたと言つてゐた。而も、それはリットンやユーゴーではない。若松賤子にバーネットの『小公子』の譯があつたことはいはずとも、魯庵にゾラの『戰塵』の譯、四迷に『片戀』『浮草』『夢語』の譯があつた。『浮草』はツルゲネフのルーヂンにして、『片戀』もまたツルゲネフの作、共に當時を動かしたものである。文學界が南歐文學を唱へると、上田敏は近英のロマンチック文學を紹介した。涙香にユーゴーの作『レ、ミゼラブル』を『噫無情』と題して譯せるがあると、鷗外にアンデルセンの傑作『インブロヴィザルトル』を『卽興詩人』として譯せるもあつた。ホーソンの『緋文字』ドーデーの『走馬燈』デューマの『椿姫』ユーゴーの『鐘樓守』等またはいふ「吾等もし小說に渴ゑなばゾラ・ズーデルマン・シェンキーキツチ、凡て思ひまゝなり、何を苦んで今の紛々たる作家の子供らしき製作を要せんや」と。實にヨーカイ・グヌンチオ・ハウプトマン・モウパスサン・ゴルキー・イプセン・トルストイ等について云々せられたのも此時である。風葉天外の寫實主義の出でたのも、蓋し偶然ではない。

永井荷風が三十五年に出した『地獄の花』も、亦この趨勢に立つたものである。不倫の戀愛を題材として、本能滿足主義を表はしたもの。しかもその態度はゾラによつて、境遇と遺傳と相俟つて事件を發展せしめてゐる。荷風はまた『夜の心』を出し、風葉の『涼炎』德田秋聲の『春光』と相對峙して、ます〳〵本能と道念との衝突を描いた。

かゝる寫實主義の勃興に對して、戀愛以外本能滿足以外に人生の意義あることを示さうとしたもの、前にいつた『黑潮』が既にそれであつたが、また木下尙江の『火の柱』があつた。「人類の一員としては毫厘なりとも四海一家の大理想に此世界を近づかしめ、日本國民の一員としては進歩軍の別働隊として一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲するのみ」と。かういふ抱負の下に出された『火の柱』は、熱烈な筆を以て現代社會の不健全な思想を罵り、罪惡に充ちた政治界實業界を罵つて、その懷抱せる社會主義を宣傳しようとするものであつた。尋いで出した『良人の自白』も亦同じ主義によつて描かれてゐる。

こゝに別途から他の境域を開拓しつゝある鏡花のあつたことを忘れてはならぬ。『湯島詣』『黑百合』『高野聖』『通夜物語』『白羽箭』等の傑作を續出してゐたが、社會小說にも政治小說にも眼を注ぐことなく、ひたすらに自家特有の領域に向つて進むものであつた。もとより現代の壓迫に煩悶する者を敍し、一種の意氣を示してゐるが、而もその反

抗は空しく現實に對せずして、いつか超世間の夢幻境に入るのであつた。殊に文辭の優麗奇峭詩趣の充滿したものはあるが、時に晦澁朦朧作者の意の那邊に存してゐるかに迷はしめるものが少なくない。御伽話と同じものに陷いることがないでもなかつた。

こゝにまた、久しく筆を絶つた露伴が蹶起したことをも忘れてはならぬ。『天打つ浪』の大作が三十六年から「讀賣」紙上に掲載せられた。愈、出でて愈、高遠の理想を寓し、一道の宗教的情味を寄せ、その筆益〻雄渾、流石に群小を拔くの概があつた。されど、これも完結に至らないで終つた。かくして小說壇は自然主義の隆盛にうつる。げにその兆は已に花袋に見え、藤村に見え、獨歩に見えてゐたのである。

第四期　日露戰役後

第一章　評論壇の活躍

我國文學は上古に、平安朝に、鎌倉に、室町に、江戸に、各時代を劃して明治に入り、今やその第四期に入つた。然るに、こゝにわれ等は空前の大變動に會した。實に日露の戰役を軸として轉回した文學の推移ほど激甚なものはない。各時代の小なる區劃を撤して、これを日露戰役以前の文學と一括して、戰後の數年間の文學と對比するを至當と見る程に、戰後の文學は他の時代に紛れない顯著な特色を有するに至つた。その特色とは何か。これ實に國民的自覺更にいはゞ人種的自覺から出で來つたのである。日露の戰役は勿論わが帝國が二千五百年來築きあげた運命を賭した戰爭であつた。顧みれば、かの三國干涉に終りを告げた日淸役の如きすら、なほ世界に伍するの自覺を國民に抱かしめたものであつた。それが日露の戰役に於いては、更に世界の未曾有の捷利を得て、茲に世界の强國たるのみならず、また世界文明の發展に參與するの權あることを自覺せしめた。かくて白晳人種以外の人種を率ゐて立ち、彼と我との文明を渾融し

て、更に卓越した新文明の建設を期待するに至つた。日清戰役の後に起つた日本主義の如き小なる主張ではない。日露の戰後すべてのものに國民的色彩を帶びしめ、國民的文學を建設しようとするのも、要するにかゝる世界に潤歩すべきものたらんを欲する故である。從來たゞ彼土の新思潮の入り來るごとに動かされた思想界文學界は、我から進んで之を拉し來らうとする。

○かくの如くにして、戰後の自覺は我が國民をして世界の大勢に親しく接せしめるやうになつた。すべての動搖がこれに根ざして起つた。加ふるに國民の內的生活はすでに彼土の新しい傾向と共鳴すべき位置にまで進み、生活狀態の變移も亦所謂世紀末に觸るべきものを有してゐた。ニイチェ主義の鼓吹は旣に懷疑的個人主義的傾向を世に廣まらしめた。そして、これ等の傾向は、すでに一に歸してこゝに現實主義となり、これを文藝の上に見ては自然主義となつた。

藤村や獨歩の作品に自然主義の色彩を見たのは三十九年の初頭であつた。されど作者はもとより意識して之を自然主義の運動の先驅となさうとしたのではなかつた。それ等を自然主義と稱したのは、評論界がしたのである。然し、その名目が附せられてから、始めて確的なる意識に上り、その主義の宣傳は殆ど狂飇の如き勢を以て起つた。

最初は作品に發して、作品の形式論に上つたもの、つひに進んで舊思想の打破、舊道德の破壞となつた。創作界はつねに評論界の指導に從つて動いた。他に見難い評論界の異彩は、かくしてこゝに發せられたのである。

評論界に於ける自然主義論は、まづ藤村「獨歩」の作品の批評から始まつて、排理想排技巧の論議をなした。藤村の作『並木』に就いてモデル問題が起るや、それを緣として歐洲に於ける自然主義を論ずるものも少なくなかつた。その中に注目せられたのは、上田敏と田山花袋とが、各異なる見地から彼我の自然主義を論じたものであつた。敏は歐洲殊に佛蘭西の自然主義の消長を說き、それは已に三四十年前にその勢力を失墜したものであるとし、更に我國に於けるそれは彼の影響を受け、また模倣しようとするものではないかといつて、この新傾向のあることを難じた。花袋は我にこの主義の起るべき理由のあること、殊に歐洲の自然主義が我に入つて、我がものとなつて、わが日本の自然主義をなさねばならぬことを說いて、新傾向に就いて贊した。しかも二者共に自然主義の明確な概念に就いては示すところがなかつた。

その他の自然主義論の重なるものは、長谷川天溪によつて代表せられた。曰はく、形式打破、曰はく幻滅、曰はく無解決、曰はく排論理的遊戲と。要するに、わが從來の文學が

人生に根柢を置かず、文學の眞義に遠ざかれるを痛切に深刻に叫ぶものであつた。舊思想を打破し舊套を破毀しようとする努力であつた。幻影や空想やこゝに消滅して、現實の慘憺たる事相を親睹する、絶望となり無目的とならざるを得ない、人生は所詮無解決のもの、それに解決を與へるのは一の遊戯に過ぎないといふのであつた。かういふ主張は三十九から四十年へかけて隨所に見られた。この破壞につゞくに破壞を以てせる反抗的態度は、やがて新に建設せらるべき文藝の素地を掃ひ清めるもの、怒號の聲の高かつたのも當然といはねばならぬ。

四十一年の一月「早稲田文學」は東西の事例により、理論から、また歷史から、自然主義の本體を論じた。かく明確にその概念を說いたものは從來かつて見なかつた所である。島村抱月は「文藝上の自然主義」と題して、まづ筆を日本の自然主義に起して、歐洲における クラシシズム・ロマンチシズム・及び自然主義の消長を說き、寫實主義と自然主義との區別に及び、さて自然主義の描寫の目的題材に就いて說をなしていはく「寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ、理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義は獨り眞を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命であり、モツトーである。自然主義から言はすれば、理想といひ、現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にしか立たない。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の選擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。なまなか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奥な自然の味に觸れ得ない。是等の上に立つて第一義の標的となる者は眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。然らば、かやうな第一義の眞は、たゞ深い高いといふだけで、明かに手に取ることは出來ないのであらうか。これと第二義の理想現實などいふものとの干繫は如何。之に對する答は、やがて自然主義の題材論である」と。かくて題材は社會問題と連り、個人主義と連り、根本道德問題に入る、これ自然主義が近代的傳習破壞的である結果であつた。また自然主義が自然といふことから、現實に連り、科學に連る、科學は心理學、生理學、進化論、現實は現實を現實として寫すために一切人工虛飾の分子を擺脫しようとして、赤裸々なる人間野性醜を採るといふのであつた。

これと共に、相馬御風はモウパスサンの自然主義、中村星湖はゾラの自然主義、片上天弦はフローベルの自然主義を論じ、白松南山は哲學上の自然主義としてブラグマチズムを論じた。從來自然主義のために東道であつた「早稲田文學」は、こゝにその主義宣傳の中堅となつた。もと自然主義のために努力せるものに花袋があり、天溪があり、泡鳴があり、生田長江があつたけれど、正面から正々堂々と建設の意を以て立つたものは抱

月であつた。泡鳴の活動も亦目ざましいものがあつた。全人的努力を以て藝術卽人生を論じ、大膽な自己中心思想の新人生觀を以て、新自然主義と稱して評論壇上を濶歩した。

その五月、抱月は更に『自然主義の價値如何』に就いて論じた。自然主義は凡そ三段に於いて一般思想と連なる。因習破壞・新機軸發揮といふ點に於いて、文藝は文藝の範圍で之を行ひ、道德は道德の範圍で之を行ふが、根本は一貫した思想の傾向である、之を第一段の連絡といふ。また一般思想が科學を重んずると同じく、文藝も現實を重んじて所謂理想を斥ける、之を第二段の連絡といふ。そして、吾人は之に更に第三段を加へて、直ちに絶對神祕の一物を指し、中間の說明を以て滿足せざらんとする宗教的傾向を、これ亦一般思想が旣成宗教から去つて求めんとする所あるに合期すると見る。そして是等の中心意義は絶對最上の一物を理想に求めるものが、偏に上に向つて終に人生を超越せんとするに反對して、下に向はんとする思想である。現實の中に直ちに絶對を見んとする東洋的傾向である。この第三段の境こそ美の最高所、生の本體であると。

かく一面に主張の言明があり、一面にまた創作家の活動も起つて、自然主義の勢力は愈〻盛になつて行つた。今はすべての評論は藝術對人生の根本問題に觸れないものはないやうになつた。生活の悲哀・生活の情味に就いても論ぜられるに至つた。天溪はさきに「現實暴露の悲哀」について說いたが、更に「悲哀の三相」に於いて、十九世紀の文藝は自我本位而もそれから溢れ出でた自然の聲は悲哀である事をいひ、また十九世紀初期の文藝に發した悲哀は自我發展の悲哀、寫實派文學の全盛時代のは自我勝利の悲哀にして、現代文藝のは自覺の悲哀であると斷じた。金子筑水は生活の情味は悲哀快樂といふ如き單調なものではなくて、複雜多趣を籠めてゐる。この生活の情味は生活の刺激者であると共に完成者である。故に及ぶ限り廣く且深く斯かる情味を經驗するが吾人の本望、また至願である、之を味ふことが深ければ深いほど益〻人生を味ふ所以であると說いた。

自然主義がこゝまで進んだ時に、大いに之に向つて反抗を企て、その殲滅を期するものも少なくなかつた。その雄將ともいふべきものは後藤宙外であつた。宙外は自然主義に對して、その無目的・無理想を難じ、悲哀痛苦が藝術の根柢をなすの非を論じ、天溪の『自然主義』及び泡鳴の「新自然主義」の著書に對して『非自然主義』を著はして大いに奮闘した。翌年に至つては、更に社會的活動を起さうとして、登張竹風と共に文藝革新會

を起して呼號する所があつた。されど、その效果は少なかつた。樋口龍峽もまた倫理學の見地に立つて之を難じ、田中喜一も亦具體理想主義の上に立つて之を非難した。されど如何せん、大勢はつひに自然主義に傾いて、それらが幾多の奮勵も更に何等の効が無かつた。

その主張言明の任務を果した自然主義の評論界は、その聲を潛めて靜かに自己を考察し批評し反省する態度を取るに至つた。嚴肅なる態度は愈〻加はつた。藝術と實人生の問題、觀照と實行との問題も起つた。藝術批評は一轉して、こゝに人生の批評となつた。その傾向の最も鮮明に見られたのは四十二年の狀態である。

藝術と實人生とを比較する時に、實人生を本位とする社會論的見地からするものと、文藝はまた文藝そのものとして見るべしといふ藝術的見地からするものとの別が生じた。自然主義はかくして分割點を見出し、現實描寫の論は發展して觀照の論となつた。觀照があつて始めて自然主義の作品は出づる、觀照の世界は卽ち藝術の世界であるといはれた。そして、論點はこゝにも亦生じた。觀照とは實生活の一部、それが全生活とは如何なる差を有するかと。この問が卽ち觀照對實行の論題であつた。四十二年の五月、或者は印象批評を說き、或者は人生に對する知性批評と感性批評を說き、或者は近世文壇に於ける評論の價値に就いて論じて、批評の態度の論議の喧かつた時、抱月は觀照卽ち人生のためなる事を論じてより、筑水の藝術と實人生との接觸點の論となり、德田秋江の藝術は人生の理想化なりとの論となり、龍峽の現實と人生との論となり、また抱月の第一義と第二義の論となり、更に宙外の人生と文藝の論、御風の自然主義最後の試練の論となつた。すでにして、抱月はまた懷疑と告白との論をなして、懷疑的人生觀の告白をした。論壇はこれによつて更に動搖を加へた。

四十三年に至つては、評論壇の趨勢は愈〻紛亂を極めるに至つた。前年の末頃から、小宮豐隆、安倍能成等の青年批評家が雜誌「ホトトギス」に據り「朝日新聞」に據つて、活躍をはじめた。それがこの年に入つては各〻新ロマンチシズムを說き、主觀の解放を說いた。自然主義論者の中からも亦主客觀の一致を說き、主觀の重んずべきを說くに至つた。要するに、全體の色調の上に於いて、著しい變易が見られた。

能成は自然主義に於ける浪漫的傾向を論じた。ひとり此論文のみではない。新ロマンチシズムについて說くものは、自然主義を以てロマンチシズムの反抗と見、その特色を外的物的自然的なりとし、この傾向は永續すべきものでない、更に再びロマンチシズムの本流に歸るべきことを說いた。これに對して、自然派からは、自然主義はその發

生の當初からロマンチツクの傾向を多く有してゐた、卽ちロマンチシズムの反抗ではなくて連鎖であると見るのであつた。されど、兎に角新ロマンチシズムまた新理想派に關する論議は、次第に強みを加へて來た。この趨勢は更に續いて四十四年にまで及んだ。

これに次ぐ四十五年には評論界はいたく沈滯した。二三の論議をなすものはないでもなかつたが、多くは口を緘して叫ばなかつた。已に開拓を了して種藝を創作界に讓るといふ態度があつた。自然主義を行き盡すまで行かしめて、わが功成れりといふ概があつた。されど、評論界の不振は、外に向つて新しい態度を主張した銳鋒を自己に擬して、自己を研究し解剖するに力めた爲でもあつた。最早や徒に新主義を鼓吹し新思想を呼號することが出來なくなつた。新傾向の藝術も亦更に小く狹く銳い主觀の上に立てられようとするものであつた。此に於いてか、思想界のすべては、生氣なく活氣なく、惰氣と壞頽とに包まれてゐたと見ることが出來る。しかも壞頽の裏面には世間一般のものよりも更に大いに更に高きものを求めようとする努力が潛んでゐた。さもあらばあれ、一たび小い狹い主觀の間に囚へられた評論界は、未だその求める新生面を開拓する事を得ないで、早くも明治と別れたのである。

之を要するに、この期に至つて評論界は眞の意味に於いて文壇の勢力をなし、しかもその評論界は自然主義のために終始するものであつた。評論の勢力はたゞに文界にのみ止まらず、廣く社會の全般にまでも及んだ。社會と文藝とはかくして接觸しかくして文藝院設立問題は議せられ、その結果として文藝委員會は四十四年五月文部省内に創設せられ、鷗外・蘇峯・露伴・醒雪・小波・青々園・柱月・篁村・敏・抱月及び上田萬年・芳賀矢一・藤代禎輔・姉崎正治・塚原靖・足立荒人の十六人が委員に任命せられた。かゝる出來事は實に空前のものといはねばならない。

第二章　自然主義派の小說

三十九年三月、島崎藤村は七年の久しい間隱退せる北信の地から出でて、長篇小說『破戒』を出版した。これよりさき『水彩畫家』『爺』『藁草履』等の詩趣深い數種の短篇を草して稍〻文壇に矚目せられた人の作は、たゞに自費出版といふこと以外、二年間の勞作といふこと以外、その內容を以て裕に一新時期を劃すべきものであつた。信濃國の飯山の一小學校教員が、その父の遺訓を堅く守つて、穢多であることを祕してゐたが、周圍の事情に迫られて、つひに自ら進んで告白し、こゝにこの偏見を持する社會から脫し、外國に移住して新しい光明に接しようとするに至る徑路を敍してゐる。或はその主人公の性格があまりに弱きに過ぎて却つて讀者の同情を減却する事もあらう。或はその敍述が精細に亙るの極、時に冗漫の譏を受ねばならぬものもあらう。然しながら、穢多といふ特殊の種族を題材として個人對社會の衝突を描き、また個人心內の苦悶を直寫した點は、遙に歐洲文藝界に於ける自然派の諸作品と脈を通ずるものでなからうか。また、この作品には、前期に於いて殆ど小說壇を風靡せる戀愛に就いて、敍する所の甚だ少

いことを注意せねばならぬ。さきには戀愛が興味の中心であつた、然るに今は更に大いに更に强い問題の人生に橫はつてゐることを知つた。生活の問題がそれである。實にこの作はそれに觸れ得て大なる價値を占めることが出來た。社會に生きんとする個人の深い意志、またそれから生ずる悲壯な葛藤の前には、戀愛はあまりに小なるものであつた。これまた歐洲の新しい文藝と始めて對等の發現を得たとも稱すべきものである。顯著な地方色の描出せられてゐる一事も、亦注目せなければならぬ現象である。飯山附近の年中行事や、歲事記のすべては盡くこの一卷中に包含せられ、文藝上の官能主義の特徵も發揮せられて、その印象を鋭く强からしめてゐる。見來れば、この作は一として新らしい色調を帶びてゐないものはなかつた。

この三月、國木田獨步の短篇集『運命』も出版せられた。その以前獨步には『獨步集』があつた。大膽に眞率に肉慾を描出せる『女難と正直者』の如き、驚きを要求せる『牛肉と馬鈴薯』の如き佳什も、その中にあつた。されど、多くは硯友社一派の絢爛な文辭と對比すべくもあらずとして默殺せられてゐたが、こゝに『運命』の出づるに及んで、溯つて『獨步集』も亦喧傳せるれるに至つた。『運命』は殊に作者獨得の感想を獨得の描寫を以て最もよく表現し盡したものといはれた。由來その文辭は精透深刻の趣致を有してゐる